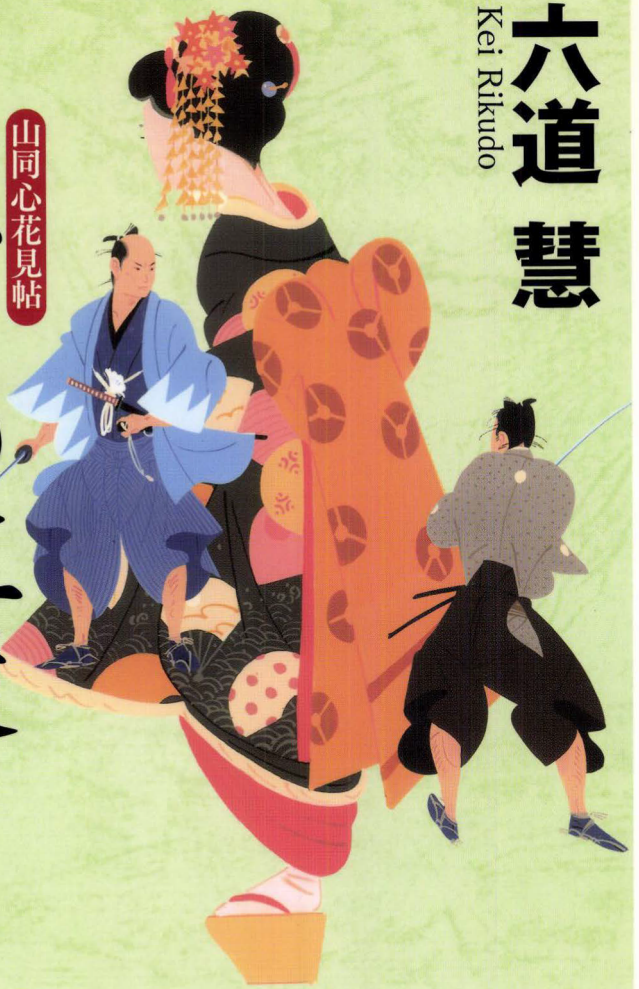
六道 慧
Kei Rikudo

山同心花見帖

まねきの紅葉（もみじ）



徳間文庫

徳間文庫

山同心花見帖

まねきの紅葉（もみじ）

六道　慧



徳間書店

徳間文庫

山同心花見帖

まねきの紅葉（もみじ）

六道　慧



徳間書店

目次

第一章　お尋ね者　5
第二章　新選組　61
第三章　敗けて勝つ　116
第四章　あだたぬ男　174
第五章　新しい古　225
第六章　紅葉賀　283
第七章　龍馬の遺言　340
あとがき　397
六道慧〈時代・歴史〉作品リスト　401

第一章　お尋ね者

一

「坂本龍馬じゃ」

「追え！」

役人の大声がひびいた。

慶応三年（一八六七）九月末日の早朝。

京の伏見の一角では、捕り物劇が始まっている。

佐倉将馬は田村美鈴とともに野次馬の一群に加わった。痩身の浪人と思しき男が、四人の役人に取り囲まれている。男は役人たちよりも頭ひとつ分ほど背が高い。顔を見て将馬は、思わず安堵の吐息をついた。

（坂本様ではない）

似ているのは背丈ぐらいではないだろうか。役人は手に持った人相書と照らし合わせている。たまたま人相書に近い顔立ちだったのかもしれない。

「似ておるな」

「きさま、坂本龍馬であろう。番所まで来い」

ひとりが羽交い締めしようとする。男は無言でそれを振り払い、刀を抜き放った。ほとんど同時に四人の役人は間合いを取っている。役人のひとりが持っていた槍で男の腕を刺そうとしたが、男はいち早く槍を刀で払いのけた。

「こやつ刃向かうか」

「抵抗する者は斬り捨てろという命を受けておる」

「かまわぬ。殺れ」

頭格だろうか。その命で三人は動いた。槍でひとりが威嚇の一撃を突き出すと、男はさがろうとする。そこに待ち構えていたひとりが、後ろから背中をつらぬいた。動きを止めた男の胸に、とどめの槍が突き出される。将馬は美鈴に見せないよう、身体で隠しながら野次馬の一群から離れた。

「京の田舎と言われる伏見で、かような捕り物騒ぎが起きるとは」

美鈴が独り言のように呟いた。野次馬たちも散り始めていたが、人相書を手にした役人が片っ端から呼び止めている。去年騒ぎが起きた〈寺田屋〉の近くだからだろうか。将馬は隣を歩く美鈴を、無意識のうちに役人の目から隠していた。

深草山と伏見丘陵の間の、わずかに低い谷のようになっている地が伏見である。西に鴨川、南に宇治川といった場所は、京に田舎ありと言われるとおりの景観を成していた。あたり一面は畑で所々に梅林や柿の木が見える。少し丘陵を登ったところから北の稲荷山にかけては、竹林が広がっていた。

晩秋の京は色とりどりだ。家の軒先には干柿が吊されて、宇治川には白鷺が舞い降りる。川面がきらきらと煌めくさまに、見惚れることもしばしばだったが……。

栄枯盛衰は世の倣いか。

豊臣秀吉が築いた伏見城は、徳川幕府の手によって一木一石も残さず破壊され、その跡には桃が一面に植えられた。春には桃の花見の名所となっている。いずれにしても、繁華な鴨川付近に比べると、どこか寂しさを覚えずにいられない。

（ゆえに坂本様は、潜伏場所にしたのやもしれぬが）

なにげなく目を向けたとき、役人のひとりと目が合った。

「おい、そこの男」

すぐさま呼び止められる。

「いかような御用でござりましょうか」

いち早く美鈴が応えた。将馬は袴姿、美鈴は丸髷を結った御新造といった風情で、質素ではあるものの、こざっぱりと身なりを整えていた。若い浪人夫婦を装っている。

「ほう、訛りがないな。江戸から来たのか」

と問いかけた役人もまた訛りがなかった。年は四十前後、京の見廻組に加わった江戸の浪士といった感じに見える。先程の捕り物騒ぎにはいなかった顔だが、槍を握りしめた姿は友好的とは言えない。が、美鈴の美貌に相好を崩していた。

「はい。五日ほど前に京へ参りました。夫は佐倉将馬、わたくしは美鈴と申します。てまえどもは〈はなさかや〉という、よろずやを営んでおります。江戸の知り合いに是非、京の菊がほしいと頼まれまして」

「菊？」

男は怪訝そうに眉を寄せる。

「花の菊か」

確かめるように訊いた。

「さようでございます。かようなときに物好きなと思われるでしょうが、夫は花咲

爺と呼ばれるほどの花好き。戦のせいで永遠に失われてしまう花があるかもしれないと申しましたので、それではと覚悟を決め、訪れました次第です。要は自分が京に来たかっただけなのでございます」

答えながら美鈴は、素早く懐紙に包んだ銭を渡している。江戸でよろずやを営むうちに、素晴らしい商才を発揮するようになっていた。下手に口出ししない方がいいと思い、将馬は黙っている。

袖の下が効いたのだろう、

「数寄者というには、いささか若いようにも思えるが」

男はちらりと将馬を一瞥するにとどめた。物好きを数寄者と持ちあげたあたりにも、袖の下の効き目が表れているように思える。にやにやと好色そうな目を美鈴に向けていた。

「ま、美人の御新造がいれば、戦場も花を愛でる場となろう。なれど、気をつけることじゃ。京は決して治安がよいとは言えぬ。騒ぎに巻きこまれぬよう、くれぐれも用心するがよい」

「ご助言、肝に銘じます」

美鈴は男が持つ人相書に目を投げる。龍馬をよく知る二人には、似ても似つかない

別人に思えたが、むろん将馬は口にはしない。

「なにか騒ぎを起こした男なのですか」

美鈴がしらじらしい問いかけを発した。龍馬が美鈴とかつて男女の仲だったと知ったとき、眼前の役人はどんな顔をすることか。

「さよう。昨年の一月二十三日。そら、あの〈寺田屋〉において」

男は数軒先の見世を顎で指した。

「坂本龍馬なる土佐の浪士が、伏見奉行所の捕り方を短筒で撃っての。同心の二人を殺めたのじゃ。坂本の身の丈は、およそ五尺七寸（百七十一センチ）であるとか。かなり目立つ背丈の持ち主であるのは間違いない」

ふたたび将馬に目を向ける。

「五尺七寸はないようじゃが」

「五尺五寸（百六十五センチ）ほどです」

将馬は初めて答えた。こんなところで無駄な時を使いたくない。調べなければならないことが山ほどある。懐の手札を示せば早く解放されるかもしれないが、その判断は美鈴にまかせていた。

「背丈はやや近いが、人相書には似ておらぬな。だいたいが坂本の顔を知る者がおら

ぬのじゃ。この人相書もどこまであてにできるやらよ。わかっているのは背丈ぐらいでの。はなはだ心もとない話なのじゃ」

仲間に呼ばれて男は片手をあげる。

「繰り返すようだが、用心するのが肝要よ」

「御役目ご苦労様でございます」

腰を折るようにして頭をさげた美鈴に、将馬も倣った。離れて行く役人を見送った後、うんざりしたように美鈴は頭を振る。

「朝から何度、呼び止められたことか。数歩進む度に、『おい、そこのおまえ』となりますものね。街中が殺気立っていますよ。まあ、いきなり槍で突き刺されないだけ、ましなのかもしれませんが」

と騒ぎが起きた場所を振り返った。声を発することなく生を終えた男は、戸板に載せられ筵掛けされていた。薩長土肥の浪士だったのか、はたまた臑に傷を持つ身だったのか。番屋に連れて行き、詮議すべきだったのではないか。美鈴はそんな目をしていた。

「行こう」

将馬は小声で促した。

「まさに龍馬狩りよ。もしかすると、才谷様は京に来ておられるのではないか。あるいは京に来るという話が耳に入ったのか。奉行所はなにか話を摑んでいるのやもしれぬ」

用心して龍馬の変名を告げた。歩きながらも将馬は、つい美鈴の横顔を盗み見ている。危険だからと何度も止めたのだが、将馬たちに同道していた。一度言い出したら聞かない気質であるため、不承不承、許していた。江戸にいたとき同様、夫婦として動けるのは嬉しいのだが……いささか複雑な思いもあった。

（坂本様に逢うためではないのか）

ちらりと見たその視線に、美鈴は冷ややかな一瞥を返した。

「なんですか」

「あ、いや、あの桜だ」

慌てて、ごまかした。京の拠点として借りた家に戻る道すがら、必ず通る小間物屋の裏庭から、桜の枝が道に張り出している。生け垣越しに見える幹には、花好きには見のがせない忌まわしいものが育っていた。

「ウメノキゴケよ。幹にびっしりと生えているではないか。ろくに剪定もしておらぬのであろう。暮らしに疲れた女子のごとく、生気を失っているように見える」

「暮らしに疲れた女子とは」
美鈴の眉がぴくりと動いた。
「わたしのことでございますか」
「ただの喩え話ではないか。かように目くじらをたてずともよかろう。そなたは疲れた顔などしておらぬ。昔と変わらず、その、まあ、なんというか、昔のままよ」
昔と変わらず美しい。と言いたかったのだが、どうしても言えなかった。伝わっているはずだが、美鈴はふたたび冷たい目で睨めつける。
「はっきり言ってくださいな」
「いや、なんでもない」
頬が熱くなっていた。ふたたび件の桜に視線を戻した。
「幹の色が変わって見えるほどに、ウメノキゴケが生えている。あれでは息ができまい。人間で言えば鼻や口、皮膚といった場所を、ウメノキゴケに覆われているようなものだ。来春は花を咲かせられるかどうか」
足を止めたままの二人を不審に思ったのかもしれない。
「なんぞ御用でっしゃろか」
見世から中年男が出て来た。見世構えからして大店ではないが、おそらく主ではな

いだろうか。挨拶まわりをしたときには不在だったのを将馬は思い出している。値踏みするように二人を交互に見やっていた。

「ウメノキゴケです」

「てまえどもは〈はなさかや〉という、よろずやにございます」

将馬の言葉と美鈴の挨拶が重なる。主と思しき男は、ほとんどの男と同じく、美鈴だけを見つめていた。

「ああ、江戸からおいでにならはったいうのは、あんさんたちどすか。家内から話は聞いておりますえ。そこの切り通しを抜けて行かはった裏道にある家に、お住まいなんでっしゃろ」

顎で細い道の方を指した。御内儀はきちんと余所者の話を伝えていたようである。伏見はさして広い町ではない。できれば好意的な調子で、江戸から来た若夫婦の話が広まってくれればいいと思っていた。

「さようでございます。知り合いに京の菊がほしいと頼まれましたのが、こちらへ参りました理由です」

「菊の花ねえ」

主は、胡乱な眼差しを向け続けている。江戸から来た若夫婦に、大きな疑問をいだ

いているのはあきらか。まだ仲間たちは出入りしていないが、あらかじめ布石を打っておく必要があった。

「よろずやでございますゆえ、さまざまな頼み事を引き受けます。人捜しもやりますが、花捜しもいたします。その他にもお店の用心棒、貸した金の取り立て、あるいは京から遁がす遁走屋なども行うつもりでおります」

将馬の説明に、主は片眉をぴくりと動かした。

「遁走屋とはまた面白い商いですな。不義を働いた挙げ句、駆け落ちしようとする男女といった者たちも、逃がしますのんか」

やけに具体的だった。返答に窮した将馬を、美鈴が「わたしにおまかせを」とばかりに手で制した。

二

「話をお聞きいたしましたうえで、お引き受けするかどうかを決めます。中には奉行所に追われる方もおいでになりましょう。かような方々に関しましては、丁重にお断りいたします。用心棒役を引き受けるぐらいですから、遣い手を揃えておりますが、

奉行所に目をつけられるのは困りますので」

そつなく応えて、美鈴は続ける。

「先程の話でございますが、夫は無類の花好き。通る度にこちらさまの桜を見てはため息をつく有様なのです。このままでは来春は桜が咲かぬと嘆いております」

うまく話を変えていた。虚実ないまぜだったが、どちらかと言えば偽りの部分が多い。とはいえ、どこから話が洩れるかわからなかった。不審をいだかれないためにも慎重に応じるべきだろう。

「今年の春は咲きましたえ」

男はすかさず反論する。

「それはもう美しゅう咲きました。花の数といい、色といい、まあ、見惚れるほどでございましたよ。江戸から来たお方に要らぬ心配をしていただくことは……」

「最後の花になるかもしれません」

耐えかねて将馬は遮った。

「ウメノキゴケは弱っている木に生えると言われております。また花木は枯れる直前、今まで見たこともないほどの、美しい花を咲かせるのが常。それは助けてほしいという花の〈声〉ではないかと、わたしは考えております」

「ござる」や「それがし」といった侍言葉は、なるべく使わないようにした。あくまでも江戸から来た浪人夫婦を装っている。男は鼻で笑い、唇をゆがめた。
「ははぁ、江戸の花好きは、木の〈声〉を聴くんどすか」
「他の方は知りませんが、夫は聴きます」
美鈴は答えて、じりっと前に出る。
「いかがでございましょう。初仕事でございますから、特別に無料でやらせていただきます。お庭の手入れを〈はなさかや〉におまかせいただけないでしょうか」
無料のところで、ゆがんでいた男の唇がゆるむのを将馬は見た。吝嗇家が多いと言われる京人の例に違わず、締まり屋なのかもしれない。
「ほな、お頼みしまひょか」
二つ返事で、続ける。
「せいてせかんもんやねんけどな、お願いしますわ。ただ取っかかる前に、無料で行いますて、一筆したためてもらいますえ。江戸のお方はよう二枚舌を使いまっしゃろ。信用できまへんよってに」
京言葉できつい皮肉を投げられた。江戸弁よりもやわらかく聞こえる分、よけいぐさりと突き刺さる感じがした。

「仰せのとおりにいたします。ですが、なにぶんにも無料でございますので、暇を見ながらお手入れさせていただきます。宜しゅうございますか」

美鈴も負けていない。反撃しつつ〈はなさかや〉はそんなに暇じゃないんだと、言外に匂わせていた。

「おとなしそうな顔して、言わはりますな、あんさんの御新造」

主は苦笑いしている。

「はあ」

将馬も苦笑するしかなかった。

たとえ場所が変わっても、美鈴は変わらない。それでは後ほどと一礼して、裏道に続く細い道に足を向けた。

切り通しを抜けた裏道に借りた家は、間口こそ狭いものの、一番奥には二階建ての蔵まで付いていた。賊に襲われたときなどは蔵に逃げこめると考えて、少し店賃は高めだが決めたのである。

蔵の前の小さな中庭には、まだ色づいてはいない紅葉が、なかなか良い姿を見せていた。その庭を挟んで母屋が建てられている。

玄関を入って左側に、六畳間が二部屋に八畳間が一部屋。玄関の右側に八畳間と三

畳間。この母屋の奥、中庭を挟んだ先に二階建ての土蔵が設けられていた。もちろん風呂と厠、台所があるのは言うまでもない。江戸の町屋に比べると、広すぎるほどの家だったが、住むのは将馬たちだけではなかった。この後、江戸護衛隊の仲間たちが来る手筈になっている。

「ただいま戻りました」

美鈴が玄関を開けたとたん、

「お帰りなさい」

弟の佐倉将平が顔を覗かせる。玄関右側の八畳間と三畳間が美鈴の居室、左側を男たちが居室や茶の間として使っていた。美鈴の乳母・登代も同道を申し出たのだが、危険すぎるという理由で今回は来ていない。

「京は寒いと聞いていましたが、それほどでもないと思いました。これから寒くなるのでしょうか」

将平は二人に雑巾を差し出した。年は十四、天才的なからくりの腕を持っており、幕府内にその名を知られるほどになっていた。ここにきて急に大人びた表情を見せるようになっていたが、笑顔にはまだまだ幼さが残っている。なにかを作っていれば満足であるため、留守番を務めることが多かった。

「うむ。木々の色づき具合も今ひとつだった。色鮮やかなさまになるのは、少し時がかかるのではあるまいか」

将馬は敢えて先程の捕り物騒ぎは口にしない。血腥い話をわざわざ言う必要はないと思っていた。将馬が足を拭く間、美鈴は立ったまま待っている。家の中でまで夫婦のふりをしなくてもいいと思うのだが、頑として聞かないのだった。

〝ふだんの暮らしがつい出ますから〟

という美鈴の意見に従い、上野寛永寺の山同心を支配する目代・田村権右衛門の女を、妻として扱っていた。

権右衛門は寛永寺を取り仕切っている代官であり、表向きの禄高は百石取りで代々田村権右衛門を名乗っている。手付や手代、山同心といった配下を随えて、寺領の差配をはじめ、上野山内の警備や輪王寺宮一品法親王と呼ばれる山主――住職の警護などにあたっていた。

今年の春、二男や三男といった部屋住みの山同心に、出仕の命が出されて、江戸護衛隊なる組織が編成されている。頭取役を務めるのは勝義邦（海舟）だが、将馬には幕府の探索掛――密偵というあらたな役目も課されていた。

〝無事、御役目を果たした折には、手付を飛び越え、手付頭に任ずる旨、すでに上様

よりお許しをいただいておる〟

江戸を発つ直前、権右衛門から通達を受けていた。御役目を果たした折というのは、いつのことなのか。将馬が大怪我を負い、動けなくなったときということも考えられる。いずれにしても楽な御役目でないのは確かだった。

「建はまだなのか」

将馬は刀と脇差を外して、弟に預ける。

「はい。連絡も来ません」

「おおかた探索と称して、祇園や島原といった花街に繰り出しているのでしょう。一昨日、昨日と二晩空けましたからね」

今度は美鈴が雑巾で足を拭き始める。盟友の森山建は一昨日から、志士が集まる鴨川近辺に出かけていた。祇園や先斗町が近いばかりでなく、諸藩の京の藩邸が立ち並んでいることもあって、志士が集まる区域になっている。

将馬は何度か京を訪れたことがあるが、建は初めて。京美人や京言葉に、好色心あふれる盟友が、胸躍らせているであろうことは容易に想像できた。

「根岸様の連絡役と会っているのかもしれぬ。江戸護衛隊の交代組もまた今までと同じように、黒谷の金戒光明寺を拠点にするとか。祇園や先斗町、島原といった場所

には、山同心が使う連絡場所の見世がある。顔を出すのも御役目のうちよ」庇うような言葉が出た。

黒谷の金戒光明寺は、京都守護職の会津藩主・松平容保が守護職屋敷に召し上げ、京の市中取り締まりの指揮を執っている場所だった。山同心は徳川慶喜の警護役として、かなり前に入京し、金戒光明寺で起居している。

将馬一行も交代組にまぎれて京入りしたのだが、今回は上役の根岸佐平次が交代組の指揮官を務めていた。二、三日中に〈はなさかや〉の手伝い役、つまりは密偵の手伝いをする山同心が、何名かここに来る旨連絡を受けている。

「黒谷さんに山同心がいることなど、建は綺麗さっぱり忘れ去っていますよ。江戸にいたとき、けっこう貯めこんでいましたからね。このときとばかりに、ぱぁっと使っているんでしょう」

美鈴は疑いが消えないようだった。金戒光明寺は黒谷さんの通称で地元に知られている寺だが、確かに建は寺の場所を知らないかもしれない。頭に叩きこんだのは、島原や祇園といった花街だけかもしれなかった。

二人は、中庭に面した一番奥の八畳間に腰を落ち着けた。開け放した障子の向こうに、小さな庭が造られている。庭を眺めながら歓談したいと思い、ここを茶の間にす

ることを決めていた。

「伊呂波紅葉が色づくのは、今少し先のようだな」

将馬は縁側に出て、手を入れた庭を眺めやる。伊呂波紅葉が主役の庭ではあるものの、他にも躑躅や山茶花、キクイモや野原薊といった草木が小さな庭を彩っている。大家がまめなのか、あるいは家主が自ら手入れをしているのか。少し雑草を取り、花木を調えてやるだけで見映えのする景観が生まれていた。

「どのような色合いを見せるでしょうか。楽しみですね」

縁側に座った美鈴の隣に、将馬も腰を落ち着ける。

「うむ」

秋から冬に変わろうとしていたが、陽射しはまだ充分すぎるほどに暖かい。縁側に降り注ぐ陽の光を浴びながら、伏見の静けさがひたひたと染み入って来るのを将馬は感じていた。花木の清浄な氣のお陰ではないだろうか。つい先刻の血腥い騒ぎが、少しずつ遠離っていくように思えた。将平が茶を運んで来る。

「あぁ、美味しい」

美鈴が吐息まじりに呟いた。

「将平が淹れてくれるお茶は、格別の味わいです。それになんというのでしょうか。

将平がいてくれるだけで空気がなごみますね」

「そう、ですか」

弟は頬を染めている。照れ屋なところは、兄譲りかもしれない。確かに将平が迎えてくれると、将馬も肩の力が抜けるような感じがあった。江戸の借家と同じ空気が満ちている。それだけで随分と疲れ方が違っていた。

「ひと息吐いたら吝ん坊の小間物屋の、頼まれ事を片付けましょうか」

美鈴の提案に、将馬は首を傾げた。

「さして急いでいるようには見えなんだ。それに無料ゆえ暇なときにと、そなたも言うていたではないか」

「話を聞いていなかったのですか。『せいてせかんもんやねんけどな』というのは、京独特の言いまわし。実は急いでいるんですよ」

「なんの話ですか」

口をはさんだ弟に、簡単に説明する。気になっていたのは同じだったのか、弟は小さく頷きながら聞いていた。

「わたしも、あのウメノキゴケはすごいなと思っていました。桜の木が苦しそうです。竹ベラでこそげ落とした後、枝を整えて風通しをよくしてやれば、だいぶ楽になるの

ではないでしょうか」
「肥料も要るだろう。まさか京でもよろずやをやるとは思わなかったが、庭の落ち葉を集めて堆肥を作るか」
「はい」

三

「よろずやをやるのは、気が進まないのですか」
美鈴が訊いた。少し不安げな眸をしているように見えた。
「いや、表向きはよろずやの看板を掲げるつもりだったが、花木の手入れをすることまでは考えておらなんだ」
「ですが、言い出したのは、おまえさまではありませんか。見て見ぬふりをして通り過ぎればよいものを、花の〈声〉が聴こえるだのなんだのと言うから」
「あの桜は泣いています」
将平が言い添える。
「兄上ならずとも胸が痛みます。ウメノキゴケが生えるのは木が弱っている証。兄上

が申し出なければ、わたしが言っていたかもしれません。ウメノキゴケは岩に生えるほど強い力を持っていますから」

「岩や石にも生えるのですか」

美鈴の驚きに、今度は将馬が応えた。

「石燈籠にも生える」

「まあ、驚いた。おそろしいほどに生命力が強いのですね。急にあの桜がかわいそうになりました。無料なのはちと癪にさわりますが、色々な話を得るためにも、ご近所とは親しくなっておかないと」

「いかにも。江戸から来た者には、ことさら冷ややかな目をくれるからな」

「京の民は長州贔屓と聞きましたが、なぜでしょうか」

将平が素朴な疑問を投げた。美鈴もそうだが、弟も政にはいささか疎い。

「長州は攘夷、つまり、外国を退ける考えを強く示している朝廷の、まさに願いを叶えたような攻撃を外国船に仕掛けたではないか。ゆえに京の民は天晴れなことよと思うたのであろう。言うなれば長州藩は正義藩よ」

将馬は答えた。

「ですが、天皇は長州征伐を命じました」

ふたたび弟が問いを投げる。

「確かにな。なれど京の民、いや、京の民だけではないかもしれぬが、まったくもって筋が通らぬと思うているのではあるまいか。ご公儀だけではなく、朝廷に対しても不信感をつのらせているのは間違いなかろう」

将馬は応えつつ、薩摩藩士・大久保利通の言葉を思い出している。

〝非義の勅命は勅命に非ず〟

義――天理にもとるものは、勅命や幕命であろうとも、大義において御請けはできない。

大久保の痛烈な言葉が、今の状況をよく表していた。頻々と用いられる勅命を、もはや、ありがたがる者はいないのではないか。

おそらく民が願っているのは、国内の一致団結と内戦回避ではないだろうか。だからこそ長州藩に熱烈な支援と支持を送るのではないか。

「わたしはご公儀だけでなく、上様のお考えも今ひとつわかりません。仏蘭西寄りだったようには感じていたのですが、近頃は英吉利とも好を通じているご様子。過日はわたしたちが、英吉利人のプラントハンターの接待役を務めたではありませんか。がちがちの攘夷派の目代様は、渋いお顔をしておられましたけれど」

美鈴は父の権右衛門を皮肉たっぷりに目代様と呼んだ。プラントハンターの接待役を務めたのは、正しくは美濃国の友木藩であり、将馬たちは密偵として動いたにすぎない。が、十五代将軍慶喜が、ここにきて英吉利に急接近しているのは事実だった。

「目代様から渡された文書に、面白い記述が載っていた。仏蘭西大使はともかくも、仏蘭西本国の対日政策に変化が生じているとか」

将馬は簡単に説明する。

パリ万博において、薩摩は一大名ではなく、独立国であるような振る舞いをした。小手先の謀だが、この工作がものを言い、仏蘭西本国の我が国への対応が以前のようにはいかなくなっているようだった。

「英吉利だけでなく、仏蘭西も薩摩に接近していると？」

美鈴の問いかけに将馬は頷き返した。

「おそらくそうであろう」

「そういえば、ついこの間、英吉利の海軍士官が来日しましたよね」

弟が確認するような問いを発した。

「さよう。十二名だったか。ご公儀は築地に伝習所を設ける由。上様は仏蘭西の助言を取り入れつつも、海軍の訓練は英吉利に依頼なされた。両国を牽制する意味もある

だろうが、幕府軍の近代化を考えておられるのではないか」

「第二次長州征伐において、幕府は見事なまでの軟弱ぶりを天下に曝してしまいましたものね。第一次長州征伐においても、長州が本腰を入れていなかったから勝てたという意見があるぐらいですから」

美鈴が辛辣な意見を述べた。とはいえ、これがほとんどの民の考えかもしれない。かねてより日本海軍の創設を口にしていた勝の考えが、いかに正しかったかを証明するような流れになっていた。

「勝先生は先見の明がおありになる」

将馬の呟きに、今度は美鈴が頷き返した。

「はい。女狂いの性癖さえなければ、もっと褒めて差し上げるのですけれど。勝先生は無類の女好きですからね」

勝への批判を、将馬は空咳で止める。確かに勝は女好きだが、完璧な人間などいない。むしろ将馬はそういう人間らしさを好ましく思っていた。弟も同意見だったのではないだろうか。

「勝先生は、いかようなお考えで海軍の創設を進められたのですか」

真面目な顔になっていた。

「日本を一つにすることが、西欧諸国に対抗するたったひとつの手段だと、先生はお考えになっている。そのためには朝廷と幕府の結びつきを強化するとともに、諸藩との協調や協力が不可欠だ。内戦に明け暮れるのは愚かの極みよ」

「最後の言葉は、おまえさまのお考えですね」

確認するような美鈴の言葉に笑みを返した。

「うむ」

ともすればゆるみがちになる頬を無理に引き締めている。おまえさま、わたしの夫、うちの人などなど、美鈴が口にする度、くすぐったいような気持ちになるのだった。そろそろ慣れてもいい頃なのだが、いまだに気恥ずかしさを覚えた。

「話は変わりますが、京で人々が使う傘は変わっていますね。番傘ではないあれは、なんという傘なのですか」

美鈴が女性らしい疑問を投げる。

「あれは西洋傘だそうです」

将平がすぐさま答えた。

「わたしも面白い傘だと思い、訊いてみました。正しくは蝙蝠傘（こうもりがさ）と呼ばれているとか。調べてみたのですが、安政六年（一八五九）頃に英吉利商人が持ちこんだようです。

相当な雨が降っても大丈夫だと聞きました。日傘にも具合がいいとか」
これまたいかにもらしいと言えるかもしれない。からくりの才能が、好奇心に拍車をかけるのだろう。気になった事柄を即座に調べる点は、我が弟ながらも評価できた。
うずうずしているのを察したのか、
「作ってみてくださいな」
美鈴が将平に言った。
「わたしも使ってみたいと思います。日傘にも使えるのであれば便利ですから」
その言葉が終わらないうちに玄関の戸が開いた。
「ただいま戻りました」
建の声がひびきわたる。
「おや、〈はなさかや〉の女狂いが、ようようお戻りあそばされましたか」
わざとらしいほどの大声で美鈴は応えた。将馬は弟と苦笑しながら顔を見合わせている。
ほとんど足音をたてずに、建が茶の間に姿を見せた。
「これは、これは、お揃いでござるな」
将馬と同い年の盟友は、歌舞伎役者になれそうなほどの色男。縁側のところに来る

や、懐から美しい櫛を取り出した。

「お似合いになると思い、買い求めました次第。将馬が贈るべきところですが、なにぶんにも気の利かぬ男でござりますゆえ」

と美鈴に渡した。漆塗りの深い紅が、いかにも京らしい品の良さを見せている。漆の塗り方に違いがあるのだろうか。なんとも言えない紅だった。

「わたしに、ですか」

美鈴は躊躇いつつ受け取る。

「そう言うたではありませんか」

「確かに聞こえましたが……ははぁ、目当ての女子にふられたのですね。それで無駄になった櫛をわたしへの土産にした。連絡も寄越さなかったとなれば、さぞや、おかんむりだろうと思い……そうでしたか。得心いたしました。ではその女子の代わりに、わたしが受け取って差し上げましょう」

「なんとまあ、ひねくれた物の見方をなさるのか」

建は呆れたように頭を振る。

「〈はなさかや〉を始めて以来、将馬同様、裏を読むようになりましたな。女子は素直な方が可愛いですぞ」

のう、と、同意を求められたが、将馬は慌て気味に目を逸らした。
「して、建。鴨川近辺の様子はいかがであった」
急いで話を変える。
「わたしはお茶を淹れ替えて参ります」
将平もまた慌て気味に台所へ向かった。照れ屋なところや、女子の扱いが不得手な点などが弟は兄とよく似ている。対する建は平然としていた。
「あちこちで剣戟の音が鳴りがひびいておったわ。諸藩の京藩邸が立ち並ぶ場所だからな。血腥い風が吹き荒れておる。伏見に居を構えるのは、当初はどうかと思うたが、悪くないかもしれぬ。鴨川近辺は女子連れでは歩かぬ方が良い場所よ」
将平が運んで来た茶を啜って、盟友はにやりと笑った。
「祇園の連絡場所に、おまえの義弟となった富沢大助が来た。そのまま他の山同心たちと一緒にここまで来た次第じゃ。浪人ふうの侍が、一度に何人も訪れるのはまずいと思うてな。近くの茶店におる。時をずらして、ひとり、二人と来るはずだ」
冗談めかした言葉には、旅立ちの慌ただしさにまぎれた富沢と将馬の妹・佳也との祝言が隠れている。富沢は将馬よりも年上なのだが、誠実で真面目な人柄であると同時に、剣術の遣い手でもあった。頼りになる身内といえた。

「密偵部隊が勢揃いですか」
美鈴は苦笑いしたが、
「して、根岸様はなんと？　あらたな話は入りましたか？」
すぐに真剣な表情になる。紅の櫛は手に持ったままだが、現金な気質と言うべきか。辛辣な物言いや冷たい目は消えていた。
「われらの標的、青丹一族が京入りしたのは、おそらく間違いなかろうとの話だった。なれど暗まではわからぬとのこと。やつらの狙いは上様じゃ。すでに二条城におわす上様のお側に、一族の女子や下士が侍っているやもしれぬ」
建も真面目に応じた。
青丹一族は毒薬使いの一味であり、不審死を遂げた島津斉彬、徳川家茂、孝明天皇たちの死にも、関わりがあるのではないかとされていた。まずは青丹一族の居所をつかみ、連中を捕縛するのが、将馬たちに与えられた急務。とはいえ慣れない京では、あきらかにこちらの分が悪い。
「闇雲に当たっても連中の動きはつかめまい。逆にわれらの所在を知られて、また一服盛られるやもしれぬ」
無意識のうちに声が重く沈んだ。

青丹一族の頭目は定かではないのだが、もしかすると、上田糸江という女子の可能性があった。彼の者からの依頼を受け、娘を遁がす役目を引き受けたとき、匿う予定だった旗本屋敷の井戸に、毒を投じられた経緯がある。

かつて幕府の毒味役から指南を受けていた将馬は、あれ以来、毎朝井戸水の毒味をする習慣がついていた。将馬たちを始末するために糸江は〈はなさかや〉に依頼したのではないか。裏で青丹一族を操っているのは薩長なのか。

詳細はまだつかめていなかった。

四

「根岸様は上田糸江の人相書を、お持ちくだされたか」

将馬は建に向かって訊いた。盟友は青丹一族の頭目かもしれない糸江と、いっとき男女の仲になっていた。正体を暴くため、将馬が勧めた部分もあるのだが、建はさぞ複雑な思いをいだいたのではないだろうか。

「おれが手伝うたゆえ、そっくりに仕上がったわ」

と懐から紙片を一枚出した。少なくとも顔に、糸江に対する気持ちは表れていない

ように思える。江戸で奉行所や役人に渡すよりも、京の方が有効だろうと考えて人相書を用意したのだった。将馬たちが出立するときにはまだ出来ていなかったため、協力した建はむろんのこと、将馬たちも見ていない。

「ほう、よく出来ているな」

受け取った人相書を広げた。

「本当に瓜二つですね」

覗きこんだ美鈴が声をあげる。瓜実顔に切れ長の目、すっと通った鼻筋、どことなく品のある風情までもが、人相書から読み取れた。

「青丹一族の後ろにいるのは、薩長でしょうか。だれに命じられて、上様のお命を狙っているのでしょうか。美濃国の小藩・友木藩の前藩主が、自ら命を絶った裏には、いかような理由があるのでしょうか」

渡された人相書を、将平もしみじみ見つめている。

密偵として潜入した友木藩では、薬草園で強い毒を持つ草花が育てられていた。青丹一族の裏にいる者や、血塗られた出来事の真実を、おそらく知っていたであろう前藩主の友則と奥方は自害していた。

「わからぬ。ただ」

そう言いかけて将馬は口をつぐんだ。友則が自害した座敷の床の間には、掛け軸と紅風鈴の名を持つ朝顔が飾られていた。慶喜に献上した折、名を一字賜って『慶花』とした友木藩のお留花である。

〝一朝の夢〟

と掛け軸には記されていた。正しくは『槿花一朝の夢』で、意味は朝顔の花が咲いて間もなく萎むように、栄華の儚い喩えとされている。

さらに友則は気になる言葉を残していた。

〝いや、『慶花』は、ここぞというときにしか使わぬ。なにかを伝えるときに用いる花じゃ〟

あれが将馬は引っかかっていた。ここぞというときは、自害したときだった。掛け軸と床の間に活けられていた朝顔。なにか、とはなんなのか。友則はなにを伝えたかったのか。

「ただ……なんですか？」

美鈴に促されて我に返る。

「あ、いや、なんでもない。友木藩の下屋敷で用人を務めていた青山十兵衛と、上田糸江はいかような関わりだったのかとな。ふと思うた次第よ」

「見事な死に様であったわ」

青山と刃を交えた建は真剣な目をしていた。

「おれはいまだに信じられぬが、仮に上田糸江が青丹一族の頭目だったとしてもだ。青山は単なる配下ではなかったのではあるまいか」

男女の仲だったのではないかと言外に匂わせていた。閨をともにした建ならではの、推測だったかもしれない。ふだんはつまらない嫉妬にとらわれがちなのだが、青山の死に様を見て、士魂を刺激されたのかもしれなかった。

「そうかもしれませんね」

美鈴が同意する。

「惚れた女子を守るために、青山十兵衛は己の命を懸けたのかもしれません。藩邸の御用人・小川達之助様でしたか。小川様は詮議の折、友則様の奥方様と青山十兵衛は、不義など働いていなかったと言うておられた由。夫と同じ日、同じ時刻に命を絶った奥方様の想いは、友則様だけにあったのでしょう」

美鈴の両の眸に涙が滲んだことに気づき、将馬は狼狽えた。

「したが、友木藩は御家存続となって、嫡男の友良様が今までどおりに藩主を務められることとなった。せめてもの慰めになるのではないだろうか」

早口で言い添える。

「ええ、そうですね。幕府にしては、温情のある御沙汰だったと思います」

さりげなく着物の袖で涙を拭い、美鈴は「そうそう」と続けた。

「青丹一族の仕業ではないようですが、先月、上様の懐刀と言われていた原市之進様が、江戸から来たお旗本に殺害された由。まことに諸藩の志士や浪人ではなく、幕臣の手によるものなのですか」

八月十四日。水戸出身で一橋家の用人雇から、幕府の目付に登用された原市之進が殺された。目付となった後も終始慶喜の側にいたとされている。慶喜の懐刀がいなくなれば、利を得る者が少なくない。美鈴が血腥い騒ぎを敢えて口にしたのは、裏に真の下手人がいると考えたからかもしれなかった。将馬自身も信じられないという気持ちがあるのはいなめない。

「原様の騒ぎは、捕らえられた旗本が下手人のようですな」

建が答えた。

「私の怨みか、大義あってのことだったのか。詮議に対しては、なにも答えなかった由。仔細はわからず終いであるとか」

「恐ろしい話ですね。水戸出身とはいえ、原様は正真正銘の幕臣ではありませんか。

そのお方を同じ幕臣が斬るとは」

「ご免」

玄関が開くと同時に憶えのある声がひびいた。

「富沢さんです」

すぐさま将平が迎えに出る。

「お茶をご用意いたしましょう」

美鈴が台所に足を向けた。ほどなく弟が、富沢と二人の山同心を案内して来た。三人とも浪人を装っている。無事到着したことを喜び合い、眺めの良い縁側近くに座った。

「いかがですかな、美鈴様。あとからまだ仲間が加わりまするが、揃ったところで祝い酒というのは」

建の言葉に、美鈴は渋面を返した。

「まだ午前ではありませんか。再会を喜ぶ気持ちはわかりますが、せめて夕方になるまでは待ちなされ。それにわたしたちは仕事があるのです。近くの小間物屋の庭を、無料で手入れしなければならないのですよ」

ちらりと怨めしげな目を投げられる。視線を読み取ったに違いない。

「また花咲爺のおせっかいか」
建は大仰に目をみひらいて見せた。
「まあ、そんなところだが、無料働きを申し出たのは」
「わたしですけどね」
美鈴が継いだ。
「ですが、ウメノキゴケが気になると言い出したのは、だれでしたっけ。かような話をしなければ、あの吝ん坊の主に無料働きを申し出る必要はなかったと思います。花木を育てたり、剪定したりする腕前を考えると、二朱はいただきたいところですよ。本当にしようがないというか」
富沢の空咳が、小言を制した。美鈴は苦笑いしている。遮られたのが、少し癪にさわったのかもしれない。
「新妻を江戸に置いてのご奉公はお辛いでしょう。一緒に暮らしたのは二月足らずですものね。見廻役の方々は妻子を伴って来られたとか。様子を見て、富沢さんも御新造様をお呼びになられてはいかがですか」
美鈴はからかうような言葉を投げた。
「い、いや、京は危のうございますゆえ」

富沢は耳まで真っ赤になっている。己を見ているようで、将馬はまたくすぐったいような気持ちを覚えた。

「それで、富沢さん。なにを言いかけたのですか」

遅ればせながら促した。

「さよう。根岸様からの言伝じゃ。あとでおいでになられるとか。われらと一緒に来るはずだったのだが、見廻組の与頭たちに呼ばれたらしゅうてな。少し遅れるとのことであった」

「ご免くださいませ」

玄関前で呼びかけが響き、遠慮がちな感じで戸が開いた。出て行こうとした美鈴を制して、将馬は立ちあがる。出た瞬間に斬られる懸念もあった。油断できない。

五

玄関に立っていたのは、商人らしき身なりの男だった。年は四十なかば、眉が薄い顔は公家のようにおっとりして見える。やさしげな風情の男は、手に小さな風呂敷包みを抱えていた。

「なにか御用でしょうか」
上がり框に屈みこんだ将馬に、
「おまえさま。まずはおあがりいただきましょう」
美鈴が言った。顔を突き出して、「どうぞ」と男に奥を示している。将馬は玄関先で用件を聞きたかったのだが、逆らうつもりはない。身体をずらして、あがるように示した。
「どうぞ、おあがりください」
「失礼いたします」
男は腰を屈めるようにして、玄関にあがる。奥の八畳間へ案内する間に、建や富沢たちは手前の座敷に移動していた。襖を閉めて、応対するのは偽夫婦の役目だと示していた。また大勢の浪人がいるのは、依頼人に警戒心をいだかれかねない。細かいことまで相談したわけではないが、すみやかに動いていた。
将平も茶を運んで来ると隣室に消える。八畳間にいるのは、将馬と美鈴、そして、客人の三人だけになっていた。
「てまえは、江戸で酒問屋を営む伝蔵と申します。伏見には酒蔵を持っておりますので、一年に何度か様子を見に参ります」

伝蔵は江戸弁に近い喋り方をした。将馬たちを気遣っているのか、あるいは元々江戸男なのか。開け放たれた庭を見て目を細めた。

「綺麗にお手入れをなさっておられますな。伊呂波紅葉や躑躅、山茶花といった花木が、やけに別嬪さんになりました。お手入れはどちらさんが？」

「夫です」

美鈴が応えた。

「てまえどもは江戸から参りましたよろずや。用心棒や仲裁役、人捜しなどを行いますが、花木の手入れもいたします。これを」

懐から〈はなさかや〉の引札を出して、すっと畳を滑らせた。伝蔵は顔の前で手を振りながら、懐から同じ引札を取り出して畳に置いた。

「持っております。配られていた引札を見て参りましたので」

「失礼ですが、あまり京訛りがありませんね。もしや、江戸生まれですか」

将馬は訊ねた。

「はい。江戸生まれの江戸育ち。酒問屋に奉公しておりましたとき、伏見にお店を持つ旦那さんに『是非うちの娘の婿に』と言われまして、一度は京に参りました。二親や兄弟、親戚などはおりませんでしたからね。身軽なものでした」

唇をゆがめるようにして微笑する。どこか寂しげな笑みに見えた。一度は京に参りました、というくだりが、将馬は引っかかっている。新参者や余所者をきらう京にはいられずに、江戸へ戻ったのだろうか。もしや離縁したのだろうか。

いくつかの事柄が浮かんでいた。

「『禁門の変』のとき、京は火事でかなり焼けたと聞きました。こちらの酒蔵は無事だったのですか」

美鈴が『蛤御門の変』とも呼ばれる政変を口にする。

元治元年（一八六四）七月十九日。

京を追放されていた長州軍が、失地回復をめざして挙兵上洛し、御所を守る幕府軍と一戦を交えた。これが『禁門の変』と言われている。火元は断定されていないが、鷹司邸か中立売御門付近から出た火は、北東からの強風に煽られて、京の町全域に広がった。どんどん焼けとも呼ばれたこの大火は、二日後の二十一日まで続き、二万八千戸の家屋を焼失したとされていた。

戦闘終了後の二十三日には、長州藩を朝敵とした征伐令がくだされた。たかだか三年ほど前の騒ぎである。財産を失い、立ち直れずにいる見世が少なくないはずだ。

「他の場所にあった酒蔵は焼けました」

心なしか伝蔵の声が沈んだように思えた。

「ですが伏見の酒蔵だけは、かろうじて焼け残りました次第です。不幸中の幸いと申せましょう。とはいえ、すぐに酒造りができるわけもありません。ちりぢりになっていた杜氏たちを呼び戻せたのは、半年ほど経った頃でございました」

両の目は庭に向けられたままだった。心ここにあらずといった印象を受ける。将馬は気になる事柄を問いかけに変えた。

「立ち入ったことを伺うようですが」

前置きして続ける。

「この町屋は伝蔵さんの家なのですか。家主さんなのですか」

どんな店子なのか心配で、様子を見に来たのかもしれないと思った。勤王だの、佐幕だのと、世の中は騒々しい。死人でも出た日には、次の借り手はむろんのこと、売る際にも安く買い叩かれかねなかった。財産があればあったで悩みが生まれる。

「え？」

驚いたように伝蔵は、視線を将馬に向けた。

「庭の花木を、ずいぶんと熱心にご覧になられているので、もしやと思いました。この家にゆかりのある方なのかと」

真意を隠して告げる。店子の様子を見に来たとしても、伝蔵が本当のことを言うとは思えなかった。

「はい。どんどん焼けの後、手放した家でございます。てまえは十年ほど前に、婿入り先を出て江戸に戻りました。女房とはどうしてもそりが合わなくて」

自分の半生を告げ、続けた。

「その後も伏見に酒造所を持ち、こちらへ来たときにはここに泊まるようにしておりました。手放したくはなかったのですが、幸いにもすぐに買い手が付きまして……しばらくは大店のご隠居様がお住まいになられていたとか」

と伝蔵はふたたび庭に目を戻した。

「あの伊呂波紅葉は、なんとも言えない色合いになるのです。そう、舞妓さんの紅を思わせる美しい紅に染まるのですよ。そして、紅から橙色、さらに黄金色へと変化する。本当に美しい彩りを見せるのです」

その呟きはほとんど独り言のようだった。思いにとらわれるあまり、よく周囲を忘れてしまう将馬は、伝蔵が自分の思いに浸っているのがわかった。声をかけるのをつい躊躇っている。

（この家は結婚していたときから持っていたのだろうか）

なんとなく女の気配を感じていたが口にはしない。
「それで」
美鈴が口火を切る。
「よろずやに、いかような御用でしょうか」
「あ」
伝蔵は、ようやく気持ちを戻したように見えた。
「失礼いたしました。実はこれを」
持っていた包みを開き、小さな木の箱を取り出した。縦は七寸（二十一センチ）、幅は三寸（九センチ）、深さは一寸（三センチ）ほどだろうか。開けられたくないのかもしれない。紙で丁寧に封印されていた。伝蔵は小箱を差し出した後、風呂敷を畳み始める。
「これは？」
美鈴が小箱を手に取る。伝蔵は素早く片手をあげて制した。
「中身がなんであるかは、お訊きくださいませんよう。それを少しの間、預かっていただけないでしょうか。箱を開けないまま預かるというのが条件です」
「……」

将馬は、思わず美鈴と顔を見合わせていた。伝蔵が反幕府派の支援者であることは充分、考えられる。小箱に重要な密書でも隠していたとなれば、将馬どころか目代の去就に関わりかねない話だった。

微妙な空気を読んだのだろう、

「政にはいっさい関わりございません」

伝蔵はきっぱりと言った。

「私の話です。伊呂波紅葉が色とりどりの変化を見せる頃、訪ねて来る者がおりましたら、それを渡してほしいのです。紅葉が散るまでの間、わたしは京におりますので」

「なれど」

将馬は断ろうとしたが、

「わかりました」

美鈴が応えた。

「なにもお訊きいたしません。確かにお預かりいたします。そして、伝蔵さんの名を口にする方が訪ねておいでになりましたときには、これをお渡しいたします」

「ありがとうございます」

伝蔵は深々と辞儀をする。畳に額をこすりつけんばかりだった。顔をあげたその目には、うっすらと涙が滲んでいるように思えた。

「紅葉が散りました頃に、それを引き取りに参ります。てまえの酒蔵は宇治川沿いの〈西野〉という酒造所です。訪ねて来る者がおりましたら、教えてやってくださいませ。些少ではございますが、小箱の預かり賃です」

懐紙に包んだ礼金らしきものを置くと、すぐに立ちあがる。

「あ、お見送りはけっこうですよ。どうぞ、そのままで」

伝蔵は言い置いて玄関に向かった。美鈴は目にも止まらぬ速さで包みを懐に入れる。お見送りですよ、と、将馬は仕草で促された。

（庭の手入れの方が、厄介な頼み事よりもましだと思うがな）

心の中でのみ思っている。

騒ぎにならなければいいがと、我知らず八畳間に置かれたままの小箱を振り返っていた。

六

問題の小箱を前にして、みな押し黙っていた。将馬を含めた総勢七名は、伝蔵が帰った後の八畳間に座している。

「開けてみましょう」

珍しく将平が思いきった提言をする。

「あとで綺麗に封印し直せば、気づかれる懸念は少ないと思います。おまかせいただければ、責任を持ってわたしが元の状態に戻します」

優れたからくり師ならではの言葉といえた。それが驕りやでまかせでないことを、この場にいる全員が知っていた。

「開けないのが、お預かりする条件のひとつです」

美鈴が反論する。小箱を持ち、たいせつそうに膝にかかえた。

「わたしが預かりますので」

「預かり賃はいかほどだったのでござるか」

さらりと建が訊いた。盟友以外は口にできない問いかけだったろう。将馬をはじめ

とする全員の目が、美鈴に向けられた。

「二両です。紅葉が色づき、散る頃までとなれば、あとひと月半ほどでしょうか。吝ん坊の庭の手入れは無料ですからね。これが京における〈はなさかや〉の口開けです。箱の中身を気にしてはなりません」

言い終わらないうちに玄関の戸が開いた。

「根岸様がお着きじゃ」

「将馬、建。いるか。富沢たちも来ておろう」

近くに待機していた二人の山同心が、根岸佐平次の案内役となっていた。美鈴は黙っているよう仕草で示した。

「根岸様には内緒ですよ」

「将平。足湯をお持ちしろ」

将馬は言い、玄関まで迎えに出る。佐平次は上がり框に腰をおろして、草鞋の紐を解いていた。案内役を務めた二人は、戸口に立ち、上役が座敷にあがるのを待っている。将馬は膝を突いて一礼した。

「お疲れさまでございました。今、足湯をお持ちいたしますので」

「手間をかけるな。伏見は静かだろうと思うていたが、長州の間者と思しき浪士がつ

い先程、始末されたとか。いやはや、京はどこもかしこも戦場じゃ」

佐平次は手付に相応しい働きぶりを示した。番屋に立ち寄って話を集めたところは、流石といえる。

「彼の者は長州の間者でござりましたか」

応えつつ、弟が運んで来た足湯を玄関の三和土に置いた。玄関先に控えていた同役が、佐平次の足を洗い始める。美鈴が用意して来た手拭いを、もうひとりの同役に渡した。預かった小箱は自分の居室に置いて来たのかもしれない。持っていなかった。

「うむ。京のあちこちに散らばって情報交換しているに相違ない。見廻組や新選組が目を光らせても、連中はうまくそれをくぐり抜けるからの。いたちごっこよ」

佐平次から刀と脇差を受け取って、将馬は奥に案内する。男ばかりの中に美鈴がいることにほっとする反面、違和感を覚えてもいた。やはり同道するべきではなかったと、あらためて感じている。

（京はあまりにも危険すぎる）

覚悟はしていたが、それ以上だった。将馬でさえ先刻の騒ぎには、少なからぬ衝撃を受けている。女子の不安と恐怖はいかばかりか。しかし、今更、江戸に戻れとは言えなかった。目代が多めに配してくれた同役たちと美鈴を守りながら、御役目を遂行

するしかない。

「なかなか良い家ではないか」

茶の間に腰を落ち着けた佐平次は、ぐるりと首をめぐらせた。江戸の借家が狭いだけに、よけいゆったりとした雰囲気に感じるのだろう。中庭が、料亭のような贅沢な空気を作っているのは確かだった。

「さて」

と告げた瞬間、佐平次の表情が一変する。庭に面した障子を閉めるよう目で示した。建が素早く障子を閉める。たったそれだけのことなのに、茶の間の様子は一変する。密談の場となっていた。

「すでに話は聞き及んでおろうが、先月の十四日。陸軍奉行配下の鈴木豊次郎と依田雄太郎の手によって、ご公儀のお目付役・原市之進様が殺められた」

「暗殺者は陸軍奉行の配下だったのですか」

美鈴が代表するように驚きを口にした。

「うむ」

佐平次は渋面のまま続ける。

「原様は、もとは水戸家の家臣だったお方。水戸家になんらかの遺恨を持っていたの

か、はたまた私怨であるのか。そのあたりのことはわからぬ。上様の懐刀であった原様を失うたのは、われらにとっても大きな痛手よ」

「なぜ、原様を殺めたのか。詮議の際の調書には、どのように書かれていたのですか」

将馬の問いかけに、佐平次は首を傾げた。

「詳しい話はわからぬが、確か下手人たちは、多くを語らなかったという内容だったように憶えておる。知りたいのであれば、あらためて調べるが」

「お願いします」

「上様はいかがなされているのですか」

ふたたび美鈴が訊いた。

「お側には、板倉周防守勝静様や、西周助（西周）様が付いておられる。佐倉は板倉様にお目通りしておるゆえ、あらためて告げるまでもなかろうがの。西様は阿蘭陀へ洋行していたお方であるため、上様に仏蘭西語をご指南なされたり、外国の政のお話をなされている由。わしも話を聞いたが、ちと理解しかねる内容であったわ」

かなり正直に胸の内を明かした。慣れない地に来て、心細さが出ているのかもしれない。上役の弱気な一面を見るのは初めてだった。

（根岸様には、しっかりしていただかねば）

将馬と同じ気持ちになったのか、

「根岸様も仰いましたが、頼りになさっていた原様を失い、上様のご心痛は察するにあまりあります。それでなくても政情が不安定なとき。なにかしていなければ、押し潰されてしまいそうになるのではないかと思います。かようなときこそ配下が踏ん張って、お支えしなければなりませぬ」

美鈴が鼓舞するような言葉を発した。

「仰せのとおりでござる」

佐平次は畏まって、懐から自分の留書帳を出した。

「京の見廻組には、幕臣から取締出役として、佐々木只三郎様、高久安次郎様、速見又四郎様がおいでになられた。われらに直接指示を与えるのは、見廻組与頭の佐々木様じゃ。京都守護職に就かれた会津藩主・松平容保様の重臣・手代木直右衛門様の弟君よ」

「与頭は会津の出でござるか」

建の言葉に、佐平次は頷き返した。

「さよう。剣は会津藩で学び、精武流の奥義を究め、さらに槍術でも相当な腕前であ

る由。刀槍に秀でておられるようじゃ」

顔をあげ、将馬を見る。

「佐倉には、青丹一族の討伐隊長として指揮を執ってもらう。ついては森山と二人で新選組に加わるがよい」

「新選組」

声になった将馬の驚きを、

「承服いたしかねます」

美鈴が継いだ。

「新選組は無頼漢の寄せ集めではありませんか。会津藩の正規軍であればともかくも、なぜ、新選組などに二人を加えるのですか。目代様も承知のうえですか。それとも根岸様のお考えですか」

矢継ぎ早の問いかけに、佐平次はたじろいたように頬を引き攣らせる。

「う、いや、わしの考えでは、ない。板倉様のご命令じゃ。なれど蛇の道は蛇と言うではござりませぬか。話を聞いた限りでは、新選組は裏の世界に通じておる様子。また近頃は次々に手柄をたてているとも聞きました。正規軍よりずっと有力な情報をもたらしてくれるのではないかと存じます」

「ですが」

さらに反論しようとした美鈴を、将馬は仕草で止めた。

「新選組の方は承知なのですか」

冷静に問いかける。

「否も応もあるまい。彼の者たちを差配しているのは、京都守護職の松平容保様。新選組局長の近藤勇であったか。幕臣に取り立てられた以上、逆らうことは許されぬ。まあ、いささか荒っぽい歓迎を受けるやもしれぬがの」

にやりとしかけたが、美鈴に睨みつけられてしまい、佐平次は空咳でごまかした。

「青丹一族のあらたな話は入っているのですか」

美鈴はじっと睨みつけている。ばつが悪そうに佐平次は、また将馬に目を向けた。

「土佐藩が匿っているやもしれぬ、という話は得た。あるいはわれらを攪乱するための偽りやもしれぬが、こちらは手代木様の配下に当たっていただく手筈をつけた。上田糸江の似顔絵は持っているな」

確認に将馬が応える。

「はい。合力してくれる新選組に渡します」

「〈はなさかや〉の方はどうするのですか。ウメノキゴケや先程の頼み事は、わたし

ひとりで片付けるのですか」

美鈴はじりっと膝でにじり寄る。子供が駄々をこねているような感じだった。美鈴自身もわかっているに違いない。わけのわからない不安が言わせた我儘に思えた。

「兄上ほどの手入れはできないかもしれませんが……及ばずながら、わたしがお手伝いいたします」

遠慮がちに将平が申し出る。

「そう、そうですね」

美鈴は、はっとしたように目を逸らした。

「つまらぬことを申しました。なんだか、いやな胸騒ぎがして」

胸のあたりを押さえている。軽く下唇を噛みしめた顔は、白っぽくなっていた。将馬は急に熱い感情がこみあげてくるのを覚えた。二人きりであったなら、抱きしめていたかもしれない。

「佐倉将馬、森山建」

佐平次があらたまって告げる。

「は」

二人同時に畏まった。

「十月一日より両名に、新選組への出役を命じる。目的は上様のお命を狙う青丹一族の捕縛じゃ。心してかかるがよい」

「ははっ」

思いもかけない流れに、将馬は複雑な思いをいだいている。目の端に映る美鈴の不安げな顔が、胸に重くのしかかっていた。

第二章　新選組

一

新選組局長・近藤勇は、この年の六月十日、幕府に直参の旗本として取り立てられていた。近藤の格式は元高の三百石に役料が三百石で、役職は見廻組与頭。土方歳三は見廻組肝煎格になっている。

当初は壬生村に屯所があったことから、今でも京の民には侮蔑をこめて壬生浪と呼ばれているが、直参を拝命したことによって屯所も不動堂村へと移っていた。場所は堀川の東、木津屋橋の南あたりで、真新しい建物はすべて西本願寺の負担という噂もある。寺を我が者顔で使われてはたまらないとばかりに西本願寺側が、かなり無理をして普請したようだった。

翌日。将馬は建と新選組の屯所を訪れた。

〝二人のことは、与頭の佐々木様にくれぐれもよしなにとお願いしておいた。新選組を直接差配しておられるのは、兄君の手代木様だが、現場に赴くのは佐々木様よ。われらも力添えするゆえ、新選組に侮られてはならぬぞ〟

妙に力の入った佐平次に送られて、不動堂村の屯所に来ていた。上役と一緒ではそれこそなめられてしまうと思い、佐平次は同道していない。来たからには寄ってみようと、二人は西本願寺にまずは詣でている。

「おぬしも話は聞いたことがあろう。あの銀杏が、有名な『水吹き銀杏』だ」

将馬は、境内にある巨大な銀杏を目で指した。大銀杏は地面に植えられた何本もの支柱によって、広げた枝を支えられている。支えがなければ枝の重みに耐えきれず、簡単に折れてしまうだろう。境内の後方には本堂の阿弥陀堂があり、左手に御影堂と呼ばれるお堂が見える。

建はその御影堂を振り返った。

「天明の大火の際、御影堂に水を吹きかけ、火を防いだと言われる大銀杏か」

「さよう。銀杏は火事のとき、水を噴き出して我が身を守るとされているが、証のような逸話だ。御影堂はたまたま噴き出した水が届く位置にあっただけやもしれぬがな。

水を噴き出した話は、あながち偽りではあるまい」
「ありがたい話が残るこの西本願寺を、屯所に使っていたとはな。新選組も度胸があるというかなんというか」
流石に無謀とまでは言えなかったのかもしれない。歩き出した建に、将馬も続いた。
「西本願寺の財力に目をつけたのであろう」
小声で盟友の耳もとに告げる。
「では、屯所を普請させるのが目的だったと？」
「うむ。考えたのはおそらく土方歳三だろうが、相当な策士ではあるまいか。地元の者にお西さんと慕われる西本願寺で、大砲の空砲を轟かせたり、小銃の実弾射撃を繰り返したらしいからな」
将馬は歩きながら言った。そういった噂話も江戸を発つ前に把握している。上方記録として、目代から渡されていた。
「京都奉行所は、なにも言わなんだのか」
建が訊いた。二人は堀川沿いの道を東に向かっている。将馬は巷間をさりげなく友に伝えた。
「与力や同心は新選組に恐れをなして、萎縮していたとか。まさに飛ぶ鳥を落とす勢

いというやつよ。見るに見かねたのであろうな。『ほとけ』と呼ばれていた山南敬助が、思いあまって警告した由」

ただでさえ巷の評判がよくないのに、お西さんを困らせたら、ますます京の人々の心証が悪くなる。それにお西さんの門徒は、長州にも多いので危ない。

山南はそう言ったとされていた。

「なれど近藤局長は、聞く耳持たずよ。山南敬助は、やむなく身を隠して反省を求めたのではないかと、わたしは考えている」

「確か山南敬助は」

建の呟きを、将馬は受けた。

「二年前の二月、捕らえられて切腹した。介錯は、弟のように付き合うていた沖田総司であったとか。山南敬助は総長だったゆえ、まさか自分が法度破りの罪を問われるとは思っていなかったのかもしれぬ」

「鉄の掟の『局中法度』か」

建が諳うように言った。士道に背くな、局を脱退することを許さず、勝手に金策するな、勝手に訴訟を取り扱うな、私闘を許さず。

「おぬし、よく憶えたな」

「根岸様の調書に載っていたゆえ、局中法度だけは憶えた。切腹を命じられてはかなわんからな」

「われらは正規の隊士ではない。新選組の局中法度はあてはまらぬと、根岸様は言うておられた。それに……山南敬助は、土方歳三の奸計にはまったように思えなくもない」

「調書にかような事柄まで記されていたか？」

友の疑問に頭を振る。

「いや、あくまでもわたしの考えだ。近藤局長に次ぐ地位にいた総長の山南敬助は、もとは仙台藩士で学問に秀でていたとか。隊士たちに漢学を指南していたらしいからな」

「なるほど。副長の土方歳三は、それが面白くない。常日頃から山南の言動を快く思ってはいなかった、か」

「然り」

将馬は軽く建の肩を叩いた。

「わかりが早くなったではないか。かねてより、苦々しく思っていた山南が、局中法度を破って姿を消した。これを利用しない策はない。近藤局長に『総長であろうとも

法度破りには死を』と吹きこむ」

「哀れ、山南敬助は弟分の沖田総司に介錯されるはめに」

沖田総司で思い出したのか、

「そういえば、調書には沖田の名が出ておらなんだな。天才剣士と呼ばれる新選組の一番隊の組長は、いかがしたのであろうか」

自問のような問いを投げた。

「池田屋事件の折、沖田総司は喀血して、屯所に運びこまれたようだ。騒ぎが起きたのは、三年前の六月。労咳が進んでいるのは間違いあるまい。若いと進むのも早いと聞いた。療養しているのやもしれぬ」

将馬は自分の父と重ね合わせている。父は労咳に罹って数年経つが、幸いにも小康状態を保っていた。しかし、同じ病を患っていた長州藩士の高杉晋作は、二十七歳の若さで命を落としている。沖田も二十代と聞いていたため、容態が良くないのではないかと思った。

「残念じゃ。天才剣士に一手お手合わせ願いたかったのだが」

建が立ち止まる。堀川に架かる小さな橋は木津屋橋、その南側に延々と続く高い塀が目についた。真新しい塀からして、ここではないだろうか。陽の光を受けた板塀は、

どこか誇らしげに見える。
「六月に移ったばかりらしいゆえ、板塀から木の薫りが立ちのぼっているな」
「お」
と建は前方を見た。表門らしき場所から隊士が走り出て来る。御用改めと称した見廻りだろうか。新選組の派手やかな羽織を纏った十数人が、傍らを通り過ぎて行った。将馬は何人かの刀と脇差の柄巻きに目を留める。が、特に口にはしなかった。
「派手な羽織じゃ」
珍しく建が渋面になる。
「おぬしは、あの手の装束が好きだと思うていたが」
「目立ちすぎるのはよくない。なれど、闇の中で戦うときには、敵味方の区別がつけやすいやもしれぬな」
「かようなことを考える輩が、同じ羽織を纏って、新選組の隊士を襲う懸念もあるではないか。闇の中では顔までわからぬゆえ」
将馬の言葉に、ますます渋い顔をした。
「血の粛清か。嘘か真かは知らぬが、件の天才剣士から散歩に誘われたときには、注意しろと言われていたらしいからな。局中法度を破った者は、有無を言わさず斬る。

同じ羽織を着ていようともだ」

「羽織に関してならば、おぬしが言うたように目立ちすぎるのは好ましいことではない。西本願寺での振る舞いを根に持つ者もいるはずだ。先程も言うたが、信徒には長州人も多いからな。いささか有頂天になっている新選組に」

斬る仕草をして、将馬は話をやめた。新選組に入隊するわけではないが、青丹一族を捕縛するまでは行動をともにする相手だ。批判はご法度と肝に銘じた。

「西本願寺は、太っ腹じゃ。今時、これだけの門構えを持つ大名屋敷が、どれだけあることやら」

建は立派な表門を見あげている。

「ご免。どなたかおられぬか」

将馬は潜り戸を叩いた。すぐに門番が顔を覗かせる。来意を告げて、将馬は少しさがった。どこまで続いているのだろう。広大な屋敷を誇示するかのように、高い塀が外界を遮断している。

「そういえば、伊東某が新選組から離れたと聞いた。もしや、伊東は先の話に出た山南と親しかったのか」

門前であるのを慮っているのだろう、建は声をひそめていた。上役の調書や花街

で仕入れた話を、友なりに理解しようと努めているようだった。
「伊東甲子太郎か」
将馬も小声で応えた。
「彼の者は水戸学の論客であるとともに、北辰一刀流の遣い手であるとか。おぬしの推測どおり、山南敬助とは意気投合したらしい。その山南が切腹させられてしまい、新選組への気持ちが冷めたのか。脱退して高台寺党を結成したようだ。崩御なされた孝明天皇の御陵衛士の任に就いている由」
それが今年の三月の話で、このとき隊士の一割以上が伊東と行動をともにしている。厳しすぎる鉄の掟に、嫌気がさしたのかもしれない。
「恐いのは、己の裡に生まれる疑心暗鬼という名の鬼よ。新選組だけではない。ご公儀もだが、気をつけぬと裡側から食いやぶられかねぬ」
建の呟きに、将馬は思わず友の顔を見た。
「……」
胸の奥深くにひびいた。
「なんじゃ。言いたいことがあるなら言え」
「いや、名言だと思うてな」

本当におぬしは変わった。という言葉は呑みこんだ。裡側から食い破ろうとしているのは、己なのではないか。

〝日本の船出に力を貸せ、将馬〟

中岡慎太郎の言葉もまたひびいている。

将馬は……消えない苦悩の中にいた。

二

西本願寺に建てさせた屯所は、まさに邸宅と呼ぶに相応しい屋敷だった。

真ん中に広間をもうけて、両側の廊下を挟んだ向かい側には、隊士の部屋が続いている。そして、奥には幹部の座敷があり、湯屋を思わせる浴場の他、獄舎まで用意されていた。西本願寺に居候していたときを思えば、御殿のような屋敷ではないだろうか。

（ここにも伊呂波紅葉がある）

将馬は、案内された書院から庭を眺めている。伊呂波紅葉、カツラやトウカエデ、メグスリノキといった木に加えて、大きな銀杏の木が少し離れた場所に見えた。もう

少し経てば美しい色合いを見せるだろう。

「遅いな」

建は苛立ちを示すように膝を揺すっていた。書院に案内されてから、半刻（一時間）ほど過ぎただろうか。庭先に代わるがわる隊士が姿を現していた。二人を盗み見ては、嘲笑を残して去って行く。見世物にされているようで不愉快きわまりなかった。

しかし、将馬は相槌を打つ愚かな真似は避けた。

「花木の手入れが、きちんとなされているな」

わざと話を変える。

「庭師や植木屋を雇う余裕があるのはつまり、羽振りが良いという証。先程、われらの横を通り過ぎて行った平の隊士、まあ、おそらく平であろうと思うただけだが、何人かの隊士が梅花皮の柄巻きを用いていたではないか」

梅花皮は、鮫一尾からひとつしか採取できない貴重な品だ。刀と脇差の柄に用いれば、二尾分が必要になる。いわゆる長崎俵物――交易品の中でも、ずばぬけて高価な品だった。俗に千両鮫と称されたのは、この梅花皮のことである。

「よう気づいたな」

応えた建は苦笑いする。

「なるほど。平常心でいれば、おれも気づいたであろうと言いたいわけか。確かにいささか浮き足立っていたのはいなめない」

真意を読み、盟友はさらに唇をゆがめた。

「然り。もはや『御通抜の建』は、どこにもおらぬな。剣だけではなく、言葉や考えにおいても、打てばひびくようになったのは重畳よ」

将馬は笑みを返した。なにを聞いても通り抜けてしまうことから、建は不名誉な異名を与えられていた。が、江戸のある旗本屋敷で『志士の寺子屋』の講義を受けた後、別人のような変化を遂げていた。

「『志士の寺子屋』のお陰じゃ」

小声で言った。

「聞いたところによると、あのような寺子屋を広めたのは、勝先生であるとか。まことか」

志士の寺子屋においては、平田学や百一新論といった朱子学とは異なる学問を指南していた。将馬は講義が行われていた旗本屋敷から、勝が出て来たのを目撃している。勝に確かめたわけではないが、なるほどと得心できたのを思い出していた。

「定かではないが、ありうる話やもしれぬ。いかような話も聞く権利があると、お考えになられるお方ゆえ」

将馬にその話を教えてくれたのは龍馬の盟友、中岡慎太郎だ。中岡に会ったことはだれにも告げていない。

〝日本の船出に力を貸せ、将馬〟

またもや中岡の言葉がひびいた。中岡は坂本龍馬からの言伝であるような話をしていたが、幕府のお尋ね者である龍馬たちに力を貸すのは、裏切り行為にほかならない。労咳に冒された父と幼い弟妹を持つ身にとっては、たやすく乗れる誘いではなかった。

「さいぜんの梅花皮だが」

建の言葉で気持ちを戻した。

「新選組と雖も、高価な柄巻きを用いられるのは、平の隊士ではあるまい。使うていたのは組長ではないか」

「そうかもしれぬ。根岸様の調書に記されていたのは、姓名と定かではない年齢のみ。顔立ちなどはいっさい記されておらぬ。新選組の組長ともなれば姓名は聞いた憶えがあるものの、顔が結びつかぬ。だれがだれやらよ」

「なれど向こうは、われらを細かく調べているだろうさ。裏の世界に通じているとい

う話だからな。おれは調べられたところで艶っぽい話が出るだけだが」

ちらりと建は、将馬に目を走らせる。

「おまえは、ちと都合が悪いのではないか。過日、船遊山に誘われたあれも、新選組はつかんでいるやもしれぬゆえ」

中岡との密談を暗にほのめかした。話せば盟友をも巻きこむことになると思い、ひと言も告げていなかったが、友なりに推測したに違いない。建は森山家の庶子という立場ゆえ身軽なのだが、それがいいのか悪いのか。一気に倒幕、あるいは討幕に走る懸念もあった。さまざまな事柄を慮るがゆえの沈黙でもある。

「勝先生の教えを受けたのは、まぎれもない事実。わたしは今でも勝先生の門弟だと思うている。江戸護衛隊の頭取格をお引き受けなされたのも、不甲斐ない弟子を案じてのことやもしれぬ。友木藩の騒ぎでは、思いもかけず、合力してくだされた。ありがたいことよ。勝先生との付き合いを隠すつもりはない」

「さよう、その勝先生じゃ。新選組はいかように思うているのか」

建も庭に目を向けた。勝は薩長土肥の藩士や浪士とも交流を持ち、幕府からは危険人物に見られているふしがある。無益な戦や流血騒ぎを避けるために、勝は動いているのだが、真意を理解できない愚か者が多かった。将軍を守るために京へ来た新選組

にしてみれば、あまり好ましい人物には映っていまい。
「我が盟友のように新選組のお歴々も、一度、志士の寺子屋で講義を受ければよいのではないか」
冗談まじりの言葉に、建は苦笑を滲ませる。
「学問嫌いのおれでさえ、短い間に影響を受けたからな。人はみな平等であり、身分の差などない。前にも言うたと思うが、かような世がくれば、おまえは美鈴様と晴れて所帯を持てる」
ひとつ小さな吐息をついた。
「夢のような話じゃ」
「うむ」
答えながら、将馬の胸に甦るのは美鈴の言葉だった。
〝おまえさまを止めているのは他のだれでもない、おまえさま自身ではありませんか〟
そうなのだろうか？
本当に自分が変われば、まわりの状況も変わるのか……。
「おまえの話によると、この新屯所は西本願寺が建てたそうだが」

建の囁きで気持ちを戻した。

「ゆえに西本願寺は、安らかな日々を取り戻したのではあるまいか。真新しい木の薫りが、西本願寺の辛苦を訴えているようじゃ。さいぜんの繰り返しになるやもしれぬが、新選組は本当に最初から屯所の普請を目論んでいたのであろうか」

盟友はわざとらしく深呼吸しながら問いを投げる。

「そこまではわからぬ。なれど西本願寺の屯所は、病人や怪我人であふれていたとか。台所には残飯があふれてしまい、衛生状態が非常に悪かったとも聞いた。隊士を診た医師が残飯は鶏や豚に食わせればどうだと提言したことから、今度は鶏や豚を飼い始めたらしい。迷惑などというものではなかろう」

「確かにな。新選組は京の民からは、忌み嫌われているようじゃ。美鈴様の懸念も無理からぬことかもしれぬ」

建の言葉によって、ふたたび美鈴のことが甦る。

〝具合が悪くなったり、怪我をしたときには、ここがあります〟

美しい眸が浮かんだ。

〝お帰りをお待ちしております〟

深々と辞儀をして、将馬たちを見送ってくれた。

本心だろうか。待っているのは、坂本龍馬の訪れではないのか。危険を冒してまで京に来たのは、龍馬に逢うためではないのか。

なにげなく庭に目をやったとき、

「え？」

将馬は、伊呂波紅葉のそばに立つ芸妓に気づいた。いつの間にか紅葉や銀杏が色づき、庭は一瞬のうちに様変わりしていた。袖から伸びた芸妓の白い手が、伊呂波紅葉の幹にふれている。髪に変わった簪、紅葉のような簪を挿していた。

「建。伊呂波紅葉のそばに芸妓が……」

呼びかけた刹那、女の姿は陽炎のように消えていた。

「なに？」

建は腰を浮かせて、庭を見やる。

「伊呂波紅葉はどれじゃ」

「椿の隣にある木だが、もうおらぬ。またたきする間に消えてしもうた」

「とうとう女子の幻を視るようになったか」

建は、にやにやしていた。

「美鈴様に早う気持ちを打ち明けろ。想いが高じて幻を……」

「あれは美鈴ではない」

つい呼び捨てにしてしまい、思わず赤面する。友はいっそう意味ありげな笑いを浮かべていた。

「呼び捨てにするのも、さまになってきたではないか。ま、惚れた女子の顔を見間違えるわけもなし、そうとなれば、件の芸妓はなにゆえ現れたのか。どうせなら、おれにもその姿を視せてくれればよいものを、と、おいであそばされたようじゃ」

姿勢を正した盟友に、将馬も倣った。顔を見るのは非礼とされているため、二人とも殊勝に頭を垂れている。廊下を歩く気配がしばらく続いた後、上座にひとりが座した。もうひとりは傍らに控えている。

三

「新選組局長、近藤勇だ」

近藤の挨拶を受けて、二人はいっそう畏まる。

「は」

「控えているのは、副長の土方歳三。面倒だから挨拶は省かせてもらう。目を合わせ

るなだの、直答を許すだのなんだの、うるさい礼儀はここではなしだ。新選組の流儀でな。一緒に動くからには、慣れてもらうしかない。かまわんから面をあげろ」

「は」

将馬と建は、二人同時に顔をあげる。

上座の近藤の年は三十なかば、いかつい顔をした男でお世辞にも色男とは言いがたい。しかし、花街では人気があるらしく、上役の調書によれば、あちこちに愛妾を囲っていた。

近藤は武蔵国多摩郡石原村の生まれだった。古武道の流れをくむ真剣勝負の実践剣法・天然理心流の四代目宗家であり、試衛館の道場主でもある。文久三年（一八六三）に、門弟らを率いて上洛。京で新選組を結成して、局長となっていた。文武両道、質実剛健の武人である。

控えている土方は、三十前後だろうか。近藤とは対照的なほどの色男だが、ありがちな弱々しい優男ではない。涼やかな目には静かな闘志が燃えているように見えた。さぞかし女にもてるのではないだろうか。その推測どおり、こちらも花街では浮き名を流しているようだった。

土方も出身は多摩郡の石田村。安政六年（一八五九）、試衛館に入門するや、めき

めきと頭角を現し、浪士隊の一員として京へ向かう直前には師範代になっていた。近藤の腹心として活躍しているが、鬼の副長と恐れられてもいる。

剛の近藤と柔の土方。

将馬と建に負けず劣らずの相方といえた。

「さっそくだが」

口火を切った近藤を、土方が手で制した。

「近藤さん。いくら礼儀はなしと言っても、姓名と年ぐらいは聞いておかなければなりませんよ」

やんわりと諭した。いかにも切れ者といった印象を受ける。穏やかな目を将馬と建にあてた。

「さて、どちらが竜で、どちらが虎なのか」

短い問いかけには、幾つかの事柄が隠されていた。二人が江戸の練兵館で神道無念流の免許皆伝を受けたこと、また『練兵館の竜虎』の異名を持っていること、目代から町道場へ通う許しを得るほどの扱いを受けている、などなど、二人の仔細はすでに聞き及んでいるのだと、土方は短い言葉で告げていた。

（まことに良き参謀役だな）

心で思い、応えた。
「それがしは佐倉将馬、年は二人とも二十一でござります」
「将馬は竜にござる」
建がすかさず継いだ。自ら竜だと名乗るほど自惚れていないのを、盟友はよく知っている。代弁してくれたようなものだった。
「そして、それがしが虎の森山建でござる」
「なるほど。のちほど神道無念流のお手並み拝見といきますか。うちにも神道無念流の遣い手がおりましてね」
「永倉新八様ですか」
すかさず将馬は言った。
「そうです。二人が来ると聞いて、楽しみにしているようですが、これも我が組の流儀と言いますか。互いの姓名を呼ぶときに、『様』や『殿』は使いません。わたしたちを呼ぶときも『さん』づけでけっこうです」
「承りました」
将馬の答えに、土方は苦笑いを浮かべる。
「畏まったその物言いは、抜けないかもしれませんね。おいおい慣れていただくしか

ないでしょう」

どうぞ、という土方の言葉に近藤がにやりと笑った。

「ようやくお許しが出たか。おれの懐刀は、こだわりの多い男でな。粋で洒落者（しゃれもの）だが、ちと口うるさい。それにも慣れてもらうしかあるまいな。さて」

急に真剣な顔になる。

「手代木様からの知らせによると、お尋ね者を江戸から追って来たとか。毒薬使いの一味であるとか」

「は。青丹一族と申します。頭目と思しき者の人相書を持参いたしました」

将馬は用意して来た人相書を懐から出して、土方に渡した。礼儀はなしと言っていたが、いきなり近藤に近づくのは憚（はばか）られる。土方はちらりと見ると、すぐ近藤に渡した。

渡された人相書を見たとたん、

「ほう」

近藤は相好を崩した。

「名は上田糸江とな。年増のようだが、なかなかの美形ではないか。まことにこの女子が、青丹一族とやらの頭目なのか」

「さだかではありませんが、その可能性は高いのではないかと存じます。当初、頭目と見ていた男が、命を懸けて上田糸江を守りましたゆえ。他にも二人、配下と思しき女子がいたのですが、彼の者たちの人相書はまだ描かれておりません」

藩主の愛妾と下女の人相書も作成するよう訴えたのだが、出立の忙しさにまぎれてしまい、実現されないまま今にいたっている。将馬は佐平次に訴えるつもりでいた。

「何度か噂は耳にしたことがあります」

土方が口をはさんだ。

「青丹一族という名を聞いたのは初めてですが、島津斉彬様、徳川家茂様、そして、孝明天皇と次々に不審な死を遂げている。毒薬を使う一族がいるのではないかという噂が、まことしやかに流れました」

「手代木様からお話を伺った後すぐに調べさせた。土佐藩が匿っているかもしれぬという話があるとか。薩摩藩邸に立ち入るのはむずかしいが、土佐藩邸であれば詮議できなくもない。まあ、調べたところで出て来るはずはないがな。自慢じゃないが、どこからか話が洩れる。大所帯になりすぎるのも考えものよ」

近藤は実に正直な男だった。有象無象の輩が集まった結果、隠密行動が取れなくなっているのかもしれない。新選組の内部に間者が入りこんでいるのではないか。その

推測は当たっているように思えた。

（近頃、大きな手柄をたてられない裏には、大所帯ゆえの悩みが隠れていたか）

新選組は少し焦っているのかもしれない。青丹一族の捕縛は、手柄をたてる好機と考えているのかもしれなかった。かなり真剣な様子が見て取れる。

「青丹と聞けば思い出すのは、『青丹よし奈良の都は咲く花の匂うがごとくいま盛りなり』という歌だが」

土方が博識なところを披露した。

「もしや、奈良王朝の血を引く一族なのか」

「仔細はわかりませぬ。彼の者たちが出入りしていた美濃国・友木藩の江戸屋敷では、下屋敷に毒草畑のような薬草園がございました。先程の方々の死が、青丹一族の仕業であるならば、友木藩で育てられていた毒草が用いられたやもしれませぬ」

「友木藩は御家断絶か」

近藤が訊いた。

「いえ、それは免れました。嫡男の友良様が、すでに跡目を継いでおられましたゆえ、御沙汰なしとなっております」

「ずいぶんと甘い対応ではないか。これも手代木様に伺った話だが、今年に入ってか

ら上様は二度も毒を盛られた由。毒味役が身代わりになったようだが、毒の出所が友木藩の薬草園となれば、しかるべき御沙汰がくだってもいいのではあるまいか」

率直な意見には、やむなく真実を告げた。

「前藩主、遠山友則様と奥方様は自刃なされております。幕府はご夫妻のお気持ちを汲んだのではないかと存じます。むろん、われらも御家存続を願い出ましたが」

それにしてもと、実は将馬も内心同じ疑問をいだいていた。改易は免れまいと覚悟していたのだが、やはり、前藩主夫妻の命を懸けた訴えが慶喜の心にひびいたのかもしれない。勝を通して知らせた悲痛な嘆願を受け入れて、友木藩の存続を決めたことは充分、考えられる。

「佐倉君は、あの勝先生の門弟ですから」

土方が皮肉を言った。言動に勝への気持ちが表れていた。薩長と通じている男、幕府の裏切り者、佐幕のふりをしながら幕府を裡側から食い破る妖怪もどき。土方の両目には、ぞくりとするような冷たさが漂っていた。

「そのことだが、佐倉は坂本龍馬の顔を存じよるのか」

近藤がまたもや率直な問いを投げる。勝が提言した海軍操練所で、将馬が龍馬や中岡と一緒に学んだことも当然、知っているはずだ。

「はい」

将馬は短く答えるにとどめた。昨日の役人も言っていたように、龍馬の背丈ぐらいは知っていても素顔を知る者は少ない。次に出る言葉が容易に想像できた。

〝人相書を作る手伝いをしろ〟

と近藤は命じるはずだ。勝も幕府の重臣に命じられたのではないだろうか。その結果が昨日の人相書だとすれば、生真面目に応じる必要はないのかもしれない。

「坂本の」

「近藤局長」

建が覆い被せるように言った。

「池田屋騒動において、新選組は素晴らしい働きをしたと伺いました。まさに新選組の勇名が轟いた騒ぎにござります。是非、お話を賜りたいと思います次第」

建なりの気遣いだったに違いない。

(よく次に出る話がわかったな)

将馬は友の変化に、あらためて驚いている。坂本龍馬との関わりを建はむろん知っているが、昔であれば会話の先を読み、話を逸らすような真似はできなかった。これも旗本屋敷で開かれた『志士の寺子屋』のお陰だろうか。平田学を中心とした今まで

の学問とは異なる考えに、建はかなり傾倒している。

いずれにしても龍馬についての対応を考える時が、与えられたのはありがたかった。あらかじめ覚悟をしておくべきだったものを、敢えて考えないようにしていた部分がある。自分が幕府の人間であることを忘れたいと、心のどこかで思っているのかもしれない。忘れられるわけがないものを……。

「池田屋騒動か」

近藤はつるりと顎を撫でる。待ってましたと言わんばかりの表情をしていた。

「あれは、そう、忘れもしない元治元年（一八六四）六月五日。われらは二手に分かれて、浪士狩りに出発したのじゃ。会津藩とは五つ（午後八時）頃に待ち合わせたというに、やって来ない」

会津藩はわざと遅れたというのが定説になっている。危ない役目は新選組に押しつけると同時に、浪士の出身諸藩への会津藩なりの気配りであるとも言われていた。攘夷派と開国派、佐幕派と勤王派と口で言うのは簡単だが、内実は複雑に絡み合っている。会津藩は新選組の仕業にしたかったのだろう。

「痺れを切らしたわれらは、鴨川を挟んで御池から四条間の料亭や旅館をしらみつぶしに当たり始めた」

御用改めを行ったこの日の朝、新選組は四条小橋の枡屋喜右衛門宅を急襲。捕らえた喜右衛門を激しい拷問にかけ、重要な話を得ていた。

〝近く御所を焼き討ちして佐幕派の公卿・中川宮を捕らえて、松平容保を惨殺する。その謀を実行するために、長州、土佐、肥後の浪士が続々と京に潜伏している〟

近藤はさっそく松平容保に報告。この夜の大捜索となったのだった。

「長州屋敷の近くまで行ったが、浪士たちは集まっていない。あれは、そう、四つ（午後十時）頃だったか。念のためと思い、三条小橋の西にある〈池田屋〉に踏みこんだのよ」

「それが、ずばり的中した」

建が継いだ。近藤は満足げに頷き返した。

「うむ。相手は二十人ほどいたが、酒を飲んでいたからな。決死の覚悟で斬り込んだわれらに、ことごとく斬り伏せられた次第よ。とはいえ危なかった。歳が来てくれなんだら、ここにはいなかったやもしれぬ」

と参謀役を頼もしげに見やる。騒ぎを聞きつけた土方部隊が参戦する頃には、会津藩も駆けつけ、捕縛に加わった。

「口惜しいのは、桂小五郎（木戸孝允）を取り逃がしたことだ。あの場にいたのは、

おそらく間違いない。流石（さすが）は『逃げの小五郎』と妙な感心をした憶えがあるわ」

「古い手柄話はそれぐらいにして、『練兵館の竜虎』にも、隊士の稽古に加わってもらおうではありませんか」

土方が提言した。古い手柄話の部分には、どこか自嘲気味なひびきが感じられた。あらたな手柄をたてなければ、新選組の明日が厳しくなると察しているのかもしれない。冷静な考えを持っていると将馬は思った。

（新選組がどうなるかは、鬼の副長次第か）

警戒心は胸の奥深く封じこめる。

「そう、だな」

近藤はまだ話したそうだったが、立ちあがった。将馬と建への稽古がどんなものになるか、また稽古の様子によって青丹一族捕縛に、本気で合力してくれるかどうかもわかる。将馬は、互いの覚悟を確認するように建と頷き合っていた。

四

屯所に設けられた武道場に入った瞬間、

「総司ではないか」

近藤が驚きの声をあげた。青白い顔をした幽鬼のような男がこちらを見る。年は二十代なかばぐらいだろうか。竹刀を持つ手は痛ましいほどに細い。

それでも沖田総司は笑みを押しあげた。

「噂の竜虎と手合わせしたいと思いましてね。それに寝ているばかりでは、身体がなまってしまいます。深雪さんの手料理のお陰でしょう。ここしばらくは具合がいいんですよ」

沖田は九歳で試衛館に入門。弱冠二十歳で塾頭となった無類の天才剣士である。新選組では近藤の秘蔵っ子として、一番隊組長を務めていた。労咳を病み、近頃は噂を聞かなくなったが、剣の実力は近藤より上かもしれないと言われている。

ちなみに深雪さんというのは、近藤が木津屋橋の家に囲っている愛妾のことだ。おそらく沖田はそこで療養しているのではないだろうか。

「気持ちはわからんでもないが道場は冷える。身体にさわるぞ」

近藤の気遣いに、

「一番隊組長にお相手いただけるのは、願ってもないこと。是非、一手、お手合わせ願いたく存じます」

建は別の気遣いを示した。友が投げた羽織を、将馬が受け取る。剣士におとなしく寝ていろと言うのは、鳥に飛ぶなと命じるようなものかもしれない。沖田の顔に喜色が滲んだように見えた。

「喜んでお相手つかまつろう」

と竹刀を一振りする。隊士たちは道場の壁際に移った。話を聞いたのだろう、道場の格子窓や戸口に、隊士が集まり始めている。永倉新八や斎藤一といった遣い手の組長は不在なのか。あるいは先程擦れ違った隊の指揮を執っていたのか。紹介されることもなく、稽古試合となっていた。

（刀と脇差に梅花皮を用いていた者が、永倉新八や斎藤一だったのやもしれぬ）

将馬は建の羽織を膝に置き、隊士の端に加わる。道場の壁に設けられた刀掛けには、他の流派とは段違いに握り手の部分が太い木刀が掛けられていた。太い木刀は当然のことながら重い。この重い木刀を振りあげるとき、打ちこむとき、ふたたび振りかぶるときと、状況に応じて自然に握りを緩めたり締めたりする心得が必要になる。

このように柄を操作する工夫を「手の内」と呼ぶのだが、天然理心流の木刀は柄を際立って太くすることによって、常に握り方を意識しなくては満足に使えない作りになっているのだった。

（日々の稽古を通じて、自ずと手の内が鍛えられていれば、いざ真剣勝負となった折にも役立つのは間違いない）

将馬は記憶から天然理心流の知識を引き出している。昨夜、建にも告げたのだが、言葉だけではどこまで伝わったか。が、沖田総司と手合わせできるだけでも重畳、小さな動きも見のがすまいと将馬は集中力を高めた。

抜きん出た遣い手と謳われる沖田総司の腕前やいかに。

「はじめ」

近藤自ら判定役となっていた。建と沖田は竹刀の先を合わせて、間合いを取る。すでに稽古をしていた沖田は、身体が温まっている点においては有利だった。しかし、なんと言っても労咳を患う身。竹刀を握りしめて動くだけでも疲れるのではないかと思ったが……爛々と輝く両目からは、相手を呑みこむような激しい気魄があふれ出ている。竹刀の先が離れぬよう、建の動きを追っていた。

（沖田さんは、気組を会得しているのやもしれぬ）

気組は、継承する者がほとんどいなくなったとされる天然理心流の気合い術だ。刀を合わせたまま相手と押し合い、視線を外すことなく肉迫して闘気を萎えさせておいてから、一気に踏みこんで突きを浴びせかける。

沖田は竹刀の先を外すことなく合わせている。一撃必殺の突きを狙っているのは確かだった。盟友は気持ちの上で負けていると思ったに違いない。

建は正眼に構えて、少しずつ足を送り始めた。体力のない沖田を動かして隙を狙うつもりなのだろう。神道無念流は受け流す技に秀でている流派、相手が攻めて来るのを誘う意味もあるのかもしれなかった。

睨み合いが続くかと思われたそのとき、

「はぁっ」

建はいきなり竹刀を突き出した。沖田は素早く受け止める。すかさず踏みこんで鋭い突きを放った。

が、建は左十字で受け流すや、切り返して打ちこんだ。沖田はいち早くさがっている。病魔に冒されてなお動きに衰えは見られなかった。

（まだ戦えることを示しているのか）

これは沖田なりの訴えにも思えた。将馬と建が加わると聞き、稽古試合を目論んだのではないだろうか。戦列に戻りたいと懸命に告げているように感じられた。沖田は竹刀の先を、ふたたび建の竹刀に合わせる。

刹那、

「てぃっ」

沖田の鋭い一撃が、建の竹刀を叩き落としていた。

「一本」

近藤の声で武道場の緊張が解ける。みな息をするのも憚られるほどに集中していたのは確かだろう。張り詰めていた空気が一気にゆるんだ。

「今一度、お願いいたします」

建が声を張りあげる。負けん気に火が点いたようだったが、沖田となら将馬とて手合わせしたい。穏やかな気質だと仲間からは言われるものの、相手が噂の天才剣士となれば話は別だ。

名乗りをあげようとしたが、

「局長」

不意に戸口で声があがった。ひとりの隊士が仲間を押しのけるようにして道場内に来る。近藤のそばに駆け寄った。

「なに？」

耳を傾けた近藤が顔をあげて、隊士たちを見まわした。

「島原の遊女屋に、坂本龍馬が登楼ったという密告が、伏見奉行所にあった由」

「坂本龍馬」

継いだのは、沖田だった。稽古試合を見守っていた隊士の間にどよめきが広がっていく。それほどに龍馬の名は大きな衝撃をもたらした。

（贋者だ）

将馬は信じられない。島原の名が出た瞬間に強い違和感を覚えた。密談をするのであれば、龍馬はもっと目立たない場所を選ぶはず。花魁を招んで浪士と話すような愚は犯さないはずだった。

（偽りを流して攪乱する策か？）

反幕府派にとって、新選組が厄介な相手であるのは確かだろう。将軍のために動き、将軍のために躊躇うことなく浪士を殺める。正真正銘の佐幕派だ。ゆえに新選組の目を島原へ引きつけておく策を考えた。

「稽古はこれまでだ」

近藤が告げる。

「御用改めには、佐倉と森山も加わってくれ。だれか二人に羽織の用意を頼む。仔細はあとで話すが、ついでに探してほしい女子もいるのだ」

合図を受けて土方が、上田糸江の人相書を隊士に渡した。将馬も袖に入れておいた

人相書を配り始める。真っ先に手を差し出した沖田にも一枚、渡した。

稽古試合を中断した若き剣士の顔は、疲労の色が濃いように見えた。集中力が途切れたとたん、病が身体全体を覆いつくしたかのようだった。

（父上よりも悪いかもしれぬ）

いくら前線に出られると訴えたところで、近藤は沖田を使うまい。屯所にひとりで残されるのは、死ぬよりも辛いことに違いなかった。

「近藤さん。わたしも行きます」

沖田は糸江の人相書を掲げる。

「この女子の探索は、おまかせください。一番隊の者を四、五人動員して、探索部隊にします」

「だが」

渋る近藤に、将馬は告げた。

「それがし、いささか本草学の心得がございます。またそれがしの父も沖田さんと同じ病を患うております。お許しいただければ、煎じ薬を調合いたしますが」

「頼む」

沖田が即答する。

「かかりつけ医の薬湯は、今ひとつ効果を感じられぬ。どうしたものかと思うていたところよ」

「よし。佐倉に煎じ薬を頼む件は承知した。人相書の女の件については、戻ってからにしようではないか」

近藤は自分も出張る気持ちのようだった。密告が真実であれば、大捕り物になるのは間違いない。

（偽りであってくれ）

将馬は心の中で祈っている。

五

島原という名は俗称で、正式には西新屋敷である。

格式の高さなどから言えば、江戸の吉原と同じような遊郭ではないだろうか。周囲には堀がめぐらされており、塀に取り囲まれて出入り口は一か所。大名や公家、大商人しか相手にしない遊女の最高位・太夫は、島原通いのほとんどの者にとっては雲の上の存在だった。

しかし、近藤や土方は上客として扱われているのか、遊女の控え場の置屋や、客が待つ揚屋に御用改めと称して出向くと、例外なく主が丁重に応じる。もっとも表向きはということなのかもしれない。主や女将の笑顔は、作り笑いのように思えた。

行き交う昼客や商人は、赤地に白く『誠』と染めあげた新選組の隊旗や、だんだら染めの派手な羽織に、通り過ぎざま冷ややかな目を向ける。隊士に睨みつけられると慌てて会釈する者もいた。

「おらんな」

近藤が調べた揚屋から出て来た。

「夜までどこかに潜んでいるのかもしれません。もっとも、われらが出張ったのを見て、立ち去るかもしれませんが」

土方は油断なく細い道の前後に目を走らせている。局長と副長の二人がいるのを見れば、主たちへの威嚇になるのはあきらか。御改め料とでも称しているのかもしれない。近藤は揚屋の主からと思われる金子の包みを、これ見よがしに懐へ入れた。

「さて、次に行くとするか」

にやにやしながら、隣の揚屋に足を向ける。御用改めは一転、賄賂の取り立てと化していた。最初からそのつもりだったのではないだろうか。池田屋騒動以来、新選組

は急に金まわりがよくなったと言われているが、そのほとんどは商人からなかば強引に取り立てた金だった。

（新選組が嫌われる理由のひとつがこれか）

将馬はつい建と目顔を交わし合っている。祇園ではあからさまに「礼儀を知らはらへん田舎者」と言われているようだが、島原では多少ましな扱いを受けているのだろう。祇園は長州贔屓というのが定説になっていた。

「わたしは置屋を当たってみます」

土方は、数人を連れて別行動を取る。浪士狩りはもちろんだが、金を集めるためにも二手に分かれた方がいい。将馬と建は、近藤隊と一緒に動いた。坂本龍馬の顔を知っているのは将馬ひとりである。

「佐倉、似た男を見たら教えろ。すぐに引っ捕らえて調べるからな」

近藤が将馬を振り返った。これで何度目になることか。うんざりするほど同じ言葉を繰り返していた。

「はい」

将馬は、だんだら染めの羽織を早く脱ぎたくてたまらなかった。これが格好よいという理由で、新選組に入隊する者もいるようだが、賛同しかねている。似合わない隊

士のひとりにあげられるのではないだろうか。

「お。太夫道中じゃ」

ひとりの隊士の頬がゆるんだ。昼見世に呼ばれたのだろう、太夫道中に出くわした。最前列は禿髪の幼い二人、次を歩いているのはまだ前髪を下げているが、簪飾りをしている一人と、髷を結っている二人の芸妓。そして、太夫は打掛に派手やかな帯を締め、豪華に簪や大櫛、笄を挿していた。

太夫の後ろの差しかけ傘には、置屋の定紋かもしれない。桔梗の紋が入っている。花車を曳く禿髪の幼子は、せいぜい五、六歳にしか見えなかった。

（花菜とさして違わぬ）

将馬は末の妹を思い出している。年が明ければ花菜も五歳。あまり年の違わない少女が、花街にいることに驚きを禁じえなかった。

「あの年増の芸妓、変わった簪を挿しているな」

建がひとりの芸妓を顎で示した。紅葉を象った簪が、秋の名残りを感じさせる。花や鶴の意匠はよく見るが、確かに紅葉の簪は珍しいかもしれない。

「あの簪は」

将馬の脳裏には、いやでも幻の芸妓が甦っている。顔立ちもなんとなく似ているよ

うに思えた。

「女子の細かいところにまでよく目が行くものよ。おぬしなればこそかもしれぬな。わたしは言われなければ、見過ごしていただろう」

「流石は建と思うてくれ。伊達に遊んでいるわけではない。京と言えば紅葉の美しい寺が有名ゆえ、それにあやかっての簪やもしれぬな」

「うむ」

ふたたび幻の芸妓が浮かんでいた。伊呂波紅葉のそばに現れた芸妓。京では変わった簪を挿すのが流行りなのだろうか。

「さいぜんの芸妓を思い出している顔じゃ」

建が耳もとに囁いた。驚いて顔を見る。

「図星だったか」

ふふんと友は得意げに鼻を鳴らした。

「おまえが遠い目をするのは、物思いに沈んでいるときよ。多くは別嬪の御新造のことを考えているのだろうがな。此度は紅葉ではないか。例の芸妓だなと思うた次第」

「建殿のご炯眼には、ただただ恐れ入るばかりよ」

と二人が話している間も、近藤は揚屋を改めては、確実に金子を増やしていった。

もはや浪士狩りなのか、金集めなのか、わからなくなっている。

「今宵は、二人の歓迎会じゃ」

近藤は悪びれたふうもなく告げた。なるほど、と将馬は得心する。自ら出張った裏には、歓迎会に名を借りた宴会が隠れていたわけだ。ありがた迷惑な話だったが、口にできるわけもない。

「ありがたいことですな」

建の言葉に、無言で頷き返した。

（この分ならば、坂本様はおられまい）

心底ほっとしている。近藤の思惑を読み取って、他の隊士も素見気分になっていた。大物浪士の偽情報は、日常茶飯事ではないのだろうか。比較的、安い値段の遊女屋を覗き始めている。今宵、登楼る見世を決めようと言い出す者もいた。

「まだ陽が高いではないか」

近藤は、いちおう御用改めを装っていた。

「次に行くぞ。佐倉、森山、一緒に来い」

「は」

従った将馬の後ろに建が付いた。立ち並ぶ揚屋の中では、一番出入り口に近い見世

だった。近藤は隊士に尖兵役をまかせない。
「新選組だ。御用改めである」
玄関を入って大声をあげた。
「あ、こ、これは」
主と思しき男の頬が、さっと緊張したように思えた。
「御用改めでございます」
二階に向かって叫んだ。
「新選組の御用改め……」
「どけ！」
荒々しく近藤は男を押しのける。草鞋のまま玄関にあがり、二階へ駆けあがった。
将馬と建もあとに続く。他の隊士たちも後ろに続いていた。
（まさか坂本様が）
将馬は生きた心地がしない。階段をあがったところで、数人の浪士と鉢合わせする。
近藤は躊躇うことなく愛用の刀――虎徹を抜き放った。
「いやぁっ」
気合いもろとも一人に真っ向斬りを叩きつける。腰を落とした一撃を受け、浪士の

顔面が鮮血に染まった。真剣勝負に強いと言われる天然理心流の、手本のような攻撃であろう。斃れた仲間を見たもう一人が、その場に座りこんだ。腰が抜けてしまったのかもしれない。

「奥の座敷じゃ」

近藤は縄でその男を捕縛しにかかる。手際の良さに圧倒されながらも、将馬は建と奥の座敷に歩を進めた。廊下に面した障子は閉まっている。

（人の気配が在る）

将馬は友と目配せし合い、一、二の三で建が障子を開けた。と同時に刀が突き出される。将馬はそれを右十字で受け流した。すかさず攻撃の刃に変化させる。がら空きになった相手の胸もとを刀でつらぬいた。

「ぐう」

いやな声をあげ、男は身体を硬直させる。奥にいたもう一人に、建が斬りかかった。すでに相手も刀を抜いている。かろうじて受け止めたが、建に力負けしたのだろう。滑った建の刀が男の顔面に食いこむ。それでも男は刀を離さない。のしかかる形になった建の腹に突き出そうとした。

「建っ」

将馬は男の腕に刀を振り降ろした。これまた近藤のようなお手本の一撃だったかもしれない。刀を持っていた右腕が、ごろりと畳に転がった。建は刀を持ち替えて、男の胸にとどめの刃をお見舞いする。

「……」

声をあげる暇もなく、男は絶命した。自分もそうだが、建も血飛沫を浴び、血まみれだった。他の隊士が窓を開けて、屋根に逃げていないかを確かめている。

「他にはいないようです」

「よし」

近藤は刀を一振りして、鞘に収めた。

「次だ」

淡々と命じる。目の前の惨状がなかったかのような顔をしていた。遅れて来た土方が、二人の肩を叩いた。

「ご苦労さまです。二人は後ろに付いてください」

せめてもの気持ちだろうか。

斬り込み役を免れても喜べるわけがない。

（これが新選組の日常か）

将馬は、寒気を覚えていた。

六

「さあ、飲めのめ。今日の主役は、佐倉と森山じゃ」

近藤は上機嫌で酒の注ぎ役を務めている。御用改めを終えた後、一同は新選組の馴染みの料亭で酒宴を開いていた。この後、揚屋に繰り出すことが決まっている。土方は番屋で雑用を片付けているため、まだ姿を見せていない。

「いやいや、見事な腕前であったわ」

将馬の杯に酒を注ぎ、近藤はにやりと笑った。

「貴公ら、初めてではないな？」

二人を交互に見る。人を斬ったのは、という部分を抜かしていた。将馬は曖昧に頷き返したが、

「さよう。以前にもござりました」

建は堂々と答えた。

「京ほどではござらぬが、江戸もなにかと物騒になっております。目代様の命で動い

た結果、やむなき仕儀と相成りました次第」
「頼もしいことよ。いや、山同心なる御役目もよう知らなんだゆえ、刀ではなく剪定鋏でも使うのではないかと思うてな」
「はあ」
と建は、将馬を見やる。
「それがし、剪定鋏を携えております」
馬鹿正直に告げ、腰の袋から剪定鋏を取り出した。
「む」
近藤は一瞬言葉を失ったようだが、すぐに大声で笑い始める。
「ははは、ふはははは、これはいい。『練兵館の竜』は、花木も愛でる由。なれどいつ剪定鋏が凶器になるやもしれぬ。おのおのがた、ご油断めさるるな」
「局長。次はわたしの酒を受けてください」
あらたに運ばれて来た銚子を、隊士のひとりが仲居の膳から取りあげた。毒を仕込む場合、酒宴の席ほど都合のよい場所はないだろう。
「お待ちを」
将馬は、銚子の酒を素早く確かめる。

「大丈夫です」
膳ごと仲居から受け取った。
「いちいち気にするな。酒がまずくなる。それに毒味だけで酔っぱらってしまうではないか。ゆるりと酒を楽しむがよしじゃ」
近藤は無防備きわまりないことを言った。毒の恐ろしさを知らないのではないだろうか。緊張感に欠けている。
「失礼いたしました」
将馬はそれでも詫びて、注ぎ役を務め始めた。局長や副長とうまくやらなければ、青丹一族は捕らえられない。新選組は確かに危険な集団だが、彼の者たちのような始末屋が必要なのも事実だった。
「先程の浪士は、小物でした。やはり、坂本龍馬の話は偽情報だったようですね」
ひとりが近藤に訊ねる。
「いや、わからぬ。坂本はわれらの動きを察知して、うまく逃げたのやもしれぬ。まだ京には来ておらぬという話だったが、そろそろ現れる頃かもしれん。引き続き、御用改めを行うのが得策よ」
「土佐藩の京の藩邸は、調べないのですか」

他のひとりが声をあげた。
「調べたところで、わかるまい。たとえ坂本を匿っていたとしてもだ。真実を言うわけがあるまいさ。なあ、佐倉」
近藤は将馬に同意を求める。
「おそらく、局長のご推察どおりではないかと思います」
あたりさわりのない答えを返した。
「なぜ、新入りに土佐藩邸の様子がわかるんですか」
「もしや、もとは土佐浪士か？」
「そうであるならば急ぎ吊しあげて、薩長土肥の動きを吐かせるべきではないかと存じます」
いくつかあがった声を、近藤が仕草で止める。
「佐倉と森山は、寛永寺の山同心よ。今は江戸護衛隊として京に来ておる。話が前後してしもうたが、先程、渡した人相書の女子は、青丹一族の頭目やもしれぬとか。上様に二度も毒を盛り、お命を狙うた不届き者。彼の者たちを捕縛するため、いっとき新選組に籍を置く仕儀に相成った次第よ」
簡潔に纏められた説明には、局長の優秀さが表れていた。懐刀の土方は言うに及ば

ず、近藤自身も能吏なのではないだろうか。鬼の副長・土方に、つい目を向けがちになるが、本当に良き相方なのだと将馬は感じた。

（どちらが欠けても、新選組は成り立たぬな）

局長の話を聞き、新入りの二人に向けられた冷たい目が変化した。

「寛永寺の山同心か」

「そういえば、上様の護衛役として来ていたな」

隊士の言葉に、近藤が頷き返した。

「さよう。佐倉たちは交代部隊に同道して、京へ入った由。伏見に家を借りたそうだ。手代木様のお話では、別行動を取る場合もあるとか」

向けられた問いかけの眼差しに将馬は応えた。

「はい。此度は御用改めに加わりましたが、われらの務めはあくまでも青丹一族の捕縛。手空きのときはお手伝いいたしますが、一味の動き次第では、別行動を取ることになるやもしれませぬ」

京都守護職の配下・手代木が、かなり細かく指示を与えていたのが、いささか意外だった。濃やかな心遣いを持つ男なのかもしれない。

「まあ、青丹一族に関しては、総司が調べ役に名乗りをあげてくれたゆえ、まかせる

つもりだ。一番隊のうちから何人か手伝わせよう」
近藤の決定に、将馬と建は畏まる。
「は」
「ありがたき幸せ」
「その代わりと言ってはなんだが、煎じ薬を頼む。医師を代えても、はかばかしくなくてな。思案していたところよ」
「近藤さん」
土方が姿を見せた。騒ぎの後始末も己の仕事と割り切っているに違いない。また京都奉行所や伏見奉行所、番屋とうまく連携することによって、大きな手柄に結びつくことをよく知っているのだろう。ちらりと将馬たちを見やって、土方は言った。
「たった今、奉行所に知らせが届いたのですが、摂海に外国の軍艦が現れているとか」
摂海は大坂湾のことである。
「なに？」
近藤は腰を浮かせた。
「どこの国だ。英吉利か、仏蘭西か」

「まだわかりません。おそらく兵庫港の開港に関わる動きではないかと思いますが、御所の公卿たちの大騒ぎは必至。すわ一大事、夷狄が攻めて来る、早う逃げねばと慌てふためくでしょうね」

土方は的確に状況を読んでいた。孝明天皇を失った後、兵庫開港を推し進めていた慶喜は一気に後退するかと思ったが、意外にも新天皇の勅許を取り付けている。

「兵庫開港か」

ふたたび近藤が、将馬に疑問を投げた。

「あれはいつになったんだったか」

「確か今年の十二月七日から兵庫港を開港し、江戸と大坂に異人の居留を許す旨、布告されたのではないかと存じます」

政の話に関しては、建はほとんど口をはさまない。黙って酒を飲んでいた。

「以前にも似たような話がなかったか」

近藤の問いかけに、またもや応えた。

「ありました。二年前の九月頃です」

将馬は簡潔に説明する。

上京参内した十四代将軍家茂が、大坂城へ帰ると、目の前の海に英吉利、仏蘭西、

阿蘭陀の軍艦九艘が来ていた。要求は兵庫開港である。当時、家茂の後見役だった慶喜の本音は兵庫開港だったが、薩長土肥や諸藩が絡み、かなり複雑な事態に陥っていた。

「そこで慶喜様は、表向きは開港に反対の路線を取り、雄藩、これは主に薩摩藩に向けての対策だったと思いますが、天皇から条約勅許を取りつけることにお心をくだかれました。放っておけば薩摩藩に主導権を握られてしまいますから」

「そのあたりが、ちとわからぬ」

横から建が声をあげた。

「あのとき、薩摩藩はいかような考えだったのか」

「兵庫開港には、断固反対の立場を取っていたな。そのため、朝廷から直接外国公使団に向けて、回答延期を申し入れるべきだと訴えていた。その直接交渉は、薩摩藩が死力を尽くしてやると」

「それはならん」

近藤が口をはさむ。

「それを薩摩に許せば、政の主導権は幕府を離れてしまうではないか」

「仰せのとおりです。幕府を離れた主導権は、諸侯会議、つまり、雄藩連合に移って

しまう。薩摩の案が通れば、徳川の天下もこれまで。家茂様の後見役だった慶喜様は、公卿たちを相手に粘りました」

夷狄をすぐさま大坂沖から退去させよと考える公卿に、慶喜は夜通し訴えた。疲れ果てて退散しようとする公卿に、

〝それがし不肖ながら多少の人数を有せり〟

となかば脅しまがいの台詞を吐いた。つまり逃げ出すようなら家臣に命じて、武力を行使するぞと告げたのである。

「公卿たちは抵抗する気力を失い、とりあえず条約を許容して、条約中不都合なところは諸藩とも協議して改訂する。兵庫開港は取り止めとなった由」

「慶喜様の作戦勝ちだな」

近藤が笑った。

「しかし、兵庫開港が一時的に取り止めになっていたとは知らなんだわ。まあ、朝廷や雄藩を欺くため、いや、言葉が悪いか。政をうまく運ぶために、嘘も方便となったのであろうさ。なにが起ころうとも、新選組は上様のご命令に従う」

「わたしはひとつ大きな疑問があります」

隊士のひとりが手をあげた。

「言うてみろ」
近藤に促されて、続ける。
「十四代将軍家茂様は、なにゆえ、二十一の若さでみまかられたのか。暗殺されたのではないかという噂が消えません。話に出ていた青丹一族が関わっていたとすれば、だれが彼の者たちに暗殺を命じたのか」
「それは」
近藤は返事に詰まって、沈黙した。隊士たちも黙りこむ。
将馬は静かに席を立った。

第三章　敗けて勝つ

一

厠で小用を終えた後、将馬は料亭の座敷に戻ろうとしたが、

「む」

別の座敷から手招きしているのを見た。手の主が顔を引っ込める寸前、ちらりと憶えのある顔が見えた。意表を衝く現れ方は、もしやと思った。急いでその座敷の前に行く。

「勝先生」

勝義邦（海舟）が腰をおろしたところだった。いよっと言うように片手をあげるのが、いつもの挨拶。

「おまえさんがここへ来ることは、新選組の座敷には知らせてある」
今度は座るよう手で示した。しげしげと隊服の羽織を見つめている。
「驚いたね。存外、隊服が似合うじゃねえか。いまや新選組は士（さむらい）の憧れの的だ。視線が熱いほどじゃねえのかい」
「皮肉はおやめください」
将馬は、かぁっと頬が熱くなるのを感じた。慌て気味に羽織を脱ぎ、勝の向かい側に腰をおろした。
（なるほど）
と得心してもいる。近藤が手代木の話として告げた裏には、おそらく勝がいたのではないだろうか。だからこそ濃（こま）やかな指示を与えられた。先まわりして座敷を取っていたことから、恩師の心配りを察している。
「どんな具合だい」
勝が訊いた。曖昧（あいまい）な問いかけもまた勝流と言えるかもしれない。
「家茂様は暗殺されたのではないかという話が出ました。青丹一族が関わっているのではないか。では、彼の者たちに命じたのはだれなのか、と」
将馬は今し方、話題になった事柄を口にする。

「みまかられた将軍と現将軍は、いかような様子だったのですか」
不仲だったのか、とまでは言わなかったが、勝は察したようだった。
「そう、慶喜様と家茂様は、あまり仲がいいとは言えなかったな。表立った対立こそなかったものの、家茂様は幕府の中でも懐古主義の重臣派だったよ。くっついていたのは、がちがち頭のお歴々でな。撤廃した参勤交代を復活させ、藩主の奥方を人質として江戸へ差し出せときた。今更なにを言いやがると、おれは呆れたね」
江戸っ子のべらんめえ口調が、不思議に心をなごませてくれる。将馬はこの空気が好きだった。理屈抜きに勝はすごいとも思っている。だれよりも尊敬できる恩師だった。
「家茂様はいかようなお方だったのですか」
「そうよな。人に好かれるお方だった。育ちが人柄に出るというのか。おっとりとした優しい方だったが、残念ながら政の才覚はなかったよ」
勝の猪口に、将馬は酒を注いだ。膳を用意しておいてくれたのも、勝らしい気配りといえる。なぜ、会いに来たのかはわからないが、焦って問い質すつもりはなかった。
「おまえさんも知ってのとおり、しばらく家茂様は江戸におられた。後見役の慶喜様は京で実務にあたっていた。言うなれば、慶喜様はもうひとりの将軍みてえなものさ。

これはまずいと思ったんだろう。取り巻きの重臣にせっつかれて、家茂様はご上洛と相成ったわけだ」

「そして、ご上洛後、わずか一年足らずで、ご逝去なされた」

継いだ将馬に、勝は沈黙を返した。

「……」

物言いたげな目は、以前にも見たことがある。あれは、そう、潜入した友木藩の前藩主・遠山友則の話になったときだ。

〝いや、『慶花』は、ここぞと言うときにしか使わぬ。なにかを伝えるときに用いる花じゃ〟

自害した友則が述べた意味ありげな言葉。『慶花』とは他でもない、紅風鈴と名付けられた友木藩の朝顔のことだ。この朝顔が献上された折、慶喜が自分の一字を与えている。友木藩のお留花だったが、友則が死を迎えた座敷の床の間には、このお留花が活けられていた。

友則は、慶喜こそが青丹一族の真実の頭目だと告げたのか。また当の慶喜に、他言しない見返りとして御家存続を訴えたのか。

真偽のほどはわからない。

が、友木藩の存続が認められたのは事実だった。

（もしや勝先生も、慶喜様が島津斉彬様や家茂様の毒殺を命じたと考えておられるのだろうか？）

心に浮かんだ考えを慌てて打ち消した。

「不審死を遂げた三人のうち、島津斉彬様と孝明天皇は、みまかられても慶喜様に利はありません。特に孝明天皇の場合は、強い後押しを受けておられました。喪うことによって、慶喜様はむしろ損害を被ったように思えます」

将馬なりに不安を打ち消そうとしていた。ともすれば慶喜に対して、黒い疑惑が湧きあがりかける。それを無理に遠くへ追いやろうとしていた。

「島津斉彬様は、薩摩藩主だった」

ぽつりと勝が言った。

「しかも、だれもが認める名君よ。反幕府派ではなかったが、家臣の中にはそういう考えを持つ輩もいただろう。夢見たかもしれねえ。斉彬様を担ぎあげて、鹿児島幕府を打ち立てようとな」

重い言葉は、将馬の不安を増幅させる。

「ですが、孝明天皇の場合は……」

「二人目でやめたのかもしれねえ」

勝が遮る。

「で、青丹一族を操っていた真実の黒幕は、青丹一族を始末しようとした。そうはさせじと向こうは反撃に出る。京を発つ前の行きがけの駄賃とばかりに、孝明天皇に一服盛った。知ってるだろ。あのとき孝明天皇は、疱瘡を患っていた。幸いにも恢復に向かい、やれひと安心と側近が思ったときに急死よ」

「……」

今度は将馬が沈黙する。慶喜様と名を出すのは、勝も流石に気がひけたのかもしれない。真実の黒幕と言っていた。

孝明天皇の死には、将馬も青丹一族の関与を強く感じていた。雇い主から一転、敵となった慶喜を助けていた孝明天皇に毒を盛る。朝廷の庇護を失えば、慶喜に大きな打撃を与えられると考えたのであれば筋が通るのではないか。

「ま、証のねえ話だ。あくまでも、ここだけの話ってやつよ」

勝は立ちあがって、隣室の襖を開けた。中を見てみろと仕草で示されたため、将馬は隣室に足を踏み入れる。床がのべられていたが、枕の片側には刀、反対側には脇差が刃を上に向けた形で並べられていた。

「おれは水戸家ってのが、どうも苦手なんだが」
勝が言った。
「あの家では、幼い頃から眠るときに、ああやって躾けたらしいのさ」
嫌悪感を隠せない顔で、のべられた夜具を指した。
「寝相を矯正するためのやり方らしいがね。持っていなかったんで刀と脇差で代用したが、剃刀を枕の両側に立てたとか」
「眠った後も、ずっと置いておいたのですか」
思わず出た言葉に、
「お。流石はおれの愛弟子だ。いいところを衝いて来るねえ」
勝はおどけて、続けた。
「眠った後に取り除いたようだが、慶喜様はそれを看過していたふしがある。いつぞや、得意げにお話しなされたのさ。どうせ脅しに違いない。眠れば、だれかが剃刀を取り除いてくれる。脅しの裏を見抜いていたわけだ。非常に聡明な方だが、はたして、いいのか悪いのか」
刀と脇差を鞘に戻して、勝はまた座り直した。今の説明をするために、わざわざ床をのべさせたのだろうか。真意はわからないが、将馬も勝の前に座る。

「慶喜様は、水戸藩主・徳川斉昭様と、有栖川宮家から嫁いで来られたご正室・登美宮吉子様のお子だ」

独り言のような呟きが出た。

「ゆえに、慶喜様は朝廷との繋がりが深い」

将馬は自分なりの考えを告げる。

「まあ、お母上が宮家の出というのは、大きな影響があるだろうさ。孝明天皇の絶大な庇護を受けられたのは、お生まれの良さのお陰だけではないが、天皇の覚えがめでたいとなりゃ、十五代将軍に相応しいとなるだろうぜ」

「それにご実家の水戸家は、副将軍ですから」

「は。聞こえはいいが副将軍なんぞ、いてもいなくても同じさ。案件を決める場合、たとえ斉昭様が反対しても執行不可能ということはねえ。どんな場合もご老中の統一見解の方が優先される」

「斉昭様は常日頃から、それを不満に思っておられた」

ふたたび自分なりの考えを言葉にした。

「うむ。斉昭様はあきらかに出来の良い倅、これは慶喜様のことだが、倅が将軍になる可能性が大きいことを読み取って、慶喜様の一橋入りを承知したんだろう。御三

家の子供の場合、世継ぎが徳川姓を称する他は、すべて松平姓を名乗るじゃねえか。このあたりの違いも雲の上のかたがたにとっては、大きな問題なんだろうぜ」

「一説によると、安政の大獄は水戸の斉昭様一党に対する謀叛容疑であった由。斉昭様は外様の大藩や浪士と結び、朝廷を利用して徳川宗家の転覆を謀った、とされているようですが」

本当のところはどうなのか。目を向けた将馬に、勝は肩をすくめた。

「さあてね。おれのような下っ端には、わからねえことさ。ただ安政の大獄によって、政はいっそう混迷状態に陥った。それは間違いねえやな」

「その混迷状態を一挙に解決する策が、『勅許』ですか」

将馬が投げた問いに、勝はにこっと笑った。打てば響くように応える愛弟子に喜びを覚えたのかもしれない。我が意を得たり、という感じの笑みに見えた。

「天皇の許可を取って、さまざまな意見を吹き飛ばすってのが勅許の正しい意味よ。これのせいでよけいややこしくなっちまった。不謹慎を承知で言うがね。天皇なんぞを媒介にせず、だれが今この国を支配する力を持っているか。武家の間で赤裸々に争われたら、わかりやすかったと思うぜ」

「ですが」

将馬の反論を、勝は片手をあげて止める。
「わかってら。戦国時代に逆戻りよ。おれだって日本人同士が、血で血を洗うような戦をするのは反対だ。しかし、異人とは一戦やる必要があるかもしれねえ」
腕組みしながら不吉な言葉を吐いた。
「そういえば英吉利や仏蘭西の軍艦が、摂海に姿を見せたと聞きました。勝先生は彼の者たちを相手に戦えというお考えですか」
将馬はじりっと膝でにじり寄る。外国艦隊と今戦えば、我が国が負けるのは火を見るよりもあきらか。聞き捨てならない話だと思った。
「そういう戦もあるってことさ」
勝は「まあまあ」というように仕草で宥める。
「外国艦隊との応接は、将軍のいる大坂で行い、交渉が決裂したときには大坂で一戦よ。間違いなく我が国は負ける。それを天下の民に知らしめるのさ。異人相手に戦えば勝算のないことを悟らせて、国内の真の奮発を引き起こすってのはどうだい」
「……」
将馬は唖然とした。ぽかんと口を開けてしまった。言わんとすることはわかるが、あまりにも大胆すぎるというか。とうてい考えつかない話であるため、すぐには受け

入れられなかった。

「戦に敗けて、政に勝利する」

勝は淡々と言った。

「敗けて勝つってことよ。敗戦も取るべき政の一手段じゃねえか。要は戦でも政でも、主導権を幕府が執り続けられるかどうかにかかっている。戦を避けるためには、日本の石高の四分の一を持つ幕府を主軸にして今は政を執るしかない。むろん諸藩と力を合わせねえことには、かなわない相談だがね」

酒で喉を潤して、続ける。

「そのうえでだ。平田学を主体にした考えを民に持ってもらい、政に参加してもらう。これがおれの考えよ」

平田学は、平田古道学とも呼ばれている学問だ。

〝真実の神道とは神国日本の国体を知り、神のなす道に習い学んで、正しい道を歩むことであり、それが日本人として最も大切なことである〟

というようなことを説いたが、勝の話を聞いて、将馬は思い至った。

「やはり、『志士の寺子屋』を広めたのは先生だったんですね。本所南割下水の旗本屋敷で、ちらりとお姿をお見かけして以来、もしやと思っていました」

「広めたんじゃねえよ、自然に広まったのさ。それにやり始めたのは、おれじゃねえ。ある旗本に話をしたところ、賛同してくれたってことよ」

照れているのか、早口になっていた。

「さて、と」

勝に廊下の様子を確かめるよう目顔で促された。将馬は立ちあがって廊下を見る。揚屋に移るのだろう、新選組一行が階段に向かっているのを確認した。気づいた建に会釈で自分は残る旨を告げる。

最後のひとりが降りて行くのを見届けた後、

「大丈夫です」

将馬は障子を閉めて、勝の前に戻った。

二

「土佐の後藤象二郎が、ご老中の板倉様に大政奉還の建白書を提出した」

勝が囁いた。

「え」

将馬はすぐには信じられない。

後藤象二郎は土佐藩士である。坂本龍馬を評価して、脱藩罪を解くよう藩に働きかけ、龍馬を海援隊の隊長に任じていた。土佐藩の藩政に深く関わっている人物であるのは言うまでもない。

「まことですか」

「板倉様から直接聞いた話だ。偽りではあるめえさ。長崎から兵庫に向かう船中で龍馬が考えたとか。簡単に言やぁ、大政奉還論とその後の政策案みてえなもんよ。それを後藤が幕府に提出した。薩摩も同意してるらしいな」

のちに船中八策として知られる坂本龍馬の大政奉還論は、『天下の政権を朝廷に奉還せしめ、政令宜しく朝廷より出づべき事』で始まっている。横井小楠の『国是七条』の思想が色濃く反映されているとされた。

「上様は、いかようなお考えをお持ちなのですか」

冷や汗が滲むのを、将馬は感じている。朝廷から委任された形を取っている幕府の政権を返上する意思が、慶喜にはあるのだろうか。

「諾否はわからねえが、十万石以上の在京各藩重臣を、二条城に招集する由。相談しねえことには、決められねえからな。招ぶしかねえよ」

「先生はどうお考えなのですか」
「前にも言ったと思うが、おれは龍馬と同じ考えよ。幸いにもあいつは、新たな政権に慶喜様を加える考えだ」
勝は、膳に載っていた冷めた茶で喉を潤した。酒を飲んでも酔えないと思ったに違いない。将馬は酒を飲んだが、まったく味がしなかった。
「上様にとっては、万やむなき『一歩後退』かもしれねえがな。これをどうやって『二歩前進』にするか。それが次の一手で決まる」
「それにしても……土佐藩は思いきった策に出ましたね」
将馬の脳裏には、龍馬の顔が浮かんでいた。できるだけ血を流さず、さらに一日も早く身内同士の争いを終わらせる。それこそが、英吉利や仏蘭西といった列強に対抗する手段であるのを、龍馬はだれよりも知っていた。
「坂本様は、討つ幕府、討幕ではなく、倒す幕府、倒幕という考えなのでしょうか。慶喜様を新政権に加えるとまで言ったことには驚きを禁じえません」
「おまえさんに言ったっけな。あいつは寺田屋の騒ぎの折、そら、あれだ。今は女房になったお龍が、役人の捕縛を知らせて辛くも逃げた騒ぎよ。あのとき薩長同盟に関する重要な文書を、伏見奉行所に差し押さえられちまったようでな」

「幕府に弱みをつかまれたがため、討幕派から倒幕派になったと？」

すかさず訊いた。弱みをつかまれたから従うというのは、将馬が知る龍馬ではなかった。いや、そうあってほしいという願いにも似た気持ちがある。

「違うだろう。相手が考えを変えれば、今までのことは水に流して、それからの付き合いを改める。そういうやつなのさ。同志と思っていた盟友の武市半平太を、土佐藩は切腹させたため、龍馬は脱藩した」

武市半平太は、土佐勤王党の盟主を務めた男だ。勤王派への風当たりが強くなったとき、半平太や勤王党の有力者の多数が獄舎に入牢させられた。吉田東洋暗殺を否定したまま、獄内で切腹を命じられている。

坂本家と武市家は親戚筋にあたっていた。

「まあ、龍馬が脱藩した理由は、武市殿のことだけじゃねえだろうが、後藤象二郎と意気投合した後は、つまらねえ私怨は捨てたんだろうぜ。土佐藩の上士とも表面上は折り合っているようだ。上様のことにしても、大政奉還を受け入れるのであれば、新政府に加わるのがよかろうと思ったんだろう。だが」

いったん言葉を切り、さもまずそうに茶を啜った。

「龍馬は数か月前までは、薩長土の三藩と連合艦隊を作って幕府と戦う腹づもりだっ

たらしいがね。それはやめとけ、日本中が戦火の渦に巻きこまれちまうと言ったのさ。それではと、あいつは次の行動に出た」

と勝は将馬に目をあてる。

「日本海軍を作る、民の心をつかみ政権を手に入れる、最新式の武器を買い求める、などなど、倒幕を成功させる鍵はいくつかあるが、もっとも重要な事柄はなんだと思うね」

あらたまって訊いた。将馬をためすような含みがあった。人、物とくれば、次にくるのは、そう、金だ。

「通貨発行権ですか」

将馬は答えた。

「そのとおり」

我が意を得たりとばかりに、勝は自分の膝を叩いた。

「おまえさんは、若さに似合わぬ冷静な目を持っている。そのうえ頭が切れる。ひとつ訊きてえんだが、福井藩の前藩主・松平春嶽（まつだいらしゅんがく）様の側近、三岡八郎（みつおかはちろう）（由利公正（ゆりきみまさ））を知っているかい」

「知りません」

「ふむ。流石に三岡八郎にまでは目が行かなかったか。三岡は福井藩の経済学者でな。藩の立て直しを任されたんだが、いい助言をするんだ、これが。通貨発行権の問題、つまりは、これを持ったまま徳川家が存在していれば、今以上に強力な影響力を持ちかねない。それをさせないためには……」

「お待ちください」

将馬は思わず遮っていた。

「先生は幕臣ではありませんか。それなのに」

「まあ、聞け。新政府が『金札』を発行すれば、通貨発行権を徳川家から奪い取れる。そうすれば朝廷の資金を確保できるって寸法よ。おれにこれを教えてくれたのが三岡でな。おれは龍馬に、三岡に会えと言っておいた」

「……」

返事に窮して黙りこんだ。勝は、いったい、なにが言いたいのか。真意をはかりかねていた。表情を読んだに違いない。

「おれは自分の役目を心得ているつもりだ」

静かに言った。

「お偉いさんと話をするとき、直接、話すのは非礼とされているからよ。御取次役(おとりつぎやく)っ

てのがいるだろう。おれはあれさ。国と国との取次役みてえなもんだ。外国とはもちろんだが、諸藩との取次役も兼ねている。褒美は命を奪われることってのが、ちょいと気に入らねえがな」

不敵な笑いを滲ませる。独特の言いまわしに勝らしさが表れていた。が、笑い返すことはできなかった。

「わたしにも、その国と国との取次役を引き受けろという仰せですか」

声同様、おそらく表情も硬くなっているだろう。〈はなさかや〉が、美鈴が、遠離るのを感じていた。もう江戸の借家には戻れないのか。花木の世話をする楽しみと永遠に別れなければならないのか……。

「いや」

勝は即座に頭を振る。

「おまえさんは、自分が信じる道を進めばいい。佐倉将馬の人生を決めるのは、他のだれでもない、おまえさん自身だからな」

返された言葉に、つい口もとがほころんだ。

「なんだい、今の笑いは」

「いえ、少し意味合いは違うかもしれませんが、似たような言葉を言われたことがあ

ります。それを思い出しました」

頭に浮かんだのは、かつて美鈴に告げられた言葉だった。

〝おまえさまを止めているのは他のだれでもない、おまえさま自身ではありませんか〟

想いが顔に表れたのか、

「田村のお姫さんかい」

揶揄するように勝が言った。美鈴のことを勝は『田村のお姫さん』と呼ぶ。

「はい」

「これも前に言ったと思うが、おれはあのお姫さんが苦手でな。いや、水戸家が苦手ってのとは違う話だけどよ。しれっとした顔で『勝先生の女狂いは病気ですね』なんて言いやがる。このやろうと思うんだが、本当のことだけになにも言い返せねえ。それが悔しくってな」

「女子がいなければ、われらはこの苦難を乗り越えられません」

将馬は勝の目を見て告げた。わずか一日新選組と行動をともにしただけで、その生き地獄を間近に感じた。人を殺めた後すぐに、近藤は次の御用改めを口にした。人殺しがもはや特別なことではなくなっている。日常になってしまっている。

それが心底おそろしかった。

「そうかい」

勝は、なんとも言えない顔をした。

「わかりすぎるってのも考えもんかもしれねえや。鈍いぐれえの方が、生きやすい時代かもしれねえなあ。龍馬がそうだ。妙に鈍いところがある。京をうろつくのがどれだけ危ないか、まったく理解していやしねえ」

「京にいるのですか」

将馬はできるだけ名を口にしないようにする。二人だけとはいえ、油断できなかった。

「うむ」

勝は小さく頷き返した。

「まだ知っているやつはいねえだろうが、京にいるという知らせを受け取った。まあ、姿は見せねえだろうがな。自分の命に無頓着なのは困りもんだぜ」

「過日の頼み事ですが」

声をひそめずにいられない。

〝龍馬を京から遁がせ〟

なる依頼を江戸を発つ前に勝は告げた。しかし、当の龍馬が姿を見せないとなれば、遁走劇自体、無理な話である。

「先生は本気なのですか」

「あたりめえじゃねえか、今、あいつにいなくなられたら困るだろ。他に信頼できるやつはいねえ。おまえさんならと見込んだってわけさ」

「なれど……承知するとは思えません。行きたいときに行きたいところへ行く。それが才谷梅太郎様ですから」

わざと偽名で呼び、さらに言った。

「先生もそうではありませんか」

「確かにな。だがよ、おれは本気だ。今、京をうろつくのはよくない。会う機会があれば説得してくれねえか。そして、遁げるのを助けてやっちゃくれねえかい」

「才谷様が承知なされば、〈はなさかや〉はすぐに動きます。先生から話をいただいた後、考えたのですが、京から富山の方へ抜け、そこから船で上海へ渡るというのはどうでしょうか。しばらく日本から離れていた方がいいのではないかと思いまして」

「なるほど、上海か」

得心したように勝は何度も頷いている。
「いい考えだ。さすがは佐倉将馬よ。船はおれが手配するから、まかせておけ」
先んじて申し出てくれた。将馬たちには船の手配まではできないことを、勝はよくわかっている。
「お願いします」
「それから、おまえさんたちには、土佐藩の新田藩に潜りこんでもらうかもしれねえ。青丹一族を匿っている懸念がなきにしもあらずだ。さらに天下の大商人、三井家もこの新田藩に頻々と出入りしている由。商人抜きには成り立たねえのが、戦だからな」
「青丹一族は同役たちも捜しておりますが、慣れぬ土地ゆえ、思うようにはいかぬやもしれませぬ。以前、潜入した友木藩に藩主の愛妾がおりました。偽名かもしれませんが、名は比呂。他にも台所の下女が怪しかったように思います。二人の人相書も根岸様に頼んでおいたのですが……」
「そうそう、忘れるとこだったぜ」
勝は遮って、懐から人相書を取り出した。
「取り急ぎ三枚ずつ描かせた。友木藩の騒ぎが起こるやいなや、二人とも姿を消した

とか。そのことから見ても青丹一族であるように思うがな。女は化けるから、見つけるのはむずかしいかもしれねえ」

ふたたび将馬を見る。

「新選組も忙しくなるぜ。なんと言っても大政奉還だ。話が広まれば幕臣や旗本が黙っちゃいねえ。二条城は大騒ぎになるだろうよ」

勝の言葉には、どこか愉しげな感じがある。

（もしかしたら話を広めるのに、先生も一役買うつもりではないのだろうか）

将馬は、ふとそんなことを思っていた。

三

大政奉還の話は、またたく間に京を駆け巡った。

新選組は市中見廻りだけでなく、二条城の護衛役も賜り、見廻組の配下とともに交代で任務に就いている。将馬と建も仲間たちと加わっていた。

二条城は慶長年間（一六〇〇年代初め）に、徳川家康の京都宿館として建造された城だ。石垣が組まれた櫓や門には、銃眼の出窓が設けられている。周囲にはぐるり

と堀がめぐらされており、中へ入るには大手門や裏の御門に架かる木の橋を使うしかない。そのため、護衛の多くは門周辺に集まっていた。

「上様にお目通り願いたい」

「せめて、ご老中様にお目にかかれぬか」

「大政奉還など考えられぬわ」

今朝も夜が明けきらぬうちから、京在住の旗本が、ひっきりなしに押しかけて来る。警護の任に就いて以来、同じやりとりの繰り返しだった。

「お目通りはかないませぬ。後日、通達がまわるはずでございますゆえ、それをお待ちになるのが宜しかろうと存じます」

将馬は虚しい言い訳を返すしかない。中へ入れろ、いや無理でございます、と、あちこちで騒ぎが起きていた。中には握り飯持参で大手門の前に陣取る者もいた。

「それがしは腹を切って、上様に訴える」

ひとりの男が、刀と脇差を外して座りこむ。袴をさげ、着物の前をぐっと広げた。もはや珍しくもない光景に、将馬はなかば呆れている。

「さようか」

屈みこんで男と目を合わせた。

「では、それがしの盟友が介錯いたしまする」

心得たもの、

「承知した」

建が男の傍らに立って告げる。

「ご案じめさるるな。それがしは柳生新陰流、神道無念流において免許皆伝の腕前でござる。さらにここ数日は切腹騒ぎが続き、介錯の要領も得ました。腹に脇差の切っ先がふれた時点で首が飛びますゆえ、苦痛を感じる暇もござりませぬ」

「さよう。亡骸はすみやかにご遺族へお届けいたします。ただ二条城門前を不浄の血で穢したとなれば、御家断絶は免れませぬ。それどころか、おてまえの一族郎党に死罪を申しつけられるは必至。ご妻女やご嫡男、親戚ご一同も覚悟はできておられまするな」

将馬は脅しをこめて継いだ。昨日まではすぐに狼狽えて、逃げるように立ち去ったのだが、

「う、うむ」

男は唇を真一文字に引き結んでいる。他の旗本や浪人は、さがって様子を見ていた。男の周囲にだけ不自然な空間ができている。

もうひと押しと思い、将馬は友を見あげた。

「し損じるでないぞ」

「つまらぬことを言うでない。一昨日の失態を思い出してしもうたではないか。最後の最後で決心が鈍ったのであろう。動いてしまい、斬りそこねた。あれはおれの腕が悪いからではないわ。相手が臆病風に吹かれたせいよ。彼の者は今も血が止まらずに、うんうん唸っておるとか」

「医者は今日が峠と言うていた。死に損なっても処罰はくだる。不謹慎このうえないと、彼の者はむろんのこと、一族郎党、斬首よ」

世間話のように語らっている。

「今日はし損じてなるものか。さて、そろそろ宜しいか」

建は芝居気たっぷりに応じた。わざとらしく音をたてながら鯉口を切る。ぎらりと光る刃を男の首にあてた。

「お覚悟のほどやいかに」

「う」

男は、喉仏をひくつかせる。顔面蒼白だったが、陳情の一群もまた青ざめていた。大きく目をみひらいて、成り行きを見守っている。

「参る」
建が身構えた瞬間、
「ま、待て、お、お待ちくだされ」
男が白旗をあげた。
「慥かに二条城の御門前を血で穢すのは、不届き千万。それがし、今一度、妻子や親戚と相談してみることにいたしまする」
素早く着物の前を合わせて袴を整える。刀と脇差を手に取るや、俯いたまま陳情団の中に紛れこみ、あとも見ずに走り去った。
「他にはおられぬか」
建が大声で言い、陳情団を見まわした。
「御家断絶志願のお方がおられれば、手を貸しまするぞ。遠慮のう申し出てくだされ。おてまえ、いかがでござるか」
まだ鞘に収めていない刀の切っ先をひとりに向ける。
「いや、それがしは」
「では、そちらの御仁はいかがか」
「それがしは、ちと用事を思い出しまして」

刀の切っ先を向ける度、ひとり、二人と散って行った。あまりにも多い陳情団に疲れ果てた将馬は、昨日からこの苦肉の策を取ることにしたのである。もし、どうしてもという豪の者が現れた場合は、大手門近くの詰所に連れて行く段取りになっていた。

「これで今朝は終わりそうだな」

将馬の言葉を、建は渋面で受ける。

「夕方にはまたひと騒ぎよ。いや、午頃やもしれぬな」

散って行った者たちが、ふたたび離れた場所に集まり始めていた。それを新選組が追いやっている。将馬と目が合ったひとりが、こちらに来た。

「あざやかなお手並みに感服仕りました」

島田魁が言った。年は四十前後、美濃国大垣藩の脱藩浪士は、巨漢の怪力と剣術の腕を買われて、三十六歳で新選組に入隊した。梅花皮の柄巻きを使っていた隊士のひとりが島田だった。

局長や副長、さらに組長たちは、市中見廻りで忙しいのかもしれない。今日は島田が新選組の指揮を執っていた。

「今日はあざやかとは、いかぬようです」

将馬は、目顔で離れた場所に固まった陳情団を指した。それでも新選組の隊服の威力だろうか。山同心に追いやられたときよりも遠くに行っていた。少なくとも門前に近づいて来るのは控えている。

「陳情団は、われらが引き受けた。おそらく本日も雄藩の藩主がおいであそばされよう。そちらの護衛役は、おまかせしたい」

島田の申し出に、将馬は頷き返した。

「承りました」

「それから青丹一族のことだが、沖田さんと一番隊の何人かが、三人の女の人相書を手に捜しまわっている。京にいれば網に引っかかるのではあるまいか。捜す相手が女子ゆえ、隊士たちは妙な気合いが入っているようだ」

と島田は苦笑いする。上田糸江、友木藩主の愛妾だった比呂、藩邸の台所の下女。三人の女の人相書は、伏見の仲間や新選組に渡していた。

「女子で思い出しました。つかぬことを伺いますが」

将馬は声をひそめて問いかけた。

「紅葉の簪を挿した芸妓に、心当たりはありませんか」

「なに？」

島田は眉を寄せ、しばし無言で将馬を見つめた。険しい表情に見えたが、真意までは読めない。口にすべきではなかったと思い、すぐに撤回する。

「つまらないことを訊ねました。忘れてください」

「かまわんさ。いや、佐倉さんは堅物に見えたんでな。まさかその口から女子の話が出るとは思わなかったゆえ、驚いた次第よ」

笑って、続けた。

「紅葉の簪の芸妓とは、『まねきの簪』を挿した芸妓のことではないのか」

「ご存じなのですか」

「ご存じのような、そうではないようなという感じだな。毎年十一月三十日から、京の南座で歌舞伎の顔見世が始まるではないか。そのとき『まねき』と呼ばれる看板が、南座の正面に掲げられる」

「知っています。その顔見世を各花街の舞妓や芸妓が、花街ごとに日を決めて観覧に行くとか。総見と呼ぶそうですね」

「さよう。桟敷に勢揃いした綺麗どころはだな。『まねき』の看板を模した小さな簪を挿す趣向よ。歌舞伎役者や贔屓筋をまわって、この小さな簪の看板にひと言したためてもらうとも聞いた。その芸妓は、ついでに贔屓客から貰うた紅葉を挿したのやも

しれぬと思うてな」

「なるほど」

しかし、と、将馬は件の幻を思い出している。髪に挿していた簪は、紅葉を模した品に思えた。あるいは贔屓筋から『まねき』の看板代わりに貰ったものかもしれない。さながら『まねきの簪』だろうか。

「それにしても、佐倉さんも隅に置けぬな。噂では伏見に美しいご妻女がいると聞いた。見目麗しきご妻女を差し置いてとは」

からかうような言葉に、激しく頭を振る。

「違います。かような話では……」

「これでござるよ」

建が幽霊の仕草で割りこんだ。

「どういうわけか我が友は、視るたちのようでござってな。不動堂村の屯所に、伊呂波紅葉があるではござらぬか」

「伊呂波紅葉」

島田は、考えるように遠くを見た。素人には紅葉の名などわかるはずがない。建は苦笑いした。

「どれがどれやら、それがしもわかりませぬ。とにかく、紅葉のそばに件の芸妓が現れた由。視たかと訊かれましたが、それがしに視えるわけもなし。そのときの芸妓が、紅葉を模した簪を挿していたというのが、話を口にした理由でござるよ」
「建。もうよい」
「将馬は堅物も堅物、煮ても焼いても食えませぬゆえ、妻以外の女子にちょっかいを出すなどということは、ござりませぬ」
「そろそろ持ち場に戻りましょうか」
将馬は空咳をして、話を締めくくる。
「紅葉の幽霊か。楽しみができたな」
島田は笑いながら持ち場に戻って行った。夜がしらじらと明け始めていたが、太陽は雲間からわずかに覗くのみ。晴天とはいかないようだった。山同心は大手門の外で待ち受け、見廻組は門内に控えている。

四

「松平土佐守様、ご到着でござる」

先触れの知らせが響きわたる。

松平土佐守とは、土佐藩政に復権した山内豊信（容堂）のことだ。安政の大獄の折、豊範に藩主の座を譲ったが、さまざまな騒ぎが頻発したため執政せざるをえなくなったのだろう。四賢侯のひとりと謳われる豊信が、ふたたび土佐藩の舵取り役を担うようになっていた。

「土佐守様がご到着だ」

離れた場所にいる陳情団がざわめいた。

「今日がその日か」

「いや、通達は受けておらぬ」

押しとどめる新選組隊士の間を、ひとりがするりとすり抜けた。山同心の警護隊に駆け寄って来る。これ以上近づいてはならぬとばかりに、将馬は前へ出た。

「土佐守様は昨日もおいでになられたではないか。いかような話なのじゃ」

と男に訊かれても、答えられるわけがなかった。

「お帰りください。徒党を組むのはご法度。ご退去できぬとなれば、こちらも覚悟がございます」

後ろに同役たちを随えて、将馬はじりっと歩を進める。男を新選組のところまで追

いやってから、急ぎ持ち場に戻った。豊信の駕籠が近づいて来ている。いつものように十数人の藩士に守られていた。

将馬は護衛の藩士に一礼して、建と一緒に駕籠の近くに付いた。緊張せずにいられない。油断なく周囲に目を走らせている。

（土佐守様は、慶喜様の専横ぶりを批判しながらも、幕府存続を支持しておられる。それを快く思わぬ浪士は多いだろう）

豊信は、穏健派といえるのではないだろうか。土佐藩成立の折、藩祖・山内一豊は関ヶ原の戦功により、掛川六万石の城主から三倍以上も加増されて土佐に入封している。その恩顧を忘れぬよう、山内家では代々語り継いできた。

また分家出身だった豊信が藩主に就任する際、前藩主は末期養子を取る暇もなく急死したのだが、当時の老中・阿部正弘の温情で襲封を許されたという経緯がある。それゆえ倒幕派や討幕派に与するのを躊躇い、どちらかと言えば中立派の色合いが濃くなっていた。

（追い詰められた上様は、土佐守様を頼りにせざるをえまい）

心の中で思いつつ、大手門の中に入る駕籠を見送っていた。中で待つ見廻組に引き渡したときには、思わず安堵の吐息が出る。ほとんど同時に建も吐息をついていた。

顔を見合わせて苦笑いする。

「帰るときが、また大騒ぎか」

友は新選組に目を向けた。陳情団は強引に追い払ったのか、いちおう姿を消している。仲間の山同心たちが、ひとり、二人と集まって来た。雲間に覗いた太陽は隠れてしまい、灰色の雲が空を覆っている。曇り空が憂鬱な気持ちを誘うのかもしれない。

「われらはどうなるのか」

不安げなひとりの言葉を、他の同役が継いだ。

「幕府が朝廷に政権を返上したら御役御免よ」

「よろずやをやるしかないかもしれん」

仲間たちの口から出るのは、暗い話ばかりだった。吹きつける風の冷たさに、江戸への思慕がいやでもつのる。しかし、江戸に戻ったとき、はたして今までどおりに奉公できるのだろうか。

「大政奉還も気になるが、わしは異人の艦隊も恐ろしい。摂海に集結して、攻撃を仕掛けると聞いた。京は近いからな。攻め入られたら、どうなることか」

ひとりの目は真っ直ぐ将馬に向いていた。視線を追った仲間たちの目も集まる。早

朝であるため、まだ上役の根岸佐平次は姿を見せていない。あるいは他の組と早朝会議をしているのかもしれなかった。

（まさか『敗けて勝つ』などとは言えぬな）

勝の話をそのまま口にするわけにはいかない。

「単なる噂ではあるまいか。欧米の列強艦隊が、攻めて来るとなれば一大事よ。噂だけでも大騒ぎだ。慌てふためくその隙を衝いて、幕府転覆をはかるつもりかもしれぬ。慥かな話であれば、われらにも通達がなされるはず。そうなったときに考えればよい」

「異国で一番強いのはどこじゃ」

別のひとりが訊いた。

「英吉利だろう。彼の国と戦になった場合は陸の戦いではない。海の戦いよ。ゆえに日本海軍が必要だと、勝先生は仰せになられた」

「なぜ、日本海軍が必要だと？　大砲で応戦すれば済む話ではないのか？」

建が口を挟んだ。真面目な顔をしていた。

「たとえば英吉利相手に戦うことになった場合、今も言うたように海での戦いになる。英吉利は清国などに置いてある海軍の根拠地に戻って、補給と船の補修を行わねばな

らない。兵士の食料や燃料、さらに壊れた船を直さなければならぬからな。ここまではわかるか」

将馬は仲間を見まわした。

「わかる」

代表するように建が答えた。

「よし。英吉利に勝つためにはだ。補給や補修を行うための拠点を攻撃しなければならない。そうしなければ、英吉利の船はまた攻撃に来る。ゆえに印度や清国の拠点を破壊できるだけの力を持った海軍が必要になる、というわけだ」

「ははあ、なるほど。食料や燃料を補充できないようにするのか。そうしておいたうえで、英吉利艦隊に大砲の弾を浴びせかける。たとえ船を沈められなくても、もはや修理は不可能。英吉利本国まで帰るのも無理となって、哀れ英吉利兵は捕虜に」

建が得心したように頷いた。

「いかにも建の言うとおりよ」

「では、大政奉還の方はどうじゃ。われらは主を失い、職を失うはめになるのか」

友は話を大政奉還に戻した。護衛を務めるどころではない。みな浮き足立っていた。

これこそ薩長土肥の思う壺だと思ったが、将馬はむろん口にしなかった。

「これはわたしの考えだが」
　前置きして、続ける。
「今までは徳川家だけで行われていた政に、これからは有力諸藩が加わることになるやもしれぬ。合議制に改めた新政府に、徳川家は一大名として参加する。幕府という『名』を失っても、新政府の盟主として、よいか、ここが大事だ。新政府の頭目と言った方がわかりやすいかもしれぬな。頭目として生き残れば、政権という『実』を手放さずに済む」
　話し終えた後、一瞬静まり返る。慌て気味に将馬は言い添えた。
「上様が大政奉還に応じぬ場合、薩長はそれを討幕の理由に掲げるは必至。攻め入って来るだろうな」
「よくわからん」
　首をひねりながら答えたひとりに、別の同役が続いた。
「薩長が攻めて来るってとこだけはわかったが」
「つまり、今までと変わらないってことか？」
　最後の声は、同役の理解の限界を告げるものだった。
「いや、その」

言葉に詰まった将馬を、建が継いだ。

「ここで四の五の言うても始まらぬ。今は目の前の御役目をこなせ、ということよ。時々刻々変わるゆえ、臨機応変に動くのが肝要。お、根岸様じゃ」

最後のひと言で、いっせいに散る。素早くそれぞれの持ち場に戻っていた。佐平次が大手門の潜り戸から出て来た。せっかちな気質を示すように、せかせかした足取りでこちらに来る。

五

「御役目ご苦労さまです」

一礼した将馬に、建たちも倣った。

「うむ」

佐平次は同役たちをちらりと見たが、叱りつけるような真似はしなかった。動揺が鎮まらないのは、上役も同じなのかもしれない。

「伏見から連絡はありましたか」

将馬は気になることを問いかけた。

「連絡が来た。青丹一族の行方を探っているが、難儀しておる様子。手がかりはまったくつかめぬとの知らせが来た。京に入ったのは間違いないと思うのだがな。いったい、どこに雲隠れしたのやら。霞のように消えてしもうたわ」

「わたしは京にいるのではないかと思います。幕府と反幕府派、さらに欧米の列強が勢揃いしている場所でございますゆえ」

「騒ぎの起きるところに青丹一族あり、か」

上役は皮肉っぽく唇をゆがめた。

「わしも狙われておるやもしれぬな。狙われるのは大物の証とでも考えるか。もうひとつ、佐倉に頼まれていた話じゃ。原市之進様を殺めた者の供述書が出て来たらしゅうてな。わしのもとにまわって来た」

一枚の紙切れを、将馬に渡した。建や同役たちも覗きこんでいる。

「原市之進は上様に悪行を吹き込む奸臣ゆえ、始末した」

読みあげて目をあげた。

「急に出て来たのですか」

つい問いかけていた。悪行を吹き込む奸臣の部分が、繰り返し、ひびいている。ざわざわと胸が騒いだ。いやな感じがした。当初は供述らしいものは得られていないと

いうような話ではなかったか。

「以前からあったのやもしれぬが、わしのもとに来たのは昨日じゃ。板倉様にお伺いしたところ、引き続き調べるという話であったが」

無理だろうというように頭を振る。懐刀を殺された慶喜の命によるものなのか。とうの昔に下手人は斬首刑を執行されていた。

「これは」

将馬は紙片に目を向け続けている。相変わらず不吉な胸騒ぎがおさまらない。独り言のように呟いた。

「本当に下手人の供述なのでしょうか。だれかが意図的にこれを作成したとは、考えられませんか」

意味を理解しかねたのだろう、

「意図的にとは、いかような意味じゃ」

佐平次が訊いた。あらためて問いかけられると答えようがない。わけのわからない不安が、胸の中で広がるばかり。佐平次の顔を見つめるしかなかった。

「うまく言えませぬ。説明しがたい不安なのですが……ただ死人に口なしと申しますか。原様にすべての罪を押しつけて、素知らぬ顔を決めこむ不届き者が、いるのでは

ないかと思いまして」

不届き者とはだれだ。

あのお方ではないのか？

決して口にしてはいけない話なのでは……。

「今の話には応えられぬが、佐倉と話したいという方が詰所でお待ちじゃ。来い」

佐平次に言われて、従った。上役は小さな橋を渡り、大手門の潜り戸から二条城の中へ入る。真っ直ぐ詰所に足を向けた。青々とした松が、数多く植えられている。ここを建てた神君家康公の好みなのか。あるいは二代将軍・秀忠公だろうか。どの松も濃やかに手入れされていた。

「来たか」

詰所で待っていたのは、見廻組与頭（くみがしら）の佐々木只三郎（ささきたださぶろう）だった。年は三十なかば、会津藩の出身であり、会津藩の重臣を兄に持つ只三郎は、眼光鋭い寡黙（かもく）な男である。警護に加わるとき、将馬はすでに紹介されていた。

十畳程度の土間と、二十畳ほどの座敷を持つ詰所には、只三郎以外いなかった。座敷の上がり框に腰かけている。ふだんは休憩場所として幕臣や隊士の出入りが多い場所なのだが、人払いしたのかもしれない。今はひっそり閑（かん）としていた。

（いよいよ上様の毒味役として、おそばに侍れとの仰せか）

内心穏やかではなかったが、顔には出さないようにする。慶喜の身代わりとして、すでに二人の毒味役が命を落としていた。若い将馬をあらたな毒味役に任命するのは、ごく自然な流れといえる。

神妙に次の言葉を待っていた。

「切腹騒ぎを何度もうまく収めたとか。御門前を血で穢す不埒な輩が出ぬのは重畳よ。さらに新選組とも折り合っている様子。そちと森山を遣わしたのは、正しい判断だったやもしれぬな」

只三郎は抑揚のない声で告げた。いかにも幕府の能吏という感じがする。人を斬るときも表情ひとつ変えないのではないだろうか。

「は」

将馬は短く応えた。お褒めに与りまして恐悦至極だの、ありがたき幸せだのといった言葉を望んでいないように思ったからである。

「佐倉」

声をあげた佐平次を、只三郎は素早く手で止めた。

「お気遣いは無用でござる。佐倉のように、よけいなことを言わず、淡々と実務をこ

なす士が、近頃は少なくなり申した。よい配下をお持ちでござるな」
「は。目代様の秘蔵っ子にござりますれば」
「なるほど。手塩にかけた子ゆえ、簡単には手放されぬか」
只三郎は深読みしたようだった。
「いや、先んじて言ったわけではござらぬ」
佐平次も倣うように応える。深読みの応酬となってしまい、だれからともなく笑みが浮かんだ。
「それだけ優れた人材がおらぬという証でござるな」
只三郎が苦笑を滲ませた。
「新選組と相容れるようになった理由もまたそれでござる。身内の恥をさらすようでござるが、見廻組は融通の利かぬ者ばかり。定められた範囲しか守ろうとはしませぬ。それを越えた者を追いかけず、まんまと逃げられた場面を目の当たりにしたときは、怒るのを通り越して、呆れるばかりでござったよ」
親しげな口調になっていた。存外、人見知りする男なのかもしれない。
「その点、新選組は」
と続けた。

「奉行所がもうけた規制など、どこ吹く風。怪しい者を見つけたときには、地の果てまでも追う気魄を見せる。ときにやりすぎることもござるがな。いつ戦が火を噴くかわからぬ状況ゆえ、やむなしと思うておる次第」

刀槍の遣い手は、同じような遣い手に心惹かれるのかもしれない。新選組にかなり好意をいだいているように思えた。

「さて」

只三郎は、あらたまった様子になる。

「実は薩摩藩に怪しい動きがあるのを摑んだ。大久保利通が朝廷の岩倉具視と結び、天皇から『討幕の密勅』を受けようと画策している由。長州も一枚かんでいるのはあきらか。いかがしたものかと、板倉様は頭を痛めておられるようじゃ」

「薩長の裏を掻くためには、大政奉還を朝廷に上表するのが宜しかろうと存じます」

即座に告げた。

「よもや上様が大政奉還を上表するとは、考えてはおりますまい。意表を衝くのが戦に勝つ策ではないかと思います。まずは薩長の動きを封じるのが先決です」

「佐倉」

二度目の佐平次の呼びかけを、これまた只三郎が制した。

「促されてもいないのに云々というご懸念は無用でござる。今の答えこそが、知りたかったもの。『討幕の密勅』に土佐藩は関与しておらぬと思うが、話を得るには土佐新田藩に潜りこむのが重畳であろう」

ちらりと目をあげた。勝からも青丹一族の件で潜りこんでもらうかもしれないと言われている。どうやら土佐新田藩には怪しい動きがあるようだ。

「森山と一緒に、潜りこんでくれぬか。危険きわまりない潜入であるのは言うまでもなきことよ。正体を知られたときには……」

「承りました」

遮るように言った。もとより京に来るのを決めた時点で覚悟はできている。

「頼もしいことよ。ついでにもうひとつ。佐倉は海軍操練所にいた由。坂本龍馬の顔を知っておろう」

一瞬答えるのを躊躇ったが、

「は」

短く告げた。

「それは重畳。坂本のあらたな人相書を作るゆえ、手を貸せ」

「畏まりました」

本意ではない。が、幕臣である以上、断る術はなかった。

「坂本は、京に来ているのでござるか」

佐平次が問いかけた。

「さあてな。こまめに文を出す男のようなのだが、すべてが本人の文と言えるかどうか。われらを攪乱するために、昨日は薩摩、今日は長崎と、己の名でだれかに文を送らせていることも考えられる」

「数日前にも新選組が、『坂本あらわる』の話に右往左往したと聞きました。なれど中にはまことの話もござりましょう。常に気を抜かぬのが肝要ではないかと存じます」

佐平次が生真面目に応じる。山同心が属する江戸護衛隊と新選組、そして、見廻組は密に連絡を取り合っているようだった。特に新選組と見廻組は、只三郎の話どおり、ここにきて互いに歩み寄る姿勢を見せている。雄藩の動きを抑えるため、志士の動きを封じこめるために、なりふりかまわぬ様相を呈していた。

「佐倉、近いうちに稽古をしようではないか」

佐々木が傍らに置いてあった刀を軽く持ちあげる。

「是非、お願いいたしたく思います」

「柳生新陰流と神道無念流だったか。『練兵館の竜虎』は、舞うような美しい技を見せるとか。楽しみなことよ」

不意に只三郎は言葉を切る。その目は閉められた戸に向いていた。ほどなく盟友の声がひびいた。

「失礼いたします」

「入れ」

佐平次の答えを受け、建が入って来る。只三郎を見て畏まろうとしたが、

「気遣いは無用。なにかあったのか」

素早く促された。

「は。今し方、新選組の一番隊から知らせが来たとか。人相書の三人のうち、友木藩の藩主の愛妾であったお比呂と申す者に、よく似た女子を見つけたとのことでございます」

「まことか」

佐平次の声が大きくなる。

「青丹一族か」

只三郎が刀と脇差を差して、立ちあがった。

「わしも同道しよう。まずはその女を捕らえて塒を吐かせる。上様のお命を二度も狙うた極悪人どもを、一網打尽にしてくれるわ」

拷問も辞さない覚悟が滲んでいる。

将馬の脳裏には、羅の小袖を纏った比呂の、艶めかしい姿が浮かんでいた。

六

比呂に似た女が奉公していたのは……。

島原に見世を持つ扇屋だった。

「〈三升屋〉とはまた面白い見世に奉公しているものよ」

将馬は呟いた。〈三升屋〉の向かいの料理屋に、御用の筋と称して仮陣屋をもうけている。先日、島原を訪れたときには気づかなかったが、屋号からして江戸の一石橋近くに見世を持つ〈三升屋〉と無関係ではあるまい。

「存じよりの見世なのか」

組長の沖田が小声で訊ねる。建の他、新選組の隊士が三人、あとは佐々木が加わっていた。佐平次は二条城で山同心の指揮を執っているため、同席していない。

「おそらく江戸に見世を持つ〈三升屋〉の本店ではないかと思います。定かではありませんが、大商人・三井家と姻戚関係にあるとも聞きました」

将馬は簡単に説明する。

出会いはよろずやの縁に思えたが、実は目代が気にかけていた見世。偶然を装う形で将馬と美鈴は隠居の八兵衛に会っている。その後、潜りこんだ友木藩に、なぜかその八兵衛が姿を見せた。

「あとで伺いました話によると、一石橋近くの見世にも、頻々と反幕府派が訪れていたとか。長州の桂小五郎（木戸孝允）、薩摩の浪士・相楽総三でしたか。彼の者たちが来たのは、この目で見ました」

訪れていたのが龍馬だったら、こんなにすらすらと話すだろうか。自問しながらの話になっていた。

「つまり、反幕府派の見世ということだな」

沖田は向かいの見世にもう一度、視線を戻した。頬の肉が削げ落ちた横顔は、近寄りがたいほどの厳しさに覆われている。将馬が煎じた薬のお陰だろうか。頬にうっすらと赤みが差していた。

「あるいは、お比呂の正体を知らずに雇い入れたか」

将馬は念のために別の可能性を示唆する。繋がりを考えた方が自然だが、必ずしもそうとは言い切れないのではないか。荒っぽい御用改めを行うよりは、今少し様子を見た方がいいのではないか。

（捕らえて拷問した挙げ句、違う女子だったでは話にならぬ）

婉曲に穏便策を提示したつもりだった。

それを察したに違いない。

「二人に今一度、確かめたいのだが、間違いなくお比呂と申す女子か」

沖田が肩越しに将馬と建を見やる。

「似ていると思いました」

「九分九厘、間違いないと存じます」

盟友は断定した。

「艶やかな白い肌を持つ美貌の女子でござりましてな。われらが会うたときは、夏でござりましたゆえ、透けるような薄い布地の小袖を羽織っておりました。それがなんとも言えず、男心をそそるというか。あ、いや、それはそれとして、あの見世でも比呂の名で奉公している由。名も同じとなれば、間違えようがござらぬ。われらをなめているのか、自信があるのか。普通は別の名を使うように思いますが」

なかなかの洞察力を見せる。
「おぬしの言うとおりよ」
将馬は継いで、続ける。
「なにゆえ、江戸で奉公していたときと同じ名を使うのか。罠のように思えなくもない。いかような罠かはわからぬが、相手は毒薬使いの一味。不動堂村の屯所に、毒を投げ入れられれば万事休すでござりますゆえ」
「なるほど。いつでも毒を使えるゆえ、余裕たっぷりというわけか」
沖田は、ふたたび向かいの見世に視線を戻した。佐々木はひと言も発することなく、座敷の片隅に座している。愛刀を抱きかかえるようにして目を閉じているさまが、なんとなく不気味だった。
「もう一度、確かめて来る」
腰を浮かせた建の袖を、将馬は摑んだ。
「よせ。何度も行くと怪しまれるぞ。逃げるやもしれぬ」
「逃げたお比呂の後を尾行ければ、青丹一族の塒がわかるのではないか」
建に切り返される。
「おれが追い出し役、顔を知られていない隊士が尾行役。大仰に御用改めをするより

も、いいのではないかと思うがな」

「一族の隠れ家には直行しないだろう。お比呂とて馬鹿ではない。いいように振りまわされるだけやもしれぬ」

将馬は躊躇していた。新選組の拷問は、凄まじいと聞いた憶えがある。口を割ったところで最後は殺すのだが、楽には死なせないという恐怖譚が流布していた。相手は女子、もし拷問が行われるとしたら……考えるだけで背筋が寒くなっていた。

「参ろうか」

不意に佐々木が言った。ゆらりと立ちあがる。

「御用改めを行うのが得策。佐倉の話では、〈三升屋〉は三井家と繋がりがあるやもしれぬとか。もしかすると反幕府派の文書なども、あるやもしれぬ。ついでに家捜しするのがよかろう」

逆らえるはずがない。

「よし、行くぞ」

沖田の号令で、みな立ちあがった。

「佐倉さんと森山さんは裏木戸を固めてください。それ以外の者は、わたしと一緒に表から入る」

「わしは佐倉たちと動く」
佐々木の申し出に、将馬は内心ぞっとした。自分を疑っているのではないか。反幕府派の者と通じているのではないかと、佐々木は思っているのではないだろうか。
（あるいは一緒にいれば、坂本様が連絡を取って来るかもしれぬと考えているのか）
心同様、足も重かった。ここに入るときは脱いでいた隊服を、致し方なく着ようとしたとき、佐々木に止められた。
「裏木戸を固めるまでは着るな」
ちらりと沖田を見る。
「頃合いを見計らって、動け」
「承知した」
沖田は頷き、隊服を着ける。一番隊の特徴なのか、隊士たちは無駄な言葉をいっさい発しなかった。将馬は隊服を裏返して抱えこみ、建とともに佐々木の後に続いた。
外は夕闇に染まっている。
見世に入るときは少なかった人波も増えていた。素見客（ひやかしきゃく）や登楼客（とうろうきゃく）が笑いさざめきながら、行き交っている。着物や帯、羽織との組み合わせや、裾まわしの色合いにも、

江戸とは違う京らしさのようなもの、なにげない洒落心と品位が感じられた。

通り過ぎる三味線弾きの音に送られるようにして、将馬たちは〈三升屋〉の裏木戸に歩いて行った。すでに下見は終えている。建と目顔で頷き合い、新選組の隊服を纏った。

「その隊服は若いやつにしか似合わん」

佐々木の言葉に、建が唇をゆがめる。

「今のお言葉は、将馬には似合わないという皮肉でございますか。それとも佐々木様の目には、年相応に見えているのでござろうか」

「二人とも二十一と聞いた」

佐々木は答えた。つまらないことを訊くと言いたげだった。佐々木にとっては調書がすべてなのであり、老けて見えるとか、年より若く見えるといった事柄はどうでもいいことであるに違いない。

「はあ」

返事に窮して、友は将馬に苦笑いを向ける。今ひとつ佐々木という人物をつかみかねているようだった。将馬よりはずっと打ち解けやすく、潜入先にもすぐに融け込む建にしては、珍しいことかもしれない。幕府の能吏を具現化したような佐々木が、今、

集中しているのは比呂の捕縛のみ。懐手して、両手が冷えないように温めている。

「始まったな」

佐々木がぼそっと言った。玄関の方で大声が響いている。廊下に面した見世の裏手は、庭になっているのだが、にわかに奉公人の動きが慌ただしくなっていた。三人とも夜目が利くため、座敷から洩れる行灯の明かりだけでも様子を見て取れる。ひとりの女が庭に降りて、裏木戸に来るのが見えた。

（お比呂だ）

言葉はかわさない。目顔で三人は位置に付いた。

裏木戸を開けた瞬間、

「お比呂さん、だったな」

将馬は呼びかけた。

「え？」

比呂は意外にも明るい笑顔を浮かべた。

「すみません。どなた様でしたっけ？」

目を細めるようにして将馬を見つめる。逃げようとしたことだけでも怪しいが、声も間違いない、友木藩の藩主の愛妾だった。もっとも愛妾のときとは言動や着物、髪

型や化粧などが違っている。年は将馬たちと同じ二十一のはずだが、江戸のときより落ち着いた感じに見えた。とはいえ、人目を引くほどの白い肌と美しさに変わりはない。

愛想笑いは消えて強い警戒心が表れているように思えた。建と佐々木は表通りに通じる小径を塞ぐ位置に立っている。

「佐倉将馬だ、お比呂さん。と名乗ってもわからぬやもしれぬがな。わたしは江戸の友木藩の屋敷に、奉公したことがある」

「え」

比呂は驚いたように目をみひらいたが、

「まさか京で友木藩の話を聞くとは思いませんでした。その羽織、もしや、新選組だったんですか」

開き直ったとしか思えない言葉を返した。

「詳しい話はあとにしよう。番屋まで同道してもらおうか」

「いやです、と言っても駄目なんでしょうね」

観念したように微笑する。

名前を変えなかった女の真意はどこにあるのか。そもそも比呂は本当に青丹一族な

のだろうか。

（青丹一族ではなかったとしても……そうだと言わされるのやもしれぬ）

情け容赦ない地獄の責め苦が、待っているのだけは確かだった。

第四章　あだたぬ男

一

慶応三年（一八六七）十月十四日。

十五代将軍慶喜は、大政奉還を朝廷に上表した。

二百数十年にわたって日本を統治してきた徳川家は、表向きには支配権を失ったかのように見える。しかし、なんといっても幕府統治の歴史は長い。慶喜は武家支配全体の危機であるから、力を合わせてこれを乗り越えようと訴えた。

「欧米列強と交渉を持つためには、政治機構を大幅に変える必要が出るかもしれないが、徳川宗家が主導権を取って、雄藩の協力を求めて実行すれば、なんの問題もないことである」

これが慶喜の基本的な考えといえた。

五日後。

将馬はひさかたぶりに、伏見の借家に戻っていた。戻って来たのは日付が変わった頃だったので、美鈴には逢っていない。すでに寝んでいた同役たちを起こさぬよう、気遣いながら建と眠りについた。

（四郎さん）

不意にだれかの〈声〉が聴こえた。耳に聞こえる声ではなく、頭に直接ひびいたような感じがした。それでも将馬は目を開けられない。京に着いて以来、休む暇なく動いている。疲れきっていた。

（だれだ？　お比呂か？）

心の中で応えている。新選組に捕らえられた比呂は、不動堂村の屯所に連れて行かれた。すぐさま拷問しようとした隊士たちを、まずは話を聞いてからにしようと将馬は懸命に説得。比呂との質疑応答に至った。

「わたしは、そのなんとかという一族なんか知りません。友木藩は改易と聞いたもんですから、これはまずいと思って逃げたんです。一石橋近くの扇屋〈三升屋〉さんに

知り合いがいたので、京の見世を紹介してもらいました」

しばらく江戸を離れたかったから、というのが理由のひとつである。さらにもうひとつ意外な理由を口にした。

「わたしには許嫁がいました。でも、色々事情があって離ればなれになってしまったんです。人づてに今その男は京にいると聞きました。捜しているんです、その男を。京は危ないとわかっていましたけど逢いたくて」

どこにいても危ないのは同じ、戦に巻き込まれて明日、死ぬかもしれない。生きているうちに、せめて逢いたい。だから京に来た。

「捜してくれませんか、よろずやの〈はなさかや〉さん。人捜しも仕事のひとつなんでしょう。たいしたことはできませんけど、見つけてくれたら御礼をします」

許嫁だった男を見つけられれば、比呂の話の証をたてられる。困惑気味に顔を見合わせる将馬や隊士たちに、比呂は懇願した。

「炊事でも洗濯でも、なんでもやります。証をたてられるまで逃げないと約束します。お願いですから拷問だけは堪忍してください」

さしもの新選組も女子が相手では手を出しあぐねたのか。台所仕事まではまかせなかったが、比呂を屯所の牢屋に入れて、様子を見ることになっていた。むろん引き続

き詮議は行うことになっている。

（もしや、わたしがいない間に拷問されたのか）

自問のようなそれに、

（起きてくださいな、四郎さん）

ふたたび〈声〉がひびいた。今度は頬に吐息のような空気もとらえていた。だれかに腕を摑まれて、起きあがらざるをえない状態になる。それでもまだ目を開けられない。眠くて、眠くて、瞼が持ちあがらなかった。

（庭へ）

その〈声〉に導かれるように、将馬は立ちあがる。庭に面した障子を開け、雨戸を少しだけ開けた。裸足で庭に降りたとたん、ひやりとした冷たさに目をみひらいていた。

「おぉ」

思わず小さな声が出る。美しく色づいた黄金色の紅葉に、いやでも目を引きつけられていた。見事なほどにすべて黄金色に染まっている。心を射ぬくような色だった。

（四郎さん）

突然、黄金色の紅葉の陰から舞妓姿の娘が現れた。綺麗に結いあげた髪には、見た

ことのある珍しい簪を挿している。

まねきの紅葉の簪だった。

「そなたは……あの芸妓に関わりのある者か？」

将馬が問いかけると同時に、舞妓姿の娘は消えていた。呆気にとられて周囲を見る。とそのとき、庭の隅に美鈴が立っているのに気づいた。

「また招ばれたのですか」

寒いのだろう、美鈴は薄手の綿入れを羽織っていたが、それでも小刻みに震えている。

「中に入ろう。ここは冷える」

「みなが起きてしまいます。わたしの部屋に行きましょう」

美鈴はくるりと踵を返した。細長い家の脇に犬走りのような道がある。そこを通って玄関に行き、家の中へ戻った。二人とも寝間着姿であるため、冷たい風が身に沁みた。美鈴が使っている座敷は、ふんわりとした温もりに包まれている。

「将平には『寝むときは消してください』と叱られるのですが、京は寒くて、なかなか火鉢の火を落とせません。まだ十月なかばだというのに、この寒さはなんでしょう。やはり、江戸とは違いますね」

「無理をしなくてもよい。寒いときには、火鉢や湯湯婆を使えばよいではないか」

傍らにのべてあった布団には、なるべく目をやらないようにした。美鈴は火鉢に載せてあった鉄瓶を取って、湯飲みに湯を注ぐ。白い湯気が幸せな温かさを運んで来たように見えた。

「お茶だと目が冴えてしまいますから。この鉄瓶は近くの古道具屋で買い求めたのですが、水の味がとてもまろやかになるのです。京の水はやわらかくて美味しいですが、さらに深みが増すように思えます。水を入れておくだけでも味が変わるのですよ。良い買い物をしました」

差し出された湯飲みを受け取り、将馬は白湯を口に含む。たかが白湯だが、確かに舌ざわりがやわらかかった。京に着いたとたん、凄惨な場面を目の当たりにした身にとっては、なによりのご馳走かもしれない。

「あたたまるな」

掌に湯飲みを載せ、舌だけではなく、掌でもその温もりを味わっていた。ともすれば暗くなりがちな気持ちを、美鈴が救いあげてくれる。特別な言葉をかわすわけではない。が、この他愛のない会話や時が、今の将馬には宝物だった。

「わたしは『四郎さん』という名で呼ばれて、無理やり目覚めさせられたのだが、庭

に降り立った瞬間、あまりの冷たさに目を開けた次第よ。なぜ、そなたは庭に？」

あらためて訊いた。家の中でも夫婦として振る舞うよう、美鈴に口うるさく言われている。仲間たちと一緒のときは他人行儀な口調になりがちだが、二人のときは親しげな言動を取るよう心がけていた。

「なにか、そう、だれかの気配を感じたように思いました。庭の紅葉が頭に浮かびましたので、様子を見に行ったところ、おまえさまがいたのですよ」

「夜中に外へ出るのは危ない」

すかさず言った。

「われらの正体に気づいた反幕府派が、家のまわりをうろついているやもしれぬ。昼間はむろんだが、夜は絶対にひとりで動いてはならぬ」

「ありがたいお説教、心に留め置きます。花咲爺は小言爺でもあるのですね」

それで、と、美鈴は話を変える。

「紅葉のそばにいたのは、艶っぽい芸妓なのですか」

将馬の呟きを聞き留めたに違いない。かすかに眉が吊りあがっているように見えた。これが妻の嫉妬なら嬉しいのだが、しょせんは偽りの夫婦。

「いや、視たのは舞妓だ。はじめは新選組が捕らえたお比呂やもしれぬと思うたのだ

がな。どうやら違うていたようだ」

淡々と答えた。

「つい先日、新選組の屯所でも、芸妓の幻を視たのだ。建といたときなのだが夜ではない、昼間だった」

「そして、今宵は舞妓の幻ですか。『暮れ果つる秋の形見にしばし見む』でしたっけ？」

最後まで続けられない歌を、将馬が完成させてやる。

「『暮れ果つる秋の形見にしばし見む紅葉ちらすな木枯らしの風』か。西行法師の歌が、京の木枯らしにはしっくりくるな」

「そうですね。それで二人の女子の幻ですけれど」

「うむ。不思議なことに二人とも、紅葉の簪を挿していた。南座の興行の折、『まねきの看板』が掲げられるとか。それを模した『まねきの看板の簪』を舞妓や芸妓は挿して、贔屓筋をまわる由」

「聞いたことがあります。歌舞伎役者や贔屓筋にひと言、記してもらったりするそうですね。幻の女子たちは、看板の代わりに紅葉を挿したのでしょうか」

「そうではないかと思うが……今宵、視て『やはり』と思うたのだが、紅葉を模した

簪のようにも見えた。『まねきの簪』であろうか。売っているのであろうか」

「わたしに訊かれてもわかりませんよ」

つんと美鈴は横を向く。すねたようなそれが可愛くて、将馬は微笑(ほほえ)んでいた。

「今の笑いは、なんですか」

突っ込まれてしまい、慌てて頭を振る。

「なんでもない。お比呂のことだが、なにかわかったか」

話を変えた。比呂から聞いた内容は使いに文を託して送っていた。青丹一族ではないという証をたてるには、許嫁だった男を捜すのが得策。もっとも男が現れたからと言って、比呂が青丹一族ではないということにはならないだろう。一族のだれかが許嫁のふりをすることも考えられる。

疑いは残るが、ひとつひとつ消していくしかなかった。

「そのことですが」

美鈴は座敷の隅にあった風呂敷包みを持って来る。中を開くと、五十枚ほどの引札(ちらし)が現れた。一枚を渡される。

「『許嫁だった助三郎(すけさぶろう)という男を捜しています、年は二十五で呉服問屋に奉公していた。在所は武州。捜している娘の名は比呂、年は二十一』か」

不満げな呟きに聞こえたのかもしれない。

「仕方ありませんよ、それしかわからないんですから。許嫁の人相書があれば、一緒に配りますけどね。罪人ではないうえ、金や手間がかかるため、人相書までは作れないと文に書いてあったじゃありませんか」

猛然と美鈴が反論した。

「声が大きい」

窘(たしな)めて、続ける。

「江戸の呉服問屋に奉公していたらしいゆえ、今、確かめさせている。お比呂の話では、江戸を発つ前に確かめたところ、すでに辞めてしもうていたとか」

「江戸に問い合わせて返事を待つとなれば、ひと月以上かかってしまうかもしれません。なんだか怪しいですね」

美鈴は眉をひそめた。

「時間稼ぎをしているように思えます。自分に目を向けさせておくのが、お比呂の役目かもしれませんよ。その間に青丹一族は着々と仕事を進める」

勝であれば膝を叩いて同意したかもしれない。

「ありうることよ」

それができない将馬は小さく頷き返した。

「なれど拷問された挙げ句、命を落とすやもしれぬ。かような真似をしてまで、一族のために働くだろうか」

「頭目の娘、あるいは妹といったような血の繋がりがあるのかもしれません。わたしも江戸の屋敷でちらりと見ましたが、遠目にもその美しさがわかるほどの女子でした。殿方は美人がお好きですからね。危険な女子かもしれないと思ってはいても、すぐには殺さないでしょう。いえ、危険であるからこそ、心惹かれてしまうかもしれません」

かなり鋭いところを衝いているように思えた。確かに比呂を入れた牢屋には、隊士が代わるがわる訪れていた。薄暗い牢屋の中でも、背筋をぴんと伸ばして座ったまま、身じろぎもしない姿にそそられるのか。一日に何度も覗きに行く者もいた。

「騒ぎのもとにならねばよいが」

将馬の呟きを、美鈴が継いだ。

「それこそが青丹一族の謀かもしれませんよ。お比呂という毒女を投じて、騒ぎを起こすのが目的なのかもしれません。あっちの隊士、こっちの隊士と、気があるように見せかけて操る。お比呂はおれの女だ、となって斬り合いが起きる。新選組はただ

でさえ問題の多い組ですから」
「土方副長にひと言、申し入れておく」
「あら、なぜ、近藤局長じゃないんですか」
「女子に甘いように見ゆる」
「副長だって、あっちの女、こっちの女と、派手に遊びまわっているようですよ。おもてになるとも聞きました。色男ですからね。なんでしたら、わたしが一度、新選組の屯所に参りましょうか。女子は女子同士、お比呂もうちとけて話してくれるかも……」
「ならぬ」
将馬はぴしゃりと言った。新選組の屯所に美鈴が来るなど、まさに狼の群に無垢な童女が飛びこむようなものではないか。じろじろと無遠慮な目を向ける隊士たちが容易に想像できた。
「お比呂については、今一度、詮議してみよう。あと酒問屋の伝蔵さんだったな。不審な箱を預けて行った件だが、だれか訪ねて来た者はいるか」
「来ておりません。みな気になるようで、開けてみようと……」
美鈴の返事を仕草で止める。問いかけるような眼差しには、廊下に面した障子を指

した。将馬はそろそろと障子のところへ行き、勢いよく開ける。
「お」
建と数人の同役が顔をあげた。将馬は呆れ顔で告げる。
「盗み聞きか、建。それとも覗き見か」
「いや、そろそろ朝餉(あさげ)の支度をと思うてな。今朝の当番はおれとおまえゆえ、呼びに来た次第よ」
「かような時刻ではあるまい」
将馬の答えと同時に、玄関の開く音がした。
「根岸様がお着きじゃ」
供を務めた同役の声を聞き、建がにやりと笑った。
「かような時刻のようだな」
佐平次の訪れは、潜入を命じるものだろうか。みな急いで着替え始める。ほんのひとときを美鈴と過ごせたことが、将馬にあらたな力を与えていた。

二

「上様が、大政奉還の上表文を奏上なされたまさにそのとき」
佐平次は言った。
「薩摩藩の島津久光父子と、長州藩の毛利敬親父子に、『討幕の密勅』が天皇から下されたとか」
庭に面した八畳間が、密議の場になっている。朝餉が終わるとすぐに、佐平次を囲むような形で座していた。
「なに？」
建が傍らの刀を摑み、腰を浮かせる。将馬は佐々木只三郎から聞いていたため、特に驚きは覚えない。上役の次の言葉を待っていた。
「落ち着け」
佐平次は言い、居並ぶ山同心を見まわした。
「この勅書は、天皇の直筆ではなく、伝宣役の花押もなかったとされている。おそらく偽勅ではないかというのが、京都守護職・松平容保様のお考えじゃ。幕府派の公卿

から逐一、知らせが入るらしゅうてな。上様のご決断の早さが、奏功した流れになっておる」

「上様は、政権は天皇に返上するのであって、薩長の手に渡すわけではないと、考えておられるのやもしれませぬ。さらに『いずれまた』と考えておられるのではないかと」

将馬は自分なりの意見を述べる。暗雲垂れ込める徳川家、旗本や下士は平静ではいられない。いずれまたと口にすることによって、自分自身をも慰めていた。

「諸藩に告げるとき、騒ぎは起きなかったのでござるか」

建が代表するように訊いた。昔であればこういう話のときは半分寝ていただろうが、今は真剣そのもの。真っ直ぐ佐平次を見つめていた。

「雄藩や諸藩が揃うたのは、上表が提出された前日の、十三日だったとか。あらかじめ政権返上についての諮問書が配られていたため、特に混乱はなかったようじゃ。ご老中の板倉周防守様が、上表文を読みあげて会議は終了した由」

佐平次は顎をあげて、宙を見据えた。

「あっけないものよ」

この場に同席した全員の感想だったかもしれない。佐平次は涙をこらえるように、

目をしばたたかせている。

二百六十余年続いた徳川政権の運命を決する重大会議が、いとも簡単に終わっていた。旗本や浪人による小さな騒ぎは起きていたが、さして大きな騒ぎはないまま、会議の翌日、慶喜は大政奉還の上表文を奏上している。やはり、坂本龍馬や中岡慎太郎、後藤象二郎といった陰の立役者の動きが、ものを言ったのではないだろうか。

「反幕府派は諦めるでしょうか」

美鈴が遠慮がちに口をはさんだ。女子はひとりきりとなれば、いくら気丈でも発言するのは憚られたに違いない。

「さあて、いかがであろうか」

佐平次は答えを将馬に振った。建を含む全員の目がいっせいに集まる。

「諦めぬと思うが……その前に、根岸様」

上役に問いかけの眼差しを向けた。

「わたしの記憶違いでなければ、朝廷に政権を担当する体制はないと思います。上様は大政奉還の提出とともに、将軍辞職願いを出されたと思いますが、それはどうなったのでしょうか」

「保留とされた由。否でも応でもないのは、幕府や諸藩の重臣、さらに朝廷もよく用

いる策よ。流れを見て判断するつもりなのではあるまいか」

「上様は、この事態を予測しておられたのでしょう」

美鈴が継いだ。

「大政奉還後も、雄藩にこの国の指揮を執るのは不可能と読んでおられたがゆえ、いえ、今もそう思うておいでだと思いますから、読んでおられるがゆえに、表向きはおとなしく従ったように見せた。ごねれば反幕府派に、武力討幕の機会を与えてしまいますからね。さて、出鼻をくじかれた反幕府派の次の策はいかに」

美鈴もまた将馬に答えをゆだねた。

「青丹一族の出番かもしれぬ」

冷静な答えに、一同は静まり返る。この場にいるほとんどの者は、青丹一族の後ろにいたと思われる『慶花（よろこびのはな）』には気づいていないだろう。真実を正確に読み取っていると思われるのは将馬と恩師の勝のみ。一族の支配者だった男に裏切られたため、一族は孝明天皇に毒を盛り、反幕府派に付いた……。

「もうひとつ、重大な知らせがある」

佐平次が静寂を破った。

「一両日中に、朝廷は全国の大名に上洛を命じるとか。かような通達が出されること

を、つい先程、板倉様より伺うた」
「では、各勢力が京に集結するわけか」
建の呟きに、同役が続く。
「京はますます危ないな」
「戦か、あるいは血の粛清か」
「血腥い風が吹き荒れるは必定よ」
ふたたび座敷は深い沈黙に覆われた。みな戦は避けたいと思っている。人を殺したいと思うのは、心を病んだ者だけだ。なにか策はないのか。いざとなったら慶喜は戦うつもりなのだろうか。
「土佐藩の新田藩に潜りこむ件だが」
口を開いたのは、またもや佐平次だった。将馬は気になっていた事柄を口にする。
「勉強不足だったのだと思いますが、わたしは土佐の新田藩が、京にまで屋敷を賜っていたとは思いませんでした。確か江戸には、麻布と芝でしたか。上屋敷と抱屋敷を賜っていたように憶えておりますが」
「おれは、土佐に土佐藩の支藩――新田藩があるのも知らなんだわ。土佐にあるのは土佐藩だけだとばかり思うていたがな」

正直な建の言葉に、仲間は同意するように頷いている。二十四万石の大藩に隠れてしまい、その実体を知る者は少ないのではないだろうか。将馬とて内情までは知るに至っていなかった。

「あとで調書を配るゆえ、詳細はそれを見ろ。小藩ゆえ何人も送りこめぬ。新参者は目立つからの。潜入するのは、佐倉と森山の二人とした。他の者は連絡役や見張り役として、佐倉たちを……」

「わたしも参ります」

美鈴が遮るように反論した。

「奥向きの様子を探るのは、女子でなければ務まりませぬ。表の話だけでは新田藩の実体を摑むのは、むずかしいのではありませんか」

抑えた声音には深い想いが隠されているように思えた。土佐藩と聞けば、思い出すのは坂本龍馬。新田藩にまでは出入りしていないだろうが、龍馬が関わる土佐藩に少しでも近づきたい、というような気持ちがあるのではないか。

「此度はご遠慮いただきたく思います」

佐平次はきっぱりと退けた。あらたまった口調になっていた。

「京への同道を許したのが、目代様の精一杯のお気持ち。正直に申しますれば、それ

がしは今すぐ江戸にお帰りいただきたいと思っております。どうしても譲れないと仰せになるのであれば」

江戸に帰らせると、目で告げていた。

食いさがるかと思いきや、

「わかりました。目代様の仰せに従います」

意外にも美鈴は、すんなり引いた。なにか裏があるのではないか。交換条件を提示するのではないか。将馬は不安な思いで、美鈴を見つめている。

「ただし」

案の定と言うべきか。

「新選組が捕らえたお比呂と申す女子に、会いたいと思います。将馬には言いましたが、女子は女子同士、落ち着いた場所で話をすれば、心を開いてくれるかもしれません。向こうは憶えていないと思いますが、わたしは友木藩の藩主の愛妾だったお比呂を知っております。会えるように取り計らってください」

と美鈴は佐平次の目を見据えた。

「いや、それは」

上役は狼狽え気味に、またもや将馬に答えを振る。

「その件につきましては、わたしが同道するのが条件です」
渋々承諾した。本当は反対だったが、土佐新田藩に潜入するよりは、ましだと思ったからである。
「わかりました」
「それからお比呂の方も、美鈴様を憶えているかもしれません。美鈴様が奥御殿の厠に活けた花が、愛妾だったお比呂の目に留まったとか。その話を口にすれば『ああ』と思い至るのではないかと」
上役もいるので、美鈴と呼び捨てにするのは流石に気がひけた。同じように思っているのか、美鈴の方も注意しない。
「よう憶えていますね。今の話をきっかけにすれば、心を近づけられるかもしれません。新選組の屯所に捕らえられているのですから、お比呂は心細いに決まっています。なにか手土産を持って行きましょう」
「物見遊山ではござりませぬぞ」
佐平次が釘をさした。
「新選組の屯所などに出入りしたのが、目代様に知られたときにはどうなることか。それがしは胃が痛くなる思いです」

「言わなければわかりませんよ。ここにいるのは、口の堅い同心ばかりですもの。よけいな心配は無用です」

ねえ、と、美鈴は一同を見まわした。喋らぬようにという通達であるのは言うまでもない。みな苦笑いしつつも頷き返していた。

「先程の佐倉の話に戻るやもしれぬが」

佐平次が言った。

「土佐新田藩が、京に屋敷を構えたのは三年ほど前であるとか。しかも公にはしておらぬ。ゆえに怪しいとなった次第よ。当たっているかどうかはわからぬが、まずは潜りこむのが肝要。佐倉と森山以外の者も、気を抜かず事にあたれ。よいな」

「ははっ」

一同畏まって、密議は終わる。

幕府探索掛の出番となっていた。

三

土佐新田藩は、蔵米一万石と幕府からの支給地三千石を合わせて、一万三千石とい

う珍しい形を持つ藩である。現藩主は山内遠江守豊福だが、今は土佐に帰っており、江戸や京にはいないとのことだった。

公にされていない屋敷は高瀬川沿岸の一角、土佐藩邸の裏手にひっそりと佇んでいる。二条から伏見を結ぶ高瀬川の沿岸は、もとは鴨川の河原だったのだが、船の利便性を求めてまたたく間に市街地が出来あがり、一般の商家にまじって大名屋敷が建てられた。

木屋町通に沿い、二条から南へ長州藩邸、加賀藩邸、対馬藩邸、岩国藩邸、彦根藩邸、そして、土佐藩邸が四条までの間に並んでいる。長州藩邸が反幕府派の巣窟になっているのは、もはや周知の事実といえた。祇園や先斗町などが近く、謀議を行うのに都合のよい土地柄であるうえ、余所者が住みつきやすいことも人が集まった理由だろう。

余所者に対しては冷ややかな対応をする京人も、この区域だけは仕方なく受け入れているのかもしれない。反幕府派ばかりでなく、幕府に与する商人たちも見世を構える場所だった。

新田藩に潜入してから三日後。

（今日は油問屋か）

将馬は、下男として潜りこみ、今は薪割りに従事している。建は下士として潜入していた。入れ替わり立ち替わり訪れる商人のうち、御用商人には特に気をつけるよう、佐平次の調書に記されていた。一昨日が茶問屋と蠟燭問屋、昨日が薬種問屋ときて、今日の御用商人は油問屋という話だった。

（屋敷の広さは、五百坪程度。大名家にしては狭いが、なんといっても本家の裏手だ。なにかと都合がいいのは確かだな。土佐藩邸が危ないとなった場合は、ここに移ればいい）

未明に建と落ち合い、昨日の事柄を互いに報告していた。打ち解けるのが早い盟友は、新田藩の下士たちと近くの居酒屋で早速酒宴を開いたようだ。

〝ここは、ほとんど土佐藩の抱屋敷として使われているとか〟

酒の匂いをぷんぷん撒き散らしながら建は言った。

〝山内遠江守様は屋敷をもうけた折、一度だけおいでになられただけらしいな。遠江様の家臣は、用人と勘定頭ぐらいである由。あとはほとんどが土佐藩士という話であったわ〟

新田藩に名を借りた密議の場所ではないのか。これが建の考えだった。

〝なにか起きたときには、すべて新田藩に押しつけて、土佐藩は知らぬ顔の半兵衛を

決めこむつもりなのであろうさ。姓名まではわからぬが、出入りしているのは土佐藩士ばかりではない。長州藩士も多いようじゃ〟

過激な尊皇攘夷派か、はたまた朝廷の威を借りた討幕派か。まだ詳細はつかめていないが、この屋敷が危険分子の温床であるのは確かかもしれなかった。

「少しは慣れましたか」

呼びかけられて、将馬は顔をあげる。台所の下女・寿美が微笑んでいた。年は四十前後だろうか。お多福の面によく似た顔立ちの女である。

「はい」

将馬は手拭いで額の汗を拭き、立ちあがった。寿美が声を掛けるのが、休憩の合図になっている。盆に載せられていた湯飲みを取った。

「かたじけない」

「いつも白湯で、すみませんねえ。お江戸ではお茶でしょうけれど、こちらは吝ん坊が多いですから」

寿美はやわらかな江戸弁らしきものを使った。どちらかと言えば江戸弁を、京風に味付けした感じに思えた。やんわりしつつも冷たい印象を受けがちな京言葉と違い、親しみのある江戸言葉であるのが、将馬の心をなごませてくれる。

「喉が渇いた身には、白湯もご馳走です」
将馬は答えて、問いかけた。
「お寿美さんは江戸生まれなんですか」
「ええ。ふだんは京言葉なんですけれど、佐倉さんは江戸の方と聞いたものですから、つい使ってしまいます」
江戸から離れてなお懐かしく思うのかもしれない。そういえば、奇妙な箱を預けていった酒問屋の主、伝蔵も京の水に馴染めず、江戸に戻ったと言っていた。江戸、大坂、そして、京。生まれ育った土地の言葉は、なかなか忘れられないもの、いや、忘れたくないものなのかもしれなかった。
「御新造様はいらっしゃらないのですか」
寿美の問いに、すぐさま応えた。
「妻は伏見におります」
そう告げたとき、いつものように少しくすぐったいような気持ちが湧いた。美鈴がうちの人、わたしの夫、おまえさまと言うときもそうだが、慣れることがない。また将馬はどこかでその慣れないところを楽しんでもいた。
「そうですか。お子は？」

「まだです」

「こんなときですものねえ。でも、子供はいいですよ。憎まれ口を叩くときもありますけれどね。寝顔を見ると、もうなにもかも吹き飛ぶんです。幸せな気持ちになるの」

笑うと、ますますお多福に似て見えた。目が糸のように細くなっている。将馬も自然に顔がほころんでくる。

「このお屋敷は商人の出入りが多いように思いますが、お客人をもてなすときも、白湯を出すのが京ふうですか」

将馬はさりげなく探りを入れた。幕府探索掛としては、幸せな気分に浸ってばかりもいられない。

「お客様をもてなすときは、お茶をお出ししますよ。でも、中には白湯で充分だと言う方もいるんです。贅沢だからやめろって。よけいなお世話ですよねえ」

ころころと愉しげに笑った。屋敷の中も外も緊張感にあふれているが、寿美のまわりだけは春の日溜まりのよう。猫を抱いていたら、もっと絵になるのではないか。ともすれば深刻になりがちだが、思いのほか心なごむ奉公になっている。

（いや、この雰囲気がくせものだな）

将馬はなんとか必要な話を引き出そうと努めた。
「このあたりは京の中でも、ひときわ危険なところです。それで妻には伏見にいるよう申しつけました。奉公するのは恐くないですか」
今、訪れている油問屋は、いつから新田藩の御用商人なのか。見世はどこにあるのか。忙しく考えるのだが、うまく話が繋がらなかった。
「わたしは佐倉さんと同じように、住み込みですからね。それに強いお侍様が、たくさん出入りしてますから、いざとなれば守ってくれるでしょう。佐倉さんこそ、御新造様がおひとりでは、案じられるのではないですか」
「いえ」
弟がいる、と、言いかけてやめた。逆に話を引き出されているではないか。寿美にその気はないのかもしれないが、こちらの話は最低限、伝えるだけで充分だ。
「気丈な女子ですから」
真実をまじえて、ごまかした。
「そうそう、京は物の値段が高いと、妻は嘆いておりました。油や蠟燭、薬といった品が江戸よりもだいぶ高いのです。また質のよくない見世が多くて難儀しております。先程おいでになられた油問屋の」

将馬は問いかけの目を向ける。

「ああ、〈大槻屋〉さんですか」

寿美の答えに笑顔を返した。

「はい。御用商人の油問屋〈大槻屋〉さんの評判はどうですか。妻が買い求めた油は、あまり質がよくないようなのです。目が痛くなると嘆いておりました。なにか混ぜているのかもしれません。この屋敷の御用商人ならば、そういうことはないと思いまして」

「祇園の石段下に本店があるんですよ。この近くの見世は支店なんですけれど、扱う品は間違いないと思います。ちょっと高いですけどね」

「そうですか」

蠟燭問屋と薬種問屋の話も訊きたかったが、怪しまれるのは避けたい。外にいる連絡役が、〈大槻屋〉のあとを尾行けてくれるよう祈った。

(あるいは建の方で話を得ているやもしれぬ)

そう思いつつ、薪割りの仕事に戻る。

「言うまでもないことだと思いますが」

台所に戻りかけた寿美が、急に声をひそめて告げた。

「上士のかたがたには、決して逆らわないようにしてください。土佐藩というのは、上士と下士の間に、他藩よりも厳しい規律がもうけられているようです。口答えは厳禁ですよ。はい、はいと従ってくださいね」

「はい」

将馬が笑顔で答えると、

「その調子です」

寿美もつられたように笑った。なにげなく後ろに向けた顔に、かすかな緊張が走ったように見えた。頬が強張っている。

「噂をすればですよ」

仕草で立ちあがれと示した。将馬は首の手拭いを外して、懐に入れる。ほどなく上士と思しきひとりの男が来た。

「座敷に酒を頼む。大至急じゃ」

「畏まりました。すぐにご用意いたします」

寿美は会釈して、台所に戻る。男の目が向く前に、将馬は深々と一礼していた。月代は剃っておらず、薄汚れた着物と袴姿であるうえ、高履だった。一目で土佐出とわかるような姿である。

「初めて見る顔じゃの。新入りか」
男はしげしげと将馬の顔を眺めていた。
「はい。佐倉将馬と申します。三日前からご奉公させていただいております」
「綺麗な江戸弁じゃのう。おまん、江戸から来たのか」
「はい」
将馬は、立ったまま俯いて顔を見ないようにしていた。新入りを怪しむのは当然のことといえる。一昨日、昨日と無遠慮な眼差しや問いを受けていた。
土佐藩の特徴として、藩主山内氏とともに土佐にやって来た山内武士団が中心の上士と、土佐土着の一領具足と呼ばれる農兵の武士団――下士がいる。またこれら上士と下士の中間に位置する階級として、白札と呼ばれる武士がいた。勤王派の首魁として詰め腹を切らされた武市半平太は、この白札である。
「浪人かや」
男は訊いた。
「はい。江戸では雇い入れてくれる藩がございませぬ。京に行けばなんとかなると思い、参りました次第」
答えている間に、もうひとりの足音が近づいて来た。男の仲間であれば、延々と詮

議が続くのは間違いない。江戸から来た浪人をいびるのが楽しいのだろう。仲間から新入りの話を聞き、わざわざ庭をまわって来たように感じられた。

「おまんにちくと訊きたいことが」

男の問いかけに、もうひとりの声が重なる。

「お寿美さーん。酒を頼むぜよ」

「……」

まさか。

憶えのある声に、将馬は激しい驚きを覚えた。それでも男に付け入る隙を与えてはならぬと思い、なかなか顔をあげられない。

「きさま下士の分際で、昼間から酒を飲むとは何事じゃ。それに頼んだのは、わしの方が先ぞ。立場を弁えろ」

男の怒声に、あとから来た下士はその場に畏まる。

「すまんのう。どうぞ、こらえちゃってつかあさいや」

畏まったのは形のみ、口から出た謝罪はいたって軽いものだった。二度目の声で将馬は確信する。

間違いない、あの志士だった。

四

坂本龍馬が笑っていた。

土下座の姿勢のまま顔をあげ、にこにこしていた。弟の将平が時々見せる無邪気な笑顔に少し似ていた。

「きさま。わしを馬鹿にしちょるがや」

上士と思しき男が襟首を摑んだとき、

「お酒のご用意が調いました」

寿美が台所から飛び出して来た。剣呑な空気を察したに違いない。

「あら、坂本様。いかがなされましたか」

わざとらしく龍馬に目をくれる。

名は知っていても顔は知らなかったのだろう、

「な、なに、坂本？」

男は慌てて摑んだ襟首を離した。土佐藩の悪しき慣習を新田藩も引き継いでいるのだろう。上士と下士の仲は良好とは言えなかった。斬られた下士の兄の仇を討ち、切

腹を命じられたりすることも珍しくないお家柄だ。そんな関係を示すような流れだったが……龍馬は相変わらず笑っている。

「すまんですのう。客人が来ましたきに、酒でもてなそうと思うたぜよ」

立ちあがって、袴の汚れを払っていた。

「ああ、そうそう、よけいなことじゃと思うがよ。その姿じゃあ、土佐もんじゃいうことを宣伝して歩きよらね。月代は薩摩ふうに深う剃って、髷は小さく、高履はやめた方がいいぜよ。そうせんと、見廻組や新選組につきまとわれるぜよ」

「そ、そうか」

男は威厳を保つのに必死の様子だった。

「酒は用意できたがや」

寿美に目を向けながらも、龍馬の様子を極端な横目で窺っている。なにか言われるのではないかと、怯えている様子が見て取れた。

「はい。座敷にお運びいたします」

寿美の答えに頷き返して、男は台所に入って行った。とても龍馬の横を通って母屋に戻る気にはなれなかったのかもしれない。勝手口に入り際ちらりと投げた目には、「こいつがあの坂本龍馬か」というような畏怖が表れているように見えた。

「こまい男が多いがや。つまらないことにこだわっているときではないのにのう」
龍馬は猫のように大きく伸びをする。気持ちよさそうに、しばし陽射しを受け止めていた。天に向けられた目が、ようやく将馬に向いた。
「坂本様。かようなところでなにをしておられるのですか」
「おまん、こんなところで、なにしゅうがぜよ」
二人の問いが重なった。将馬は苦笑いだったが、龍馬は愉しげに笑い声をあげる。
「それはこっちの台詞だがよ。あしは土佐藩の下士じゃきに、新田藩に出入りしてもおかしくなかろう。ああ、そうか。おまんはあらたな御役目についたんじゃったか。確か幕府の探索掛……」
素早く龍馬の口を塞いだ。おおらかなのか、警戒心が足りないのか。龍馬はこういう言動が少なくない。将馬は台所から離れた場所に連れて行った。手頃な石に二人揃って腰かける。
「お察しのとおりです」
多くは語らなかった。
「なるほど。土佐新田藩に疑惑ありっちゅうとこかや。うん、当たっちょる。ここは薩長や土佐の不穏分子の巣窟じゃきに」

龍馬はあっさり認める。台所の勝手口から顔を覗かせた寿美に、来るなと手で示していた。あまりにもあっけらかんとした言葉に、将馬はなにも言えなくなっている。

「変わりませんね、坂本様は」

挨拶のような言葉になっていた。

「そうかや」

顔を見合わせて、また笑い合った。この空気がいい、これが好きだ。将馬はしみじみ感じていた。龍馬といるだけで呼吸をするのが楽になる。肩の力がぬけて、ふぅっと心までもがゆるむ。春の陽光が射す大海原に、横たわっているような気分になる。

「坂本様は、いつ、京に入られたのですか」

「入ったり出たりで憶えとらんぜよ。世話になるのは知り合いの材木商のところじゃが、危ないからの。しょっちゅう寝る場所を変えちょるんじゃ」

「では、そこで大政奉還の知らせを」

「聞いた」

答えたとたん、龍馬の目が潤んだ。

「『将軍家、今日の御心中さことと察し奉る。よくも断じ給えるものかな。余は誓って此公の為に一命を捨てん』。そう思って、二条城の方に向かい、頭をさげたぜよ」

流れそうになった涙を片手で拭い、片手で鼻水を拭った。龍馬のこういった喜怒哀楽の激しさをきらう者がいるかもしれない。が、将馬は好ましく思っていた。

大政奉還が成された裏には、龍馬や中岡、さらに後藤象二郎、そして、その後ろには土佐の山内容堂がいた。薩長の裏を掻き、まさに朝廷の『討幕の密勅』が下りんとした寸前、慶喜は大政奉還の奇策に出た。

「『討幕の密勅』に関しては、偽勅との噂もあるとか。次はどうなるでしょうか」

将馬は、自分でも驚くほど率直な問いを投げていた。幕府や薩長ではない、民の明日はどうなるのか。龍馬や勝が相手の場合、素のままでいられた。

「血で血を洗う戦は、しないがよしよ。同じ日本人同士で戦うのは無意味じゃきに。ここからが勝負じゃ。上様は懐刀の原市之進様を失うてしもうたきに、さぞお力落としのことじゃろう。阿呆がおるきに困るがよ」

龍馬の口から原市之進の名が出たのは驚きだった。将馬の脳裏には、佐平次のもとへ急にまわって来た調書が浮かんでいる。

〝原市之進は上様に悪行を吹き込む奸臣ゆえ、成敗した〟

当初は供述らしいものは得られていないという話だったものを、なぜ、突然、調書が出て来たのか。

（死人に口なし、原様にすべての罪を押しつけて、素知らぬ顔を決めこむ不届き者がいるのではないか）

紙片を見たときに思ったことを、ふたたび考えていた。

不届き者とはだれだ。

あのお方ではないのか？

決して口にしてはいけない話なのでは……。

「どげんしたがや、ぼうっとして」

龍馬の声で我に返った。

「すみません。ちょっと考え事を」

「あしも色々と考えちょるが、民も色々考えちょる。ちくと前の話じゃが、土佐では庄屋同盟が作られての」

「どういうものですか」

「藩の役人が、農村の庄屋より町の庄屋を重く扱うようになっちょっての。それに対して農村の庄屋が抗議して秘密の同盟を作ったがよ」

龍馬は簡潔に説明する。

朝廷の正しい臣下は我々であって町の庄屋ではない。武士を否定するわけではない

が、朝廷を尊敬し、朝廷の気持ちに従ってやっていくのが本当の政治ではないのか。

「まあ、そんな話よ。あしの盟友じゃった武市半平太の目的は、朝廷の権威を高め、幕府の力を弱めて、日本を開国以前の状態に戻すっちゅうことじゃった。ちくと考えが遅れちょったが、本人は気づかないもんじゃきに」

武市半平太は、武術や学問だけでなく、日本画といった素養も持つ能吏だった。その才を買われて土佐藩主・山内豊範の護衛にあたるなどして、上士格となり留守居組に列せられた。しかし、前藩主・山内容堂が藩政の実権を持つと事態は一変し、土佐勤王党の首領として投獄されてしまう。吉田東洋暗殺を疑われてのことだったが、半平太は最後までこれを否定したまま切腹した。

「おまん、御所には行ったがや」

龍馬は澄んだ眼差しを向けた。

「いえ、まだです」

「一度行ってみるといいぜよ。そうすれば、天皇さんと民が同じっちゅうのが、ようわかるきに」

「天皇と民が同じ、とは、いかような意味ですか?」

意味がわからなくて問い返した。

が、龍馬は笑顔を返すのみ。
「おまんの噂は聞いとるがよ。あしの弟は頑張っているようじゃきに。その若さで、たいしたもんじゃ」
龍馬の賛辞に頭を振る。
「いえ、なにもできません、できているとは思えません。すべてが中途半端になっているような感じで」
思いもかけず弱音を吐いていた。兄と慕い、龍馬もまた弟と思ってくれるからだろうか。甘えのような感情が湧いていた。
「なにもできないっちゅうことはじゃ、なんでもできるっちゅうことよ。はじめはだれも同じじゃきに」
龍馬がいかにもらしい言葉を吐いた。
「船の操縦と一緒ぜよ。だれかに教えてもらわんことには、やりたくてもできんじゃろうが。おまんは今、学ぶときじゃ。操縦できるようになるまでは、あしにまかせちょきや」
刹那、
「……」

すとんと胸落ちしたのを将馬は感じた。これこそが自分の求めていた答えなのだと思った。他者の言葉であれば、ここまで素直に聞けなかっただろう。しかし、死地をくぐりぬけて来た龍馬の言葉は真っ直ぐ心に届いた。

「今の言葉、胸に刻みこみます」

「むずかしく考えすぎんことじゃ」

龍馬は軽く肩を叩いた。

「まだ二十一じゃなかよ。ようやっとるがや。あしが二十一のときは、寝小便をたれて、洟をたらしちょったがね」

その答えにもまた笑うしかなかった。いつまでも語らっていたい。が、逢えたこの機会をのがすわけにはいかなかった。

「わたしは今、よろずやを営んでいるのですが」

「おう。慎太から聞いちょる。こまいことを言うようじゃが、よろずやも、営んでおるっちゅうことじゃろ」

慎太とは、中岡慎太郎のことだ。また「よろずやも」と敢えて口にした裏には、幕府探索掛の御役目が隠れている。

「はい。実は勝先生から依頼を受けました」

「勝先生かあ」

龍馬は遠い目をした。

「姿をお見かけすることは何度かあるんじゃが、なかなか話ができんがよ。先生も幕府には、あだたぬ男じゃきに苦労が多かろうのう」

「あだたぬ男とは？」

将馬は訊き返した。

「入りきらぬっちゅう意味じゃ。あしは武市半平太によう言われた。龍馬は土佐にはあだたぬ男じゃきに、とな。脱藩したときの話だぜよ。あだたぬ男じゃきに、放っておけと言っていたそうな」

五

「あだたぬ男という言葉は初めて聞きましたが、武市様の話は勝先生から聞いたことがあります」

将馬は勝の言葉を思い出している。武市半平太は龍馬をこう称した。

〝肝胆（かんたん）元より雄大にして、危機自ら湧出（ゆうしゅつ）す。飛潜誰か識（し）る有らん、偏（ひとえ）に龍名に恥じ

ず〟

肝っ玉がとてつもなく大きく、奇才奇略が縦横無尽に湧いて出てくる。いま龍馬が飛んでいるのか潜っているのか、だれが知っていようか。まさしく龍馬という名にふさわしいものだ。

龍馬の才を買っていた半平太は、すでにこの世の人ではない。

「天下の素浪人は出番が多すぎて忙しいがね」

「忙しいのはわかりますが、命を狙われています。勝先生から『龍馬を京から遁がせ』と仰せつかりました。ご承知いただければ〈はなさかや〉が命を懸けて遁がします」

気合いをこめたつもりだったが、

「あしはまた二、三日中に旅に出るがよ」

龍馬に軽くかわされた。

「京からはいなくなるきに、心配することはないぜよ。寂しいかもしれんが、あしはいつでもおまんの裡におる。そして、おまんはあしの裡におる。感じようと思えば、そら、そこにも」

近くの松の木を指さした。

「あの木にも、あの花にも、井戸の水にもあしはおる。身体は死んでも魂は死なんぜよ。おまんの裡で生き続けるぜよ」

「はい」

なぜかわからない、胸が熱くなっていた。じんわり滲んだ涙を、さりげなく指で拭いながら、

「もしや福井にお出かけですか」

さらりと訊いた。

「……」

龍馬は目をみひらいた。

福井行きはすなわち、福井藩の財政家・三岡八郎（由利公正）に指南を受けるためではないのか。新政府が通貨発行権を得てこそ、あらたな政は動き始める。勝の助言を聞き入れたがゆえの行動のように思えた。

龍馬は柔軟な考え方とともに、生まれながらの素直な気質を持っている。だから聞き手も素直になれるのかもしれない。

「勝先生に聞いたがよ」

にやりと笑った。

「はい。先生は、ご自分のことを『国と国の取次役』と仰っていました。褒美は命を奪われることってのが、ちょいと気に入らねえがな、とも」

「はははははは」

いきなり龍馬は笑い始める。

「先生らしい言葉じゃ。まっこと、巨きなお方じゃのう。天下万民のためぞ。一藩一個人の面子がなんなら。つまらん意地を張り合うたりするきに殺し合いにならあ。こまい話にこだわって日本人同士争うのは愚かなことじゃ。上様のご英断を活かさにゃならんきに」

上様で別の話が浮かんだ。

「坂本様は本当に上様を、新政府に加えるお考えなのですか」

「うん。そう思うたきに文を送っておいたぜよ」

「文？」

はて、勝はそんな話をしていただろうか。龍馬から慶喜に文が届けば、勝の耳にも入るはず。耳に入れば将馬に知らせてくれるはずなのだが……記憶を探ってみたが、どうしても思い出せない。

「寺田屋騒ぎのときじゃ」

龍馬はにやにやしていた。

「え」

もしや、と思った。

「では、あのとき役人に押収された文書は、わざと置いて行ったものなのですか。上様が目を通すと考えたがゆえに」

「そういうことじゃ。あしの恋心が届いたのかもしれんぜよ。此度のご英断には、ただただ頭をさげるのみ」

龍馬は立ちあがって、深々と一礼する。

「ん？　二条城はこっちか？」

目だけあげて訊いた。

「あちらです」

笑いながら将馬は指さした。福井に旅立つのであれば、当面、暗殺の懸念はないかもしれない。血腥い騒ぎが日常茶飯事の京よりは安全かもしれなかった。

が、危険な一族がいる。

「坂本様は、青丹一族の噂を聞いていますか」

将馬は言った。

「毒薬使いの一味か」
流石に耳が早かった。
「はい。今年になってから上様は、二度もお命を狙われた由。毒味役が身代わりになったようですが、いまだに居所をつかめません。彼の一族を捕縛せよという密命を受け、われらは京に来たのですが」
「その一族がここに潜んでいるかもしれん、と？」
龍馬の目が光った、ように見えた。
「わかりません。怪しいかもしれぬと言われたため、わたしが送りこまれました」
「あしがここに来たのは、昨日の夜じゃきに。詳しい話はまだ耳に入って来ないぜよ。じゃが、毒薬使いなどという物騒な輩には、ご退散いただくしかなかろうのう」
生真面目に考えているようだった。その毒薬使いの主だったのが、『慶花』かもしれぬと言ったら、龍馬はどう思うだろうか。定かではない今の状態では『慶花』の話までは教えられなかった。
「勝先生になにか言伝はありませんか」
いつまでも話していたいが、屋敷の者たちに怪しまれるのはまずい。そろそろ切り上げようとする。

「お師さんに言伝か」
龍馬はしばし考えた後、
「佐倉将馬をあまり酷使してはならんぜよ。若さに似合わぬすぐれた資質の持ち主ゆえ、大切にせんといかんぜよ、とな。そんなところかのう。ああ、あとこれをおまんに、やっとくがや」
懐から取り出した写真を、将馬に渡した。
「会うたときに渡そうと思うとったんじゃ。あしはいつでも、おまんの側におる」
「ありがとうございます」
「しっかし、不思議な男じゃのう、佐倉将馬は」
ふたたび将馬を見た。
「おまんは、ちくと変わった人間のことを理解しつつ、普通でいられる。己を見失わんがよ。それがおまんの凄いところじゃ」
手放しの称賛に、またもや頭を振る。
「買いかぶりすぎです」
「いや、あしのまわりにもおるがよ。勝先生や西郷どんと付き合うた者の中には、転がりこむ大金を懐に入れたり、虎の威を借る狐になって、威張り散らしたりする者が

おるがよ。おまんは淡々としてるきに、なにかと頼りにされるんじゃ」
「そういえば、見廻組の与頭にも似たようなことを言われました」
「渡辺篤か」
すかさず龍馬が訊いた。
「いえ、佐々木只三郎という与頭です」
偽りを告げるつもりはなかった。真実を話したうえで京から遁がす策を講じる。かなり危険な状態であるのを、あらためて知ってほしかった。
「あしの身辺を嗅ぎ廻っちょるやつがおるんじゃ。名はわからんが、渡辺篤の諜吏ぜよ。あしの顔を知っちょるかもしれん。ちょろちょろと、うるさいからのう。ちと気分転換に福井まで足を延ばすことにしたぜよ」
「出立を早めた方が、いいかもしれません」
「あ、思い出した」
龍馬は不意に呟いた。
「おまん、美鈴殿と所帯を持ったがや。慎太が言うていたがよ。ほほーっと吃驚したがね。おまんと美鈴殿がのう、と」
急に話が飛ぶのは龍馬流か。

「そのことですが、わたしも思い出しました」
将馬は「失礼」と言い置いて、龍馬を殴った。
「痛っ」
大仰に頬を押さえて飛びのいた。が、顔には笑みを浮かべている。美鈴と男女の仲になりながらも、龍馬は小千葉と呼ばれる北辰一刀流の道場主、千葉定吉の女・佐那と夫婦の契りをかわしていた。
情報を得るために美鈴を利用したのではないのか。
くすぶっていた疑いを、一発の殴打で解消したつもりだった。
「すまんきに」
龍馬は言った。
「美鈴殿への言伝じゃ」
「承りました」
「なんもかんも、頑張りすぎなや。さっきも言うたが、あしにまかせちょき。怪我せんようにしいや。今のはおまんへの助言じゃきに」
「慥かに承りました」
「お」

龍馬は台所の方を見やる。急に騒がしくなっていた。
「なんでしょうか」
将馬は立ちあがって、勝手口に足を向ける。ちょうど寿美が飛び出して来たところだった。
「あ」
顔面蒼白だった。
「なにかあったんですか」
「あ、いえ、あの、お酒を飲んだ方々が急に苦しみ始めて、いえ、わたしじゃありません。お酒に毒なんか入れていません、なにも入れていませんから！」
寿美の悲痛な叫びがひびいている。
（狙いは坂本様ではなかったのか？）
将馬は肩越しに龍馬を振り返っていた。

第五章　新しい古（いにしえ）

一

土佐新田藩で起きた毒殺騒動では、酒を飲んだ上士が三人、命を落とした。
坂本龍馬を狙ったのか、はたまた狙われたのは自分たちか。あるいは両方を亡き者にしようとしたのか。
「わたしではありません、お酒に毒など入れていません」
無実を叫ぶ寿美は、京都奉行所の取り調べを受ける結果になっていた。他にも台所の下男たちや、下士を中心にした調べが執り行われた。龍馬はいち早く姿を消していたが、立ち去る間際、
「青丹一族っちゅうのは、まっこと、おそろしい一族じゃ。あしも手がかりを捜して

みるがよ。おまんも気ぃつけや」

と言い残していた。

おそらく龍馬と自分たちを狙ったのではないかと、将馬は考えていた。前夜、土佐新田藩の屋敷に来たと言っていた。つまり、毒を盛った者は、龍馬の顔を知っていたことになる。

（それにしても）

と将馬は思っている。酒樽に毒が投げ入れられたのはあきらか。将馬は毒味をして、それを確かめていた。毒の種類まではわからないが、酒を飲んだ者は全員死んでいる。相当強い毒なのは確かだった。

（標的以外の者が犠牲になってもかまわぬ、ということか）

あらためて青丹一族と真実の支配者の冷酷さを感じていた。将馬と建は懸命に土佐新田藩を探っているのだが、いまだ一族の者を見つけられていない。

月が変わった十一月の早朝。

将馬は御所を訪れている。中に入る許しは得られなかったため、周囲を散策するにとどめていた。

御所の敷地は四方を、今出川通、寺町通、丸太町通、烏丸通に囲まれる形になっ

ている。延々と続く白い築地塀には、六つの門が設けられていた。建春門は向唐破風のついた堂々たる門で、御所の威厳を演出するうえにおいては欠かせない造りかもしれなかった。

嘉永七年（一八五四）四月六日に起きた火事で、敷地内にあった紫宸殿をはじめ殿舎がことごとく焼失していた。安政二年（一八五五）の御所再造営の際、焼失した殿舎が古式に則って再建され、それまでは『日御門』と呼ばれていた門も、建春門という古称に戻されていた。

三年前の火事のときには、どの程度の被害を受けたのか、定かではない。表面上は体裁を取り繕っているように見えるが……。

（なれど）

将馬は地面に目を向ける。土は平らに均されているが、いたるところに雑草が生えているうえ、石ころが転がっていた。転がっているのが、石ころだけならまだ我慢できる。しかし……牛の糞のおまけつきとなれば、笑って見過ごせる事柄ではなかった。

〝おまん、御所には行ったがや〟

龍馬は言っていた。

〝一度行ってみるといいぜよ。そうすれば、天皇さんと民が同じっちゅうのが、ようわかるきに〟

あの言葉を噛みしめていた。

天皇も民も、政とは遠い場所にいる。孝明天皇はかなり発言する天皇だったが、そうであるがゆえに暗殺された可能性もあった。天皇も民も戦にだけはいやおうなく巻き込まれるが、金はなく、ただ放り出されている。施政者の言動に一喜一憂し、振りまわされる点も同じではないだろうか。

（いいように利用されて、振りまわされる、か）

将馬は御所周辺に、荒んだ空気を感じていた。慶喜が孝明天皇の心をつかむのは、たやすいことだったに違いない。黄金色のご進物を定期的にすると約束すれば、天皇は言いなりになったはずだ。

「将馬。なにをしているのじゃ」

建の呼びかけに、素っ気なく応えた。

「見ればわかるだろう」

「牛の糞を拾うているように見ゆる」

吐く息が白くなっている。十一月に入ってから、いちだんと冷えこむようになって

いた。特に朝晩は寒さが厳しくなっている。

「そのとおりだ。天皇（みかど）がおわす御所の御門前が、かようなもので穢（けが）されるのは耐えられぬ。おぬしの名の一文字が冠された御門ゆえ、おぬしも手伝え。糞を集めるのがいやならば、雑草取りをしてくれぬか」

「ちっ、声を掛けるのではなかったわ」

友は渋々雑草を取り始めた。盟友の他に新選組の隊士が二人同道している。彼の者たちは隊服を着ていたが、将馬と建は着用していなかった。京の街は狭い。いつ、どこで、だれに見られるかわからないため、できるだけ隊服は着ない旨、近藤に告げている。

（鼠（ねずみ）はまだいるか）

将馬の気持ちを読んだように、

「うるさいやつよ」

建が言った。自分たち以外にもうひとり、歓迎せざる者が密（ひそ）かに様子を見ていた。

「四、五日前から、われらの後、いや、おまえを尾（つ）行けているのやもしれんな。即（つ）かず離れずの距離を取っているのがまた癪（しゃく）にさわる話じゃ。問い質（ただ）されたときのことを考えているのだろう。知らぬ存ぜぬで通すつもりなのだろうが」

将馬の耳もとに囁いた。
「斬り捨てるか」
「よせ」
素早く止めた。友の強い殺気を感じていた。今日は一日だけ、土佐新田藩に暇をもらっている。血腥い騒ぎを起こすような真似は避けたかった。
「真顔になるな」
建は笑った。
「しつこいゆえ、ちと苛々しただけよ。いなくなれば、さぞかしすっきりするだろうと思うてな」
「おそらく見廻組の諜吏であろう。渡辺篤様の手下やもしれぬ」
「なに？」
振り返ろうとした建を仕草で制した。新選組の隊士が近づいて来ないのを確かめたうえで告げる。
「わたしが坂本様に会うと思うているのやもしれぬ。かねてより見廻組は、坂本様を狙うているからな」
「なるほど。それで手下を配したか。おまえの後を尾行けるよりも、青丹一族の配下

を捜せと言いたいところじゃ。毒入りの酒を飲んでいたら、おれも危なかったわ」

今度は建が真顔になっていた。水は常に将馬が毒味したものを竹筒に入れて持ち歩いている。だが、酒は流れで飲むはめになるかもしれない。今回は新田藩の上士が身代わりになってくれたということだった。

「しくじったゆえ、もはや新田藩からは引きあげたやもしれぬ」

将馬の呟きに、建は頷き返した。

「ありうることよ」

「土佐新田藩が、京に屋敷を構えたのはおよそ三年前。青丹一族が動き出したのも同じ頃だ。隠れ家のひとつであるのは、間違いないと思うが」

「危険だとなれば逃げ出すか。頼みの綱は、新選組の屯所にいる比呂だな。今日の午過ぎに、美鈴様が来るのであろう？」

「うむ。わたしがいるときであれば、比呂に面会してもよいと言うたからな。気は進まぬが仕方あるまい」

「美鈴様と比呂とで美の競演じゃ。隊士たちは大騒ぎであろうな。美鈴様で思い出したが、伝蔵だったか。謎の箱を置いて行ったあれについては、どうなっているのか」

「訪ねて来る者がいないのだろう。言うたやもしれぬが、伏見の家に泊まったとき、あれと同じ紅葉のそばに舞妓姿の娘が現れた」

将馬は、御所の築地塀を顎で指した。黄金色に色づいた紅葉は、すでに半分ほどが葉を散らしている。枝に残った黄色い葉が風に吹かれるさまは、凍りつくような寒さをさらに実感させた。

「屯所の紅葉のそばには芸妓、伏見の紅葉のそばには舞妓か。艶っぽくていいが、おれはどちらにも会いとうない。生身の女子が一番よ」

「佐倉さん、森山さん」

少し離れた場所にいた隊士が声をあげた。ひとりがこちらに近づいて来る。二人は牛糞と雑草を一か所に置いて立ちあがった。

「御所内への立ち入りは許されておらぬ。周囲を見廻ったが、これといった異常はなし。そろそろ屯所に戻ろうではないか」

吐く息がまるで湯気のようだった。ようやく陽が射して来たものの、暖かいと感じるには至っていなかった。

「御所に長居するのは、あまり勧められぬ。知っているやもしれぬが、新選組を離れた十人以上の隊士が、御陵衛士として御所の警護にあたっているのじゃ。われらの姿

を見咎められると……」

不意に言葉を止める。二人の男がこちらに近づいて来るのが見えた。離れた場所にいたもうひとりの新選組隊士も将馬の隣に来た。

「あれが噂の御陵衛士よ」

「伊東甲子太郎様、直々のお出ましか」

隊士たちは吐き捨てるように言った。

「それがしが話をいたします」

将馬は後ろに行けと手で示した。

「さよう。将馬にまかせるのが得策よ」

さがった建に倣い、二人の隊士も退いた。

二

伊東甲子太郎は、江戸の深川佐賀町で北辰一刀流の道場を開いていた男である。局長の近藤勇があらたな隊士を確保するべく、東国で探していたとき、入隊を勧誘した相手だった。伊東は熱心な勤王派で、佐幕派の近藤とは微妙に違っていたが、遣

い手であるのを理由に参謀として迎え入れられた。

またこの頃、近藤の増長や専制に対して、新選組内部から批判が起こり、永倉新八、原田左之助、斎藤一、島田魁ら六人が、京都守護職の会津藩主・松平容保に建白書を出して、新選組は瓦解寸前までいっている。

これはなんとか和解して乗り切ったのだが、孝明天皇が逝去した後、伊東は突然、意外なことを言い出した。

「新選組を脱退するわけではないが、孝明天皇の御陵をお守りしたい。このまま新選組にいても情報収集しにくいからな。敵の内情を知るために御陵衛士になりたいのだ」

新選組の別動隊として活動してはどうか、と、土方らは説得したが、慶応三年（一八六七）三月二十日。朝廷から勅許が降りたのを機に、伊東は新選組から離れていた。

このとき、伊東甲子太郎の実弟他、三番隊組長・斎藤一、八番隊組長・藤堂平助ら十二人が参集して、新選組を脱退している。三分の一ほどの脱退者を出した近藤の胸中はいかばかりか。

新選組内部にも嵐の気配が漂っていた。

「それがしは、佐倉将馬、後ろにいるのは森山建。二人とも上様付きの江戸護衛隊の下士でござる」

短い挨拶の後、

「非礼を承知で申しまするが、御陵衛士が守るのは、亡き天皇の陵であるはず。なにゆえ御所の警備を務めておられるのか」

将馬は告げた。表向きは江戸護衛隊の下士だが、真の姿は幕府探索掛。偽りを隠そうとして、いささか力が入ったかもしれない。

「若いな」

伊東は鼻で笑った。佐平次に渡された新選組の調書によると、年は三十三。東山区の高台寺塔頭の月真院に禁裏御陵衛士屯所を設けている。文学師範を務めていたことからしても、文武両道の遣い手と言えるだろう。今は高台寺党と呼ばれており、討幕と勤王の武闘集団になりかけていた。

（われらは御所に入れぬからな。青丹一族のことを調べてもらうには、高台寺党に頼むしかない。さて、どうしたらよいか）

忙しく考えをめぐらせている。

「近頃はなにかと物騒ゆえ、御所の警護もわれらが任された次第。新選組だけでは手

がまわらぬだろうからな。そう思い、申し出たところ、お許しいただいたというわけよ」

伊東は顔をあげ、将馬の後ろにいる新選組隊士を見やった。

「近藤局長はどうじゃ。それがしがいたときは、向かうところ敵なしとばかりに、傍若無人ぶりを発揮しておられたが、多少はおとなしゅうなられたか。貴公らも苦労するのう。血の粛清ばかりでは、どんどん隊士が減るであろうよ」

笑って、続ける。

「いやになったら、いつでも来るがよい。高台寺党は喜んで迎え入れるぞ。血の粛清も天誅もなしじゃ。御所と陵をお守りするのが務めゆえ」

悠然と構えていた。将馬は試しに大石を投じてみる。

「ご存じかどうか知りませぬが、前天皇は、毒殺された疑いがござる。一服盛った不埒者の行方を、われらは追っているのでござるが、青丹一族という名を聞いたことがござりませぬか」

もしやという疑いを将馬は持っていた。青丹一族は御所にも潜りこんでいるのではないか。禁裏や土佐新田藩、雄藩や御用商人などなど、網の目のように潜伏先を張り巡らせているのではないか。危なくなったら、すぐさま移る。そして、また素知らぬ

顔をして戻って来る。

実体をとらえにくい裏には、そういった隠密裡の動きが、隠れているのではないかと思っていた。

「毒薬使いの一味か」

伊東は苦虫を噛みつぶしたような顔になる。

「噂は耳にしておる。毒味には細心の注意を払うよう、禁裏の台所方には申しつけておいた。今のところ、騒ぎは起きておらぬ」

「実は」

将馬は、わざとらしく周囲を見、声をひそめて言った。

「また天皇が狙われるやもしれませぬ。番屋にかような投げ文がござりました。それゆえ急ぎお知らせに参った次第です」

偽りだったが、

「なに!?」

伊東の顔色が変わった。

「まことなのか、まことに我が君が狙われていると?」

「定かではありませぬが、ゆめゆめご油断なさりませぬよう。もしかすると、青丹一

族の配下が禁裏の奥女中や下女として奉公しているやもしれませぬ。御膳に一服盛られた日には、どうなることか。われらが追っているのは」

と将馬は懐から常に携えている人相書を取り出した。上田糸江、比呂、眇（すがめ）の下女と三枚とも見せる。

「比呂と申すこの女子は、新選組の活躍によって捕らえ申した。今、屯所にて詮議を執り行っておりまする」

「さようか」

応えた伊東の顔に、複雑な感情が湧いたように見えた。手柄を横取りされた嫉妬、幕府の覚えがさらにめでたくなるであろうという羨望（せんぼう）。それらがないまぜになっているのではないだろうか。

たとえ勤王派であろうとも、現在の為政者（いせいしゃ）である徳川幕府に対しては、それなりの敬意を持っているに違いない。新選組の活躍ぶりを告げたうえで、将馬は言った。

「禁裏を探ってはいただけませぬか」

「む？」

伊東の眉がぴくりと動いた。

「われらの目的は毒薬使いの一味を捕らえることです。天皇に危険が及ぶやもしれぬ

となった以上は、力を合わせるのが得策ではないかと」

目を合わせたまま声に静かな力をこめる。心を読みにくい相手ではあるが、天皇家に対する忠誠心はあるのではないだろうか。と同時に、血に彩られた新選組を嫌う正常な考えの持ち主のようにも感じられた。

少し間を置いた後、

「承知した」

伊東は答えた。将馬の真意を探るため、かなり真剣な目を注いでいたのがわかる。御陵衛士の合力を得られることになったのは大きな力だった。

「かたじけない」

将馬は一礼して、目をあげる。

「もうひとつ、お訊ねいたしたき儀がござる。いや、これは私(わたくし)の話でござりますゆえ、無理にとは申しませぬが」

「承ろうか」

「は。それがし、仲間うちでは『花咲爺』と呼ばれるほどの花好きでござります。かねてより御所には、御所紅(ごしょべに)と呼ばれる嵯峨菊(さがぎく)があると聞いておりました。これからは寒菊の時期になってしまいまするが、もしや、まだ嵯峨菊があるのではないかと思い

ましてな」

「将馬は無類の花好きでござりましてな」

建が後ろから素早く言い添えた。

「さらに御所の御門前に牛の糞が転がっていたり、雑草が生えているのは許せぬと、そら、あのとおり」

視線で、一か所に纏めた牛の糞と雑草を示した。

「それがしと御門前を浄めた次第にござる」

建は深々と辞儀をする。絶妙の口添えといえた。ここにきて盟友は本当に、以前とは比べものにならないほどの活躍を見せる。打てば響くように応えてくれるのはありがたいことだった。

「われら御陵衛士にも、かような気配りが必要との仰せにござろうか」

伊東は牛の糞と雑草の山を見ながら笑っていた。近藤局長であれば、われら新選組にかような真似をさせるつもりか、と、怒ったのではないだろうか。少なくとも伊東に、驕りや増長は感じられなかった。

「菊花紋は、天皇家の貴い御紋。後鳥羽院が御自分の持ち物などに、お印としてお使いあそばされたのが初めであるとか。その天皇家の嵯峨菊となれば、それがしならず

とも興味を引かれるのではないかと存じます」
「ほう。菊花紋のいわれをご存じか」
伊東の言動が変化したのを、将馬は見のがさない。伊東は剣術の腕前だけでなく、文官としてもすぐれた資質を持っている。狙ったわけではなく、たまたまそういう流れになっただけなのだが、悪くない形になっていた。
「は」
短く答えるにとどめた。
「あいわかった」
伊東は小さく頷いた。
「まずは毒薬使いの配下が、禁裏に入りこんでおらぬか。調べてみよう。さらに嵯峨菊の件についても、掛の者に訊ねてみようではないか。まあ、後者については、あまりあてにされても困るが」
「かたじけない。嵯峨菊は、紅が多いと聞いておりますが、まれに黄色、しかも黄金色に輝く菊があるとか」
花咲爺の好奇心が、あらたな問いを投げさせた。
「初めて聞いた話よ」

「さようでございますか。青丹一族は、薬草を育てるのが上手い一族です。その途中で黄金色の菊が生まれた可能性がなきにしもあらず。などと、それがしは考えました次第。お伺いせずにはいられませなんだ。ご無礼、ひらにお許しを」

将馬は先刻の盟友同様、深々と辞儀をする。

「いやいや、お気にめさるるな。いちおう伺うてみるというだけの話よ。件の一族については、なにかわかり次第お知らせいたす。どちらに使いを出せば宜しいか」

「二条城の詰所にお願いいたします」

「あいわかった」

「それでは失礼いたします」

もう一度辞儀をして、伊東たちと別れた。御陵衛士の立場でどこまで調べられるか。定かではなかったが、たやすく潜りこめない以上、伊東の力を借りるしかなかった。

（屯所の牢屋にいる比呂は、青丹一族の配下なのかどうか）

次は比呂の詮議となる。

屯所に向かう将馬の足取りは重かった。

三

不動堂村の屯所に戻ったとき、
「佐倉さん」
ひとりの隊士が駆け寄って来た。
「沖田さんが、例の件で少し話があると言っています」
例の件と聞けば、青丹一族しか浮かばない。
「お比呂が吐いたのか」
建が代弁するように問いかけた。
「あ、いえ、その件ではなくて、これです」
隊士は白目を剝き、両手を前に出して、幽霊の真似をする。建が苦笑いした。
「すまん。酒を飲んだとき、おれが話を広めたのじゃ。屯所の庭に現れたと言うたら、隊士はみな震えあがっていたぞ。なれど、視たのは昼間ではないか。あれも幽霊と言うのであろうかな」
真顔で首をひねっている。将馬は開け放したままの門の外をちらりと見た。見廻組

の諜吏と思しき男が、なにげない足取りで通り過ぎて行く。ここまで尾行け、中に入るのを見届けたに違いなかった。

「沖田さんは武道場ですか」

将馬は訊きながら歩いている。

「そうです」

知らせに来た隊士が、先にたって進んだ。将馬は建とあとに続いた。伊東甲子太郎らが離れた新選組は、常に人手不足の状態なのかもしれない。屯所の中は静まり返っていた。

風の音だけが聞こえている。

木々の間を冷たい風が吹き抜けている。

「美しい」

将馬は思わず足を止めていた。伊呂波紅葉、ナナカマド、カツラ、小紫陽花（こあじさい）といった木々の葉が、さまざまな色合いに染まっていた。紅から橙色（だいだい）へ、橙色から黄色へと、種類によって変化の仕方もそれぞれ違っている。

「人間と同じだな」

小さく微笑（わら）っていた。同じ種類の木であろうとも、同じ色には染まらない。新選組

に居続ける者、意見が合わず離れた者、やむなく幕府探索掛をしている者。自分はどの木だろうか。

「将馬。紅葉狩りはあとにしろ」

建に促されて、ふたたび歩き出した。隊士は出払っているのか、武道場にいたのは沖田ひとりだった。将馬の煎じ薬が効いているらしく、顔色はかなり良くなっている。毎日のように感謝の言葉を聞いていた。

「稽古はあとでするとして、まずは座ってください」

沖田に勧められるまま、二人は武道場の一角に腰を降ろした。

「お陰でだいぶ動けるようになった。佐倉さんの煎じ薬はよく効くな」

挨拶代わりの礼に、将馬は笑顔を返した。

「お役にたてたのであれば、なによりです」

「誤解しないでほしいのだが、土佐新田藩には、新選組の隊士も潜入させた。佐倉さんと森山さんを信じておらぬわけではない。今日のように二人は時々暇を取らねばならぬゆえ、近藤さんと相談して決めた次第よ」

「お気遣い、いたみいります。出入りしている商人については、いかがですか。蠟燭問屋、油問屋、茶問屋、薬種問屋といったところが、新田藩の御用商人のようです。

小藩にしては大店（おおだな）の出入りが多いと思いました」

さっそく将馬は切り出した。稽古はともかくも、遊びに来ているわけではない。明日からはまた探索掛の御役目に戻らなければならないのである。必要な話を得ておきたかった。

「油問屋は祇園の石段下に見世を構えている。蠟燭問屋は西陣（にしじん）、茶問屋は栂尾（とがのお）、極上の茶の産地よ。薬種問屋の見世も、油問屋と同じ祇園の石段下だ」

沖田に手渡された調書を、将馬は確認する。土佐新田藩での毒殺騒ぎも、むろん知らせておいた。

「おそらく青丹一族の仕業だと思いますが、新田藩には、連中はしばらく近寄らないかもしれませんね」

盟友に調書を渡しながら私見を述べた。

「うむ。あの騒ぎが起きたゆえ、二人は出入りせぬ方がいいのではないかと思うたのよ。近藤さんが見廻組の与頭と、あらためて相談する由。やはり、毒薬使いどもは二人を狙うたのであろうか」

沖田はきわめて素朴な疑問を投げた。龍馬に逢ったことを将馬はもちろん調書に記していない。盟友には話したが、建も当然のように口外しなかった。

「おそらくそうではないかと思います」
嘘をつくのは心苦しいが、平静を装っている。
「おれは危なかった」
建が言った。
「あの夜、酒を飲もうと誘われていたんでな。死んだ三人が昼酒を楽しんでくれたお陰で、命拾いしたようなものよ」
新選組の雰囲気に合わせているのだろう、気さくな口調になっていた。
「土佐人はとにかく酒を飲む」
沖田が唇をゆがめる。
「昼間だろうとなんだろうと関係ない。三人集まればなんとやらよ。連中はまず佐倉さんに毒味をしてもらうべきだった」
「それで、沖田さん」
将馬は話を変えた。
「紅葉の簪を挿していた芸妓を見たとか。わたしは昼間だったのですが、伊呂波紅葉の近くに立っておりました。沖田さんがご覧になった女子は……」
「幽霊ではない」

覆い被せるように沖田は言った。

「酒宴のときに呼んだ芸妓よ。わたしが見た限りでは、生きている女子だった。なぜ、憶えていたかと言うと」

自分の髷を指して、続ける。

「珍しい紅葉の簪を挿していたのだ。三味線の上手い年増の芸妓でな。呼んだのは、さよう、去年の今頃だったか。それゆえ、この屯所の話ではない。間借りしていた西本願寺のときのことよ。あたりまえやもしれぬが、西本願寺にも紅葉があってな。その芸妓は色づいた紅葉を長い間、見つめていた」

「芸妓の名は？　置屋はどこですか？」

腰を浮かせた将馬に、沖田は小さく頭を振る。

「わからぬ。あのとき酒宴を仕切った隊士は、すでに死んだゆえ」

そう言った後、しばし黙りこんだ。去年の話をしているだけなのに血腥さが漂ってくる。他愛のない会話や平らかな暮らしが、遠い若者たちなのだと、あらためて思った。

（帰る場所があるだけ幸せなのやもしれぬ）

脳裏に浮かぶのは、美鈴や将平だった。彼の者たちの居るところが自分の帰る家。

京に来てからなんとなく将馬はそう思うようになっていた。江戸では神田鍋町の借家、そして、京では伏見の借家。ともすれば落ちこみがちになるが、帰る場所にはいつでも美鈴がいてくれる。

そんな気持ちを読んだわけではないだろうが、

「今一度確かめたいのだが、紅葉の簪を挿していたのでござるか」

建が訊いた。その問いで将馬は気持ちを戻した。

「さよう。紅、橙色、黄色と、何種類かの色に染まった紅葉の簪です。なんという木なのかまではわかりませんが、色づいた紅葉を象った簪でした。変わった簪を挿しているなと、訊いた憶えがあります」

「その芸妓はなんと？」

将馬はつい身を乗り出している。もしかしたら、小箱を置いて行った酒問屋の主・伝蔵に関わりのある者ではないのか。伏見の借家の庭にも現れたことから、そう推測していた。幻の舞妓と芸妓は顔立ちが似ているように見えた。舞妓を卒業して、芸妓になった可能性もある。あるいは母娘かもしれないが、幻を思い浮かべると、決まって伝蔵が浮かぶのだった。

「紅葉に特別な思い出があるのだと言っていたな」

沖田は少し遠い目になる。

「来世では一緒になろう。惚れた男とそんな約定をかわしたとか。身請けされたため、添い遂げられなかったような話もしていた。相手にもまたご妻女がいた由」

「身請けされたのに、去年は芸妓をしていたわけですか。旦那が亡くなるかなにかして、芸妓に戻らざるを得なくなったのかもしれないな」

将馬は独り言のように呟いていた。

「誓い合った男の家を訪ねてみたが、すでに持ち主が変わっていた。捜したものの、行方知れず。それもそのはず、男は江戸に戻っていた。しかし、男もまた約定をかわした女子のことが忘れられず、紅葉狩りの季節になると、京に来る」

「つらつらと、よく思い浮かぶな」

建が感心したように見つめている。舞妓だった女子と伝蔵の悲恋、鍵になるのは伊呂波紅葉、伏見の家で二人は『来世では一緒になろう』と誓い合ったのではないか。

「いや、頭に浮かぶまま言うてみただけよ」

「あの男、伝蔵だったか。知らせた方がいいのではないか」

「まだ早い。今少し芸妓のことを調べてみよう。紅葉が散る頃までは京にいると言うていた。時はあるゆえ」

「いずれにしても、楽しみなことよ。悲恋が一転して、恋の成就となるか。互いに気持ちが変わっておらぬとよいが」
「話がよくわかりません」
沖田が口をはさんだ。
「ですが、立ち入らぬことにします。佐倉さんたちには佐倉さんたちの仕事があると思いますから。御所の様子はいかがでしたか」
問いかけられて、将馬は応えた。
「御陵衛士の伊東さんに、お目にかかりました。青丹一族の配下が、禁裏に潜りこんでいるやもしれぬと話しておきました。さらに私事で恐縮なのですが、嵯峨菊を拝見できないかお願いした次第です。もしかすると、伊東さんから連絡が来るかもしれません」
「わかりました。その件も併せて、局長に申し伝えておきます」
「それで……お比呂はどんな様子ですか」
今度は将馬が訊いた。拷問しているのではないかと、内心、気が気ではない。
「あれ？」
沖田は意外そうな声をあげる。声が少し高くなっていた。年相応の素に近い表情を

したようにも見えた。

「御新造から聞いていないんですか、佐倉さん。美鈴殿は牢屋に日参していますよ。ここ数日は泊まりこんでいます。わたしたちは知っているとばかり思っていましたが」

御新造の言葉が出たとたん、将馬は立ちあがっている。

「今日も来ているんですね」

問いかけではなく、確認になっていた。

「はい」

「やれやれ。われらには挨拶なしか。お姫さんにも困ったもんだ」

建も呆れ顔で立ちあがる。まさに将馬の代弁者となっていた。勝手な行動にもほどがあるではないか。ここでは命のやりとりが日常なのを、まだ実感していないのではないだろうか。

「行くぞ」

友に告げて、武道場をあとにする。

出たところにある白木蓮が、黄色く色づき始めていた。

四

牢屋は……不可思議な静寂に包まれていた。

格子の向こうに、美鈴と比呂が座している。畳敷きの獄内には行灯の明かりが灯り、小さな床の間がしつらえられていた。美鈴は茶道具一式を獄内に持ちこみ、茶を点てている。しゅんしゅんと沸く釜の湯が、白い湯気となって、牢屋の中に広がっていた。そして、床の間には、黄色い寒菊が二輪活けられている。

凛とした風情は、牢屋の美鈴と比呂のようだった。

使われている牢屋がひとつだけなのは、すぐに切腹や斬首を申しつけるからかもしれない。他の牢屋に罪人は投獄されていなかった。

まるで舞台のような場所で、美鈴は堂々と点前を披露していた。

格子越しの見物客は、十二、三人ほどだろうか。見張り場の広さは二十畳程度で、一番前の特等席に、弟の将平と義弟の富沢大助がいた。

「兄上」

将平が振り向いた。

「すまぬ。ここに泊まりこむと言われたゆえ、毎日、わたしが警護しているのだ。同役の者に手伝わせて、茶道具や葛籠などを運びこんだ次第。将馬に知らせてはならぬときつく申しつけられたゆえ」

富沢が小声で謝罪する。

「床の間はわたしが造りました。茶の湯のしつらえも、わたしが調えた次第です」

と告げる弟の声も小さかった。集中している美鈴を邪魔したくないという気持ちと、将馬に怒られるのではないかという恐れが、ないまぜになっているように思えた。美鈴はもちろんだが、比呂も西陣織の美しい着物を纏っている。

（泊まりこんでいたとはな。建ではないが『やれやれ』よ。もっとも考えあってのことだろうが）

将馬なりに美鈴の考えを推し量っていた。おそらく三つの理由があるのではないだろうか。

ひとつは当然のことながら比呂に探りを入れるため、ひとつは若い隊士を比呂に近づけぬため、ひとつは隊士が近づいたことによって起きるやもしれぬ騒ぎを未然に防ぐため。青丹一族の配下かどうかを探りながら、比呂の安全を確保しつつ、隊士の諍いを防ぐのが目的であるように思えた。

よくよく見ると、獄舎には葛籠だけでなく、抽出付きの小箪笥や手鏡といった品物まで置かれている。着替えや化粧道具まで持ちこんでいるのかもしれない。

比呂は薄化粧を施していた。

点てた茶を、美鈴は比呂の前に置いた。心得があったのだろうか。それとも美鈴が指南したのか。比呂は礼儀に則って茶をいただいている。

「けっこうなお点前でございました」

懐紙で茶碗の飲み口を拭く仕草もさまになっていた。

「お粗末さまでございました。次はお比呂さんに点てていただきたいと思います。この数日間で見事に点前の基本を会得なされました。殿方の前で腕前をご披露なさるのが、宜しいのではないかと存じます」

美鈴は危険な申し出をする。これだけの『目』がある中で、よもや比呂が一服盛るとは思えない。牢屋に入る前に身体をあらためていることから、毒を所持しているとは思えないが、秘密裡に毒を手に入れていることも考えられた。

（お比呂は青丹一族ではないという証をたてるつもりか）

将馬はそう読んでいた。隊士の面前で比呂が点てた茶を飲んでみせる。美鈴が無事なら比呂は無実。しかし、万が一、使う抹茶に毒が混ぜられていたとしたら？　すで

に死を覚悟しているであろう比呂が、美鈴を道連れにしようと考えていたら？

「……」

将馬は冷や汗が滲んできた。御用商人の中には、茶問屋もいる。見世があるのは確か栂尾と聞いた憶えがあった。その茶問屋こそが、青丹一族の隠れ家なのではないか。あの茶入れの中の抹茶は、毒入りなのではないか。比呂は幼少より毒に馴れているため、美鈴が点てた茶を飲んでも、平然としているのではないか。

「畏まりました」

比呂は頷いて、静かに立ちあがる。ほとんど同時に立ちあがった美鈴と、すみやかに場所を入れ替わった。艶やかな着物と優雅な立ち居振る舞いは、女歌舞伎の舞台を見ているかのよう。さしずめ題名は『艶姿茶会対決』とでもなろうか。

危険きわまりない茶会であるのは確かだった。

「土方さんが来た」

建がそっと囁いた。だれかが知らせに行ったのだろう、沖田も一緒に来ていた。土方と沖田は脇差を腰に携えている。

将馬は申し出ずにいられない。

「それがしも茶会に参加いたしたく思います」

わざとらしいほどに大きな声を張りあげた。毒味役を務められるのは自分だけ、否と言わせるつもりはなかった。刀と脇差を外して建に渡すや、答えを待たずに格子戸を開けて中に入る。

「宜しいですか」

遅ればせながら、美鈴が比呂に訊いた。

「はい」

「先にそれがしが、頂戴いたしたく思います」

中腰の姿勢で将馬は言った。幕府の毒味役に指南を受けた身ゆえ、舌にはそこそこ自信がある。が、無味無臭の毒だったとき、察知できるだろうか。南蛮渡来の毒に、そういうものもあると聞いていた。

（しばらくの間、症状が出ない毒やもしれぬ）

次から次へと浮かぶ不吉な思いを苦労して封じこめる。

「では、こちらに」

退いた美鈴の席に、将馬は腰をおろした。茶を点てる比呂の横顔を見る位置だった。美鈴は格子の近くに行きたくないのか、将馬の右斜め後ろに腰を落ち着ける。相変わらず静かに釜は、白い湯気をあげ続けていた。

「慣れておりませぬゆえ、手際の悪さはお許しを」

比呂は言い、さっそく点前に取りかかった。本当に覚えたてなのだろう、おぼつかない手付きではあったが、それを見目麗しさで補っていた。格子の向こうに居並ぶ男たちが、どこか間抜けに見える。

獄舎にいるはずなのに、名のある茶人の茶室に思えた。

(そういう雰囲気がある)

美鈴が創り出した座敷であるとともに、美鈴が発する空気だった。育ちの良さを実感せずにいられない。特に床の間の寒菊が素晴らしかった。

寄り添うように活けられていたが、見る者の気持ちによっては、二輪の寒菊が違う方向を向いているように見えるかもしれない。意図しているのかどうかわからないが、花の活け方が絶妙だった。

文字通り花を添えていた。

「どうぞ」

すっと比呂が置いた茶碗を、一礼して、将馬は手に取る。襲いかかる恐怖心を追いやって、ごくりとひと口飲んだ。おそらく栂尾産ではないだろうか。すっきりとした味わいが舌に広がる。奇妙な痺れや苦みは感じられなかった。

「けっこうなお点前でした」

将馬の言葉を、美鈴が受ける。

「茶には心を鎮める作用があるとか」

斜め後ろにいるので顔は見えないが、心の乱れはとらえられない。ふだんどおりの美鈴の声だった。

「此度は栂尾の茶を用いました。この地の茶を本茶――本場の上品の茶とし、その他の茶は非常――よくない茶とされている由。そういった味の鑑定に、豪華な賭物を用いるのが闘茶とされています」

行灯の明かりが、にわか造りの茶室にやわらかな光を広げている。格子を視野に入れなければ、とても牢屋とは思えないだろう。しかし、これは闘いなのだと、美鈴は婉曲に告げているのではないだろうか。

将馬たちと青丹一族の闘い。

「また闘茶の際、将軍家の場合は代々伝わる豪華な飾りでしつらえられます。唐物による室礼ですね。しつらえるという語は、この室礼から来ているのでしょう。茶室は明るすぎるのをきらいます。道具が粗相に見えるため、ほの暗い明るさが必要だと言われておりますね」

美鈴が動くかすかな気配を感じて、将馬も身体の向きを変える。ゆっくりと視線を格子の方に移した。

「夫が茶をいただきましたが、ご覧のとおり、無事でございます。お比呂さんは、青丹一族ではありません」

一語一語噛みしめるように告げた。視線の先にいたのは、土方だった。

「茶道具は何日か前に運びこみ、お比呂さんの暇潰しに稽古をしてもらいました。わたしは四日前からここに泊まりこんでおりますが、時折、用足しに出たりいたしました。茶入れに毒を混ぜることもできたはず……」

「詮議する」

土方がすかさず声をあげる。

「お遊びはこれぐらいにいたしましょう。冥土に旅立つ前にせめてと思い、このような茶番を許しました。なれど、もはやこれまで。その女子は毒薬使いの一味である可能性が高いと思います」

「なにを根拠に、かようなことを仰るのですか」

美鈴は負けていない。土方を睨み据えていた。

「投げ文がありました」

「お見せください」

強い口調で促した。茶の湯を観賞していた隊士たちは、少しずつさがり始めている。土方が格子戸を開けた。格子の近くに残っているのは、建と将平、富沢、沖田の四人と、土方だけになっていた。

丸腰の将馬を気にかけているに違いない。建が預けられた刀と脇差を握りしめ、渡す機会を見計らっているような感じを受けた。

「手元にはない」

土方は答えながら、早くも脇差の柄を握りしめている。

「偽りではないのですか」

美鈴は鋭く切り返した。

「お比呂さんを青丹一族と思わせるための策ではないのですか。わたしはここで毎日、話をいたしました。毒を盛る機会もありました。それでも茶を飲んだ夫は生きております。夫が生きているのはすなわち、お比呂さんは毒薬使いの一味ではないという証になりましょう。いかがですか」

「貴女(あなた)はご自分の立場がわかっておられませんね。いくら一味の者であろうとも、上野寛永寺の目代の女(むすめ)に、毒を盛るような真似はしませんよ。また美鈴殿をここで殺め

れば、疑いが自分に向けられるのをわかっていますから。機会があろうとも愚は犯しません」

「では、あと三日、いえ、二日、時をください。お比呂さんの許嫁を捜して参ります。どうかお願いですから……」

「なぜ、そんなにわたしのことを？」

不意に比呂が口をはさんだ。心からの問いかけに思えた。赤の他人が自分のために、新選組と対峙する理由がわからなかったのかもしれない。

土方は今にも飛びこんで来ようとしている。将馬は丸腰ゆえ、最初の一撃は防げたとしても次はどうなるか。ましてやここは新選組の屯所。階段のところにさがった隊士が斬りこんで来たときには、建たちを巻きこんで激しい斬り合いになるは必至。ひしひしと高まる殺気を、女子であろうとも察知できるはずだ。

「信じているからです」

美鈴は、穏やかに応えた。

「お比呂さんは、毒薬を使って人を殺めるような女子ではありません。十日ほどのお付き合いですが、わたしはそう感じました」

落ち着きはらっていた。笑みさえ浮かべている。

「佐倉さんと御新造は、座を外していただきたい」
対する土方は険しい表情をしていた。脇差の鯉口こそ切っていないものの、気魄(きはく)をこめた目を向けている。副長の意志を感じ取ったのか、何人かの隊士がふたたび格子の近くに来ていた。
「出ていただこうか」
土方の命令に、美鈴は頭を振る。
「わたしは、お比呂さんのそばを離れません。土方さんこそ、座を外してくださいませ。それとも」
顎をあげて、告げた。
「寛永寺目代の女を、お斬りになりますか」
美鈴はじりっと膝で前に出る。将馬は仕草で押し留め、偽りの妻よりも前に出た。格子戸を塞ぐような形になって、土方といやでも睨み合っていた。
「……」
副長は腰を低くして身構えている。将馬の胸をつらぬくには中に入るしかない。が、狭い戸から中に入るのはあきらかに不利だ。渾身(こんしん)の一撃をかわされた挙げ句、押さえつけられるかもしれない。躊躇(ためら)っているのが見て取れた。

「外に出ていただこうか」
土方の要請に、
「参りませぬ」
美鈴が応えた。
出て来い、いや行かぬの応酬になるかと思ったときである。
「牢屋で茶の湯とはまた粋だねえ」
憶えのある声がひびいた。
「勝先生」
名を呼んだのは美鈴だった。
「なに？」
土方が驚いたように振り返る。左右に分かれた隊士を横目で見ながら、勝がこちらに来た。建を含めた山同心組は一礼している。隊士たちはじろじろと無遠慮な目を向けていた。
〝この小兵（こひょう）が、軍艦奉行の勝か？〟
そんな表情をしていた。
「佐倉将馬に話があって来たんだがね。ちょいと借りてもいいかい」

勝は気楽な口調で言った。殺気まじりの対峙が、一瞬のうちに消えていた。童子のような笑みを向ける勝を、土方は当惑気味に見つめている。

「どうぞご随意に」

そう答えるしかなかっただろう。

「だとさ」

おどけた仕草で勝は、将馬を牢屋の外に導き出した。出たとたん、勝が牢屋の格子戸を閉める。扉さえ閉めてしまえば牢屋ほど安全な場所はない。と、申し渡したような動きになっていた。

（もっとも……銃を使わなければの話だが）

将馬は冷静に見つめている。

忌々しげに土方が、舌打ちしたことに気づいていた。

五

「坂本龍馬が現れたぞ」

「どこじゃ」

「祇園の料理屋にいるとか」

屯所は急に騒がしくなっている。将馬は書院の障子を閉めて座り直した。土方の許しを得て、書院を借りていた。

「そういえば」

ふと思いついて言った。

「先日、先生にお目にかかったときも、坂本様の捕り物騒ぎがありました。あのときは島原の料理屋でしたが、今のように隊士がいっせいに出て行ったのを憶えています」

おかしなことがあるものだ。たまたまにしては出来すぎている、ような気がしなくもない。勝はにやりと笑った。

「一度あることは二度あるってぇのが、世の習いよ。まあ、薩長との戦は、一度でもやりたいとは思わないがね。おまえさんも鬼の副長とは、やり合いたくなかっただろ」

と先程の緊迫した話題に変える。

「はい」

「おれとしてはだ、神道無念流対天然理心流の対決ってのを、見たくないでもなかっ

たがね。どっちかが傷つくとなりゃ放っておけねえや」
「ちょうど良い時においでくださいました。新選組との真剣勝負は避けたいところです。ありがとうございました」
深々と一礼した。新選組の中には、勝をよく思わない者もいる。闇討ちに遭う危険を覚悟で、来てくれたのではないだろうか。
（それにしても）
と思っている。話があるのは事実かもしれないが、これまたあまりにも出来すぎているのではないか。もしや勝は新選組にも密偵を潜りこませているのだろうか。その者の知らせを受けて、急ぎ駆けつけたのか。
訊いてみたいと思いながらも、どう訊いたらよいのかわからない。
そんな様子を読んだのか、
「胸騒ぎがしたのさ」
勝が言った。
「で、まずはここに来てみた。伏見に使いをやろうとも思ったんだがね。よくわからないんだが、おまえさんは屯所にいると感じたのさ。お姫さんが泊まりこんでいるって話を聞いてたからよ。今日あたりいるかもしれねえってな、思ったわけよ」

「わたしがいるところには騒ぎあり、ですか」
将馬の苦笑に、勝も苦笑いを返した。
「いや、おまえさんがいるところというよりも、お姫さんだろうな。なにかと騒ぎを起こしてくれる。まあ、お姫さんの気持ちはわからないでもねえのさ。お比呂だったか。あの娘は青丹一族の配下かもしれねえが、拷問ってのはいただけねえや。鬼の副長は平気でいたぶるだろうからよ。苦肉の策の泊まりこみだ」
美鈴の言動に対する考えは、勝も同じようだった。すでに土佐新田藩で死人が出ている。比呂を責めて吐かせたいという気持ちは、土方ならずともあるのではないだろうか。
「それで、先生。今日はいかようなお話でおいでになられたのですか」
ようやく本題に入る。
「胸騒ぎよ」
勝はふたたび同じ言葉を口にした。
「そろそろ龍馬が京に戻って来る頃だ。いや、さいぜんの騒ぎからすると、京のどこかにいるのかもしれねえ。やつが京にいると考えただけで、落ち着かない気分になっちまうのさ。初めての恋みてえな感じよ」

勝独特の表現だった。美鈴が初恋の将馬には、きわめてわかりやすい説明といえた。あるいはわかったうえで言ったのかもしれない。

「文に記しましたように、土佐新田藩で坂本様にお目にかかりました。遁走劇についてもお話ししましたが」

「わかってる」

片手をあげて止める。将馬は花見帖を上役の佐平次ではなく、文を同封して勝に届けるようにしていた。佐平次に断りは入れていないが、勝から佐平次に花見帖がまわるのだろう。特に注意は受けていなかった。

「言ったところで遁げねえよ、あいつはな」

一瞬遠い目をした後、

「ま、それはともかくだ」

あらたまった口調になる。将馬は思わず姿勢をただしていた。

「承ります」

「大政奉還があまりにもあっさりと終わっちまったからよ。肩すかしをくわされて、物足りなく覚えている連中がいるんだろうぜ。薩長、特に薩摩と朝廷がまた怪しい動きをし始めた。周知の事実ってやつかもしれねえがよ。いまだ参内を許されていねえ

はずの岩倉具視が、頻々と御所を訪れている由。紅葉賀、それも派手な赤い色の宴を企んでいるのかもしれねえ」

紅葉賀が血の饗宴であるのは言うまでもない。十月二十一日には、朝廷から各地の大名に上洛を命じる通達が出されていた。反幕府派の安芸藩、幕府派の桑名藩、公儀政体派の尾張藩などが、続々と京に来ている。

剣呑な空気がいやでも高まっていた。

「いかような謀なのですか」

「新しい古ってとこか」

勝流の言いまわしで続ける。

「王政復古よ。大政奉還と一連の政策だがね。徳川家としては『古』を、徳川幕府が開かれた慶長年間（一五九六～一六一五）にしたい考えだ」

「それ以上遡ると、徳川そのものが存在しなくなってしまうからですね。それが『古』の限界だと」

「そのとおりよ。ところが、敵はすべての始まりとされる神武天皇の時代にまで『古』は遡るときた。完全に徳川家を消滅させるって考えだろう。そもそも大政奉還はだ、攘夷なんざ無理ってことを、天皇に知ってもらうために考え出した策よ。そん

なに『攘夷、攘夷』と仰るのであれば、よござんす、政権はお譲りしましょう。ためしに天皇さんがやってみなさいよ、とね」

面白可笑しく話しているが、事は深刻だった。岩倉具視の目論みどおりにいくと、徳川家は新政権から排斥されかねない。その後どうなるかは想像もつかないが、慶喜は黙っていないだろう。

「わたしの記憶違いでなければ、上様が征夷大将軍の辞表を朝廷に出されたのは」

将馬の呟きを、勝が継いだ。

「先月の二十四日よ。その前日に内政については今までどおりで良いのかと、上様は朝廷に確かめている。二十六日、辞表は却下されたうえ、外交・内政ともにこれまでどおりというお達しをいただいた」

「それを知りながら、ですか」

胸に暗雲が広がるのを感じた。反幕府派はもはや聞く耳もたず、戦を仕掛けることしか考えていないのではないか。

「上様はいかようなお考えなのですか」

答えは想像できたが、敢えて問いかけた。勝は苦々しい表情を見せる。

「決まってるじゃねえか」

慶喜は戦も辞さない覚悟だというのが、言葉の端々にも表れていた。戦にしないための策はないのか。血を流さずに収める方法はないのか。互いの目の中に、答えを探しているような感じがした。

「土佐や越前が敵にまわらない限り、敗けない自信が上様にはあるんだろうぜ。今も政権は上様のお手に在るからな。軍艦や武器も着々と揃えている。大名会議に臨んだ場合も優位にたつだろう」

今、土佐で巨きな力を持っているのは、後藤象二郎だが、龍馬とも今は良好な関係を築いている。龍馬や中岡慎太郎の影がちらつくのは気のせいではあるまい。反幕府派の雄藩や、尾張藩のような公儀政体派をまじえての大名会議が、大きな山場になるかもしれなかった。

「大名会議は、いつ、開かれるのですか」

「さあてな。おれのような下っ端には、教えちゃくれねえさ」

「青丹一族は」

将馬は重い推測を口にする。

「禁裏に潜んでいるのやもしれませぬ」

岩倉の動きを見ると、そう考えざるをえなかった。友木藩の前藩主が遺した

『慶花（よろこびのはな）』には、青丹一族を操っていた者が見え隠れしている。お留花だった変化朝顔に、自分の一字を与えた男……。

「かつての主は『慶花（けいか）』、そして、今の主は岩倉か」

勝は、将馬の目を見据えた。前薩摩藩主・島津斉彬と、徳川家茂に一服盛った後、『慶花』は青丹一族を始末しようとしたのではないか。そうさせてはなるまいと、青丹一族は反撃に出る。

『慶花』――徳川慶喜の後ろ盾だった孝明天皇を毒殺して、窮地に追いこんだ。慶喜を苦しめるためなら、どんな相手とでも手を組むのではないだろうか。

「わたしはそう考えております」

「上様は頭のいいお方だ。大名会議を利用して、逆に大名家の力を削り、幕府に権力を集中させる策を練られるだろうな。なんと言っても弁がたつ。薩長土肥が束になってかかってもかなわねえさ」

称賛半分、皮肉半分という感じだった。勝の真意がどこにあるのか、踏みこめない部分もある。

「青丹一族は、岩倉様を脅しているのかもしれません」

別の考えを振ってみた。孝明天皇と同じ目に遭いたくなければ言うことを聞け。支

配権を持っているのは岩倉ではなく、青丹一族ではないのだろうか。

六

「おれもそれは考えていた」

勝は渋面で同意する。

「だからこそ、青丹一族を始末しなきゃならねえのさ。毒薬使いの一味に、この国をまかせられるかってんだ。日本は幕府や朝廷や毒薬使いのもんじゃねえ、天下万民のものよ。一部の為政者に好き勝手はさせねえや」

腕まくりこそしていないが、そういう雰囲気だった。

笑った将馬をどう思ったのか、

「土佐藩の後藤象二郎だが、新選組の近藤局長と意気投合したらしいぜ」

意外な話を口にした。

「局長は、土佐藩の後藤にだけは手を出すなと隊士に厳命したとか。佐幕派の局長と倒幕、倒す方だがよ。倒幕派の後藤が酒を酌み交わすってのも、なかなかオツなもんだな。刃をかわし合うよりゃいい」

「そうですね」
大きく頷き返してから、将馬は問いかける。
「わたしは土佐新田藩の御用商人を調べたいのですが、潜入できますか」
「御用商人は、確か四軒あったな」
「はい。茶問屋、薬種問屋、油問屋、蠟燭問屋です」
「すべて見張りをつけているが、上田糸江らしき女が出入りしている気配はない。もっともやつらは穴掘りも得意だからよ。違う場所から出入りしているかもしれねえが」
鼻で笑い飛ばしたかったのだろうが、過日は追い詰めたはずの糸江に、うまうまと抜け道から逃げられた。冗談では済まない話なのである。
「御用商人が四軒というのも厄介な話です。限られた人手をうまく配さないと、また同じ過ちを犯しかねません。毒を混入させやすいのは茶や薬だと思いますゆえ、この二軒に絞りこんだ方がよいのではないかと思います」
「薬種問屋に潜りこむか、あるいは茶問屋か」
勝の言葉を即座に受ける。
「あるいは御所か」

「禁裏はむずかしいかもしれねえや」
「坂本様に御所へ行ってみろと言われましたので、様子を見て参りました。御陵衛士の伊東甲子太郎様にお目にかかりまして」
将馬は手短に説明する。青丹一族がまた天皇を狙っていると偽りを告げ、伊東に探るよう頼んだ。ついでに嵯峨菊を見たいとも言っておいたが、伊東はまともに取り合ってくれないかもしれない。
「高台寺党の伊東か」
勝はぼそっと言った。
「やつは、中岡と度々連絡を取っているみてえだぜ。どういう経緯で知り合ったのかはわからねえがよ。高台寺党の中には、中岡が頭目を務める陸援隊に移りたいと名乗りをあげた者もいるとか」
またもや意外な話が出た。中岡慎太郎と伊東甲子太郎という、二つの派の頭目が、いったい、どのような理由で会っているのか。
「伊東様は尊皇攘夷派と伺いました。近藤局長よりは、坂本様や中岡様との方が話は合うかもしれませんね」
「おぉ、また坂本んとこで、ぶるぶるっときた」

大仰に勝は震えて見せる。

「命を狙われてるってのに、頓着しねえからなあ、あいつは。見廻組の諜吏、名は増次郎だったか。おまえさんを尾行けてたろ」

とふたたび将馬に目を向けた。

「はい。渡辺篤様の配下ですか」

「そうらしいな。おれは目立ちすぎるから、龍馬も連絡を取って来にくいと考えているのかもしれねえや。どこで聞きつけたのか、おまえさんが龍馬から『将馬はおれの弟じゃきに』と言われているって話を仕入れたらしくてな。くっついてりゃ、連絡があるかもしれねえと思ったんだろう」

にやりと、いつもの不敵な笑いを浮かべる。

「まさか土佐新田藩の屋敷内で逢ったとは考えもしめえさ。しかし、龍馬が新田藩に姿を見せたって話も、どこかから洩れたみてえだな。新選組の隊士が二人、新田藩に潜入するらしいからよ」

「先程、沖田さんから伺いました。ゆえに、わたしと建は新田藩の潜入役を、外れてもいいのではないかと思いまして」

「その件は、見廻組の佐々木殿と話してみる。まだ潜りこむ段取りは調えていねえが、

新田藩の御用商人を見張るしかねえだろうぜ。祇園の石段下に薬種問屋と油問屋の見世があるだろ。見廻組の同心を張りつかせているが、これといった動きはなしよ。支店があちこちにあるらしくてな。いくら人手があっても足りねえや」

足音をとらえたのだろう、勝は話をやめた。ほどなく障子越しに声がかかる。

「失礼いたします」

「お姫さんかい。入りな」

勝の応えで、障子が開いた。

「先生。御城から使いが参りました」

一礼して顔をあげた美鈴の後ろに、さまざまな色に変化した紅葉が見えた。西陣織の着物姿と相まって、一幅の絵のように思えた。

同じことを感じたに違いない。

「お。いい〝絵〟だねえ」

勝が破顔した。

「写真に撮っておきてえや。なあ、将馬」

「はい」

答えながら頬が赤くなるのを止められない。勝のように思ったことを口にできたら

どれほど楽だろう。口下手な将馬は、女子が喜ぶようなことを言えなかった。が、美鈴はそれを必要としないのか、

「持ちあげても駄目ですよ。この出戻りのはねっかえりがと、思っていらっしゃるのはわかっていますから」

「わかってんなら、江戸に帰りな」

ぴしゃりと勝が言った。いかにもらしい言葉だった。

「京はお姫さんがいる場所じゃねえよ。魑魅魍魎が跋扈している町だからな。血腥いことこのうえない。その綺麗な花の貌と着物が、血で染まるのを見たくねえからよ。一日も早く帰るこった」

「御所には、お姫さまがいるではありませんか」

美鈴は気丈なところを見せた。

「島原や祇園には、別のお姫さまもおいでになります。女子だから江戸に帰れというのは、あまりにも考えが古すぎませんか。幕府内でも独特の意見をお持ちになっている勝先生のお言葉とは、とても思えません」

「新しい古ってやつよ」

勝は粋にかわそうとしたようだが、

「は？」
美鈴に一瞥を返されただけだった。
「さて、でかい雷が落ちる前に、おれは退散させてもらうよ。あとはおまえさんにまかせた」
そそくさと廊下に出て行った勝を、将馬は追いかける。
「すみませんでした」
「おまえさんが謝るこたぁねえよ。だれかが言ってやらねえとな。嫌われるのは慣れてるからよ。お姫さんもわかってるんだろうが、色々と案じられるんだろうぜ」
勝は意味ありげなことを言い、片手をあげて玄関に向かった。将馬は一礼したまま見送っている。
「いつまで頭をさげているのですか。勝先生はとうに門を出て行かれましたよ」
美鈴の尖った声に、将馬は微笑を向けた。
「案じておられるのだ」
「ええ、はい、わかっております。でも……あんな言い方をしなくたって」
きつく下唇を噛みしめる。そんな悔しげな表情さえもが、いとおしかった。危険だとわかっているのになお残るのは坂本龍馬のためか。その美しい眸が追いかけるのは、

自分ではない他の男か。

「そうそう、紅葉の簪ですが」

急に美鈴は話を変えた。

「祇園の石段下に、変わった簪を造ってくれる職人がいるとか。見世にも卸しているようですが、個人の注文にも応じてくれるらしいのです。将平が探って来たのですよ。まあ、あの子の場合、探るというよりは、興味があったから調べたという感じですけどね。試しに紅葉の簪を造ってみようと思い立ったらしくて、小間物屋を中心にあたってみたら、行き着いたようです」

「ちょうどいい。祇園には、新田藩の御用商人の見世もある。ついでに調べてみようではないか」

「せめて伝蔵さんの頼み事だけでも、早く片づけてあげたいですねえ」

と美鈴は庭の白木蓮や桂に目をやった。塀際にはひときわ大きな銀杏が植えられている。黄金色の葉もだいぶ散り始めていた。

「暮れ果つる秋の形見にしばし見む」

途中まで呟き、視線であとを将馬に振る。

「紅葉ちらすな木枯らしの風」

静かに受けた。
この時が、いつまでも続いてほしい。
将馬は、しばし傍らの女子と紅葉の美しさに魅入(みい)っていた。

第六章　紅葉賀（もみじのが）

一

五日後。

土佐新田藩の探索はいったん横に置き、新田藩出入りの御用商人を、急いで調べることになった。

まずは二軒の御用商人――薬種問屋と油問屋が見世を構えている華やかな町、祇園が探索場所に選ばれた。

祇園の石段を降りる右側には、獅子（しし）の像が設けられている。そして、石段を降りた道の両側には、二階建ての町屋が軒（のき）を連（つら）ねていた。左手前の番屋には立派な火の見櫓（やぐら）も見えている。

そろそろ四つ（午前十時）になる頃だろうか。彼方に山の稜線がくっきり見えるほどの晴天だったが、頬に吹きつける風はいちだんと冷たくなっていた。

将馬は、美鈴と将平を伴い、御用商人の見世ではなく、簪職人の小さな家の庭にいた。

幻の舞妓と芸妓が挿していたものと似ている簪を、職人の吉三が造っているという話を美鈴が得たからである。

（わたしは薬種問屋を見張りたいのだが）

などと思いつつも、将馬は庭の花木の手入れに努めていた。薬種問屋と油問屋の方にこれといった動きがないため、建と同役に見張りを頼み、今朝は花咲爺になっていた。

〝伝蔵さんは伏見の家の紅葉が散ったら江戸へ戻るとのこと。もし、おまえさまの考えどおり、幻の芸妓が伝蔵さんの想い人であったなら、必ず京のどこかにいるはずです。簪職人をあたってみましょう〟

という美鈴の申し出を受けて、見張り役のついでに足を向けていた。話を訊くだけのはずが、庭を見た将馬の提案で手入れを無料で引き受ける流れになっている。むろん商人魂を持つ御新造は不満だったろうが、反対はしなかった。

小さな家の庭ではあるが、松や梅、躑躅、紫陽花、紅葉、椿といったかなり多くの木が植えられている。四季折々に花を楽しめるよう主なりに考えたのかもしれない。種類は揃っていたが、手入れをする余裕がないのか。いささか雑然とした感じがするのはいなめなかった。

（なれど、これはこれで悪くない）

将馬は木に梯子を掛けては、剪定鋏だけでなく、ときには素手で手入れに勤しんでいた。清々しい晴天と相まって、心が穏やかになってくる。刀を使うよりは鋏の方がずっといいと思っていた。

「松の葉は指で少し梳いてやろう」

呟きながら、松の葉を指で調える。花木は一本一本が綺麗なだけでは駄目だ。庭全体を見たときに、均衡が取れているかどうかが重要になる。

「お比呂さんのこと、おまえさまはどう思っていますか」

不意に美鈴が訊いた。剪定して落ちた枝を拾ったり、雑草を抜いたりして、将馬の助手を務めている。将平は簪に興味があると言い、簪造りを営む吉三のそばに張り付いていた。

「青丹一族ではあるまいか」

推測を口にする。

「江戸にいたとき潜入した美濃の友木藩では、お比呂は藩主の愛妾をしていた。さまざまな話を得るには適役よ。そして、騒ぎのあとはすみやかに姿を消している。此度は新選組内部に入りこみ、攪乱する役目を与えられていたのかもしれぬ。まあ、これはそなたの機転によって、未然に防ぐことができたがな」

さりげなく称賛を与えていた。男だけの場所に若い女が投げこまれればどうなるか。隊士の間に諍いが生じて、刃傷沙汰が出来していた可能性もある。

美鈴が比呂と牢屋で起居をともにしたことにより、隊士は比呂に近づくことさえできなかった。送りこんだのが青丹一族だとすれば、思惑が外れた結果になっているのではないだろうか。

「話をしてみると、とても気だての良い女子なのです」

美鈴は雑草を抜く手を止め、将馬を見あげた。

「華道は心得があったようですが、茶の湯は初めてだったとか。わたしの指南を真剣に受けてくれました。たとえ青丹一族の配下だったとしても、なんとかお赦しいただけないでしょうか。正直に話をした暁には罪を減じる、あるいは解き放つといったことはできませんか」

自分に言われても困る話だったが、
「解き放てば一族が放っておくまい」
始末される懸念を告げた。
「たとえお比呂がなにも話さなかったとしてもだ、一族の頭目が信じるとは思えぬ。まだ二十一の若さだというのに」
そう言いかけて苦笑する。
「わたしと同い年だったな」
「はい。それだけに不憫でなりません。これはわたしの考えですが、一族としては近藤様の愛妾にしたかったのかもしれませんね。新選組の局長のそばにいれば、重要な話を得られますから」
「うむ」
「今日は二人の山同心を、お比呂の見張り役に付けました。貴重な人手を割かねばならぬのは、心苦しいところです。それもありましたので、早く伝蔵さんの頼み事を片付けられればと思いまして」
「〈はなさかや〉さん、おうすを点てましたきに、ひと休みしまひょ」
吉三の女房・貴栄が仕事場の障子を開け、縁側に出て来た。夫婦ともに四十前後で

はないだろうか。少し暖かくなってきたのを感じて障子を開けたに違いない。

「ありがとうございます。すぐに参りますので」

美鈴が如才なく受ける。主の吉三も将馬同様、寡黙なたちの男だった。その分、女房は愛想がよくなるのかもしれない。貴栄は人目を引くほどの美人ではないが、薄化粧を施した顔には、親しみやすい笑みを浮かべていた。京人独特の愛想笑いではないように感じられた。

「将平はんも、こちらへ」

と貴栄は振り返ったが、将平は吉三のそばに張りついている。簪を造る様子を無言で見つめていた。吉三もまたよけいな言葉を発しない。

〝やってみるか〟

というふうに仕草で示すと、将平はすぐに頷き返した。見ているうちにひらめくものがあったのか、木切れと道具を渡されたとたん、将平は彫り始める。

「いやぁ、驚きましたわ」

貴栄が小声で言った。縁側に腰かけた将馬と美鈴に、囁き声で続ける。

「うちの人、ふだんは絶対に道具を他人さんには、さわらせしまへんの。気むつかしいて、きしんどな人なんどすえ。それが、まあ、急にどうしたんでっしゃろ。お天道

さんがお月さんに変わらしまへんやろか」

わざとらしく空を見あげていた。「きしんど」とは、京ことばで気心労――気疲れするという意味だ。簪職人としての腕はいいのだろうが、よくいる職人気質の扱いにくい男なのかもしれなかった。

「弟はなにかを造るのが好きでして」

将馬は勧められるまま湯飲みを手に取る。先に飲み、毒味をするのが、もはやあたりまえになっていた。飲み終えたのを見て、美鈴もおうすを口に運んだ。

「あら、美味しい」

さも意外そうな声をあげた。

「京のお方は吝ん坊と聞いておりますが、てまえどものようなよろずやにまで、こちらでは上品のお茶を出してくださるんですね」

いささか率直すぎるのではないだろうか。

「美鈴」

将馬は窘めたが、貴栄は愉しげに笑った。

「かましまへん。正直な御新造はんどすなあ。はい。うちの人は、お茶にもうるそうおましてな。簪の出来が悪うなる言うて、安いお茶なんか飲ましまへんの。だからも

う仕方なく、ですわ」

軽く将馬の肩を叩く仕草が、親しみやすい江戸の下町の女房を思い出させた。また「お茶にも」と「も」をつけたあたりにも、貴栄の正直な心根が表れているように思えた。

「ちょちょっと手ぇ入れただけなのに、えらい変わりましてんな」

小さな庭をあらためて見やる。

「枝があっちゃこっちゃに、えらいはちかってましてん。それが、まあ、どうでっしゃろ。風情のある庭になりましたえ」

肩越しに振り返って、亭主に感想を求めた。

「あぁ」

ちらりと目をあげたのが精一杯の気持ちだろう。貴栄は役者まがいの仕草と表情で「見ましたやろ。あれや。きしんどな人でっさかい」と告げていた。将馬は美鈴と苦笑いを浮かべている。

「知らんでる間ぁに、紅葉も終わりやなあ」

貴栄の呟きで、美鈴は湯飲みを盆に戻した。

「紅葉で思い出しました。先日お話しいたしました紅葉の簪のことですが、伺いまし

たときには、造った憶えはあるけれど、どこの、なんという芸妓だったか憶えていない。そういうお返事でしたが」

「そや。うちの人、思い出しましてん」

貴栄が懐から紙片を取り出した。

「たぶんこのお人やないかって」

先斗町の置屋の芸妓、伊呂波。

「伊呂波というのが、権兵衛名なんですか」

将馬は名を見た時点で確信している。おそらくこの女子に間違いない。伏見の家の庭で紅から橙色、そして、最後には黄金色に染まる紅葉もまた伊呂波紅葉だ。伝蔵が逢いたいと思っているのは、伊呂波に違いない。

「たぶん、そうでっしゃろ。変わった権兵衛名をつける芸妓がおりますさかい。せやけど、伊呂波はそんなに変わってるとは思えまへんけどな」

「『ちりぬるを』より、よっぽどええわ」

ぼそっと吉三が言った。

「……」

将馬を含む三人は、同時に顔を見合わせ、同時に噴き出している。子がいないよう

に見える夫婦は、貴栄がひとりで喋り、時折、亭主が今のように合いの手を入れるのではないだろうか。

二人の平らかな暮らしぶりが、垣間見えたように思えた。

「絶妙ですね」

美鈴が言い、声をあげて笑った。

「てまえどもも、お二人のような夫婦になりたいと思います。それで、先程の話ですが」

さりげなく話を戻した。

「その伊呂波さんは、最近こちらにおいでになりましたか」

重要な問いを投げた。新選組の屯所に来たのが、この伊呂波であれば、一年前には生きていたことになる。しかし、知りたいのは伊呂波の現在だった。

「いえ、紅葉の簪をお渡ししたあとは、おいでにならしまへん」

「いつ簪を渡したのですか」

質問役は美鈴にまかせている。弟に目を向けると、将平はひたすらなにかを彫り続けていた。渡された材料は小さな木切れ。それをさらに小さくして、一心不乱になにかを彫っている。吉三は時々目を投げるのみ、特になにを言うでもなく、こちらもま

た自分の仕事に没頭していた。

「さあ、いつでしたやろ」

貴栄は亭主に答えを求めたが、小さく頭を振られて終わる。

「二年か三年ほど前だったかも、あ、そぅや、思い出したわ。確か御所で騒ぎがあった年や。そうそう、あの年の冬やったわ。紅葉がちょうど色づいた頃やった」

「元治元年（一八六四）の冬か」

将馬の言葉を、美鈴が継いだ。

「三年前ですね」

「紅葉の簪を渡したとき、確かこう言うてはりましたわ。これは『まねきの紅葉』なんですえ、と。福を招いてくれる伊呂波紅葉なんだとか」

「福を招く『まねきの紅葉』ですか。いいですねえ」

美鈴の呟きに、

「ええ腕しとるわ」

吉三の声が重なる。目は将平が彫りあげた二輪の小さな菊に向けられていた。簪にできるのかどうかはわからないが、ためしに渡された木切れから、見事な菊を生み出していた。

花びらのひとつひとつの、微細でやわらかな様子や、葉の尖った切りこみにいたるまで、丹念に彫り出している。木から生み出されたのを忘れてしまいそうなほどだった。色や質感までも、とらえられそうだった。

「ほんまや」

貴栄は将平の隣に行き、渡された菊をしみじみ眺めている。

「美やかな菊ですなぁ。今にも薫ってきそうやわ。将平はん、江戸で修業してはったんでっしゃろ」

「いえ、まあ、色々なものを造っていますが、簪は初めてです。あ、まだ簪にできるかどうかわかりませんけれど。先日、義姉上が活けた二輪の菊が、頭に残っていたものですから」

うつむいて頬を染める弟に代わって、将馬は応えた。

「とにかく造るのが好きなのです。寝るのも食べるのも忘れるほどで」

「おまえさま」

美鈴に腕を引かれて、庭の裏木戸を示される。そこには義弟の富沢大助が立っていた。

「ちょっと失礼します」

将馬は立ちあがって富沢のそばに行く。

二

「才谷様は昨夜、〈酢屋〉から〈近江屋〉に移った。襲われるのを懸念してのことやもしれぬ。〈近江屋〉も土佐藩邸の近くの見世ゆえ、いささかなりとも安心できるのではあるまいか」

富沢は才谷――坂本龍馬の近況を告げた。

〈酢屋〉とは、材木商の中川嘉兵衛の見世である。〈酢屋〉は高瀬川の舟入りに面しており、材木業の傍ら運送業も営んでいた。

龍馬は〈酢屋〉を海援隊の屯所のように使っているのだが、身の危険を感じたのかもしれない。事実、ここにきて新選組や見廻組の動きが活発になっていた。

〝龍馬を京から遁がせ〟

将馬は勝から、あらためて依頼を受けていた。龍馬の動向を知るべく、遣い手で口の堅い富沢に見守り役を頼んだのである。建は自分がと名乗り出たが、顔を知られすぎているため、見廻組にあまり顔を知られていない富沢を選んだのだった。

「土佐藩の中にも、才谷様をよく思わぬ者は多い。油断はできません」

将馬の呟きに、富沢は頷き返した。

「わかっている。なれど、才谷様はおおらかというのか、周囲を気にかけぬというのか。幕府のお尋ね者だというのに、まったく頓着なされている様子がない。実に堂々とあのあたりを歩いている。役人には顔を知られていないと、思うておられるのであろうか」

「わからぬ。わたしも富沢さんからの知らせを聞く度、奇妙な感じを覚えている。わざと目立つような動きをしているのではないか、とな、思うた次第よ」

「わざとではあるまい。ちと調べてみたのだが、中岡様も石川某の名で姿を見せているのだ。去年の制札騒ぎの折、捕らえられた土佐藩士がいたであろう」

「三条大橋で起きた騒ぎですね」

将馬は相槌を打つ。

慶応二年（一八六六）九月十二日の夜。土佐藩士の宮川助五郎（みやがわすけごろう）たちは、三条大橋に立てられていた長州藩批判の制札を破棄した。何度も制札を壊されていたため、また来るだろうと待ち伏せしていた新選組と乱闘になったのである。

捕らえられた宮川は重傷を負い、町奉行所の牢舎に入れられていたのだが、政権返

上後の時勢から、土佐藩に釈放の通告が出された。
宮川の身柄は土佐藩に引き渡されて、今は土佐藩の牢屋にいる。
「どうやら中岡様は、宮川助五郎の身柄を陸援隊に引き取りたいと考えておられるらしゅうてな。その相談をするために、坂本様のところへ行くやもしれぬ」
富沢は、優れた働きぶりを示した。龍馬を見張るだけでも、新選組や見廻組から疑惑の眼差しを向けられるかもしれない。一歩間違えば、富沢自身が詮議を受けかねない危険な見守り役である。
「かたじけない」
将馬はあらためて告げた。
「義理とはいえ身内になったのをこれ幸いと、無理なお願いをしました。これ以上の手助けは無用でござる。才谷様の見守り役はこれまでと……」
「水くさいことを言うな」
富沢は素早く遮る。
「頼りにしてくれたのが、わたしは嬉しくてならぬのだ。しかも見守る相手は、名を知られた志士ばかり。こちらから頼みたいほどよ」
「なれど」

「懸念は無用。危なくなったら逃げるさ。〈はなさかや〉は遁走屋も引き受けているからな。何度か手伝ったゆえ、コツは会得した。逃げ足の速さには自信があるぞ」

「富沢さん」

胸が熱くなりかけたが、

「それでは、お気持ちに甘えさせていただきます」

もう一度辞儀をするにとどめた。

「見廻組の諜吏、名は増次郎と申すらしいが、顔を見せているのは手下だけではない。与頭や配下が土佐藩邸の周辺に、頻々と姿を現しているのじゃ。まだ才谷様の居所は突き止められていないと思うが……時間の問題やもしれぬ」

富沢の不安はそのまま将馬の不安だった。

「才谷様に文を出したいのですが、今は控えた方がよいかもしれませんね。あるいはまず〈酢屋〉に届けてもらい、そこから〈近江屋〉に使いを出してもらうか」

と話していたとき、

「おう、建」

富沢が声をあげる。

「なにかあったのか」

すかさず将馬は問いかけた。建は薬種問屋の見張り役だが、油問屋の見張り役とも密に連絡を取り合っている。どちらかに異変が起きたときしか、持ち場を離れることはないはずだった。

「薬種問屋に、そら、例の下女。友木藩の台所に奉公していた眇（すがめ）の女が、現れたのさ。雇い入れられたらしゅうてな。台所で立ち働いておるわ」

「なに？」

将馬はいやな胸騒ぎを覚えた。江戸に見世のある扇屋〈三升屋〉の本店に、友木藩の藩主の愛妾だった比呂。そして、次は眇の女と、青丹一族の配下と思しき者が、立て続けに現れたことに対して強い疑問が湧いた。

「間違いないのか」

友に確かめている。

「女子の顔は忘れぬわ」

答えた後で自慢できない話だと思ったのか、

「また美鈴様やおまえの妹たちに、冷ややかな目を向けられそうだがな。気取（けど）られぬよう何度も確かめたゆえ間違いない。年は二十五、六。どこを見ているのかわからぬ目に、ちとそそられるわ。友木藩に奉公していた下女じゃ」

苦笑いしながら言い添えた。

「気に入らぬ」

将馬は呟いた。

「土佐新田藩の御用商人は四軒。茶問屋は栂尾、蠟燭問屋は西陣、薬種問屋と油問屋はここ祇園の石段下。おまけにお比呂が奉公していた扇屋〈三升屋〉にも見張りを立てねばならぬとあって、いやでも人手を割かれている。いざとなったとき、連中を捕らえられるかどうか。われらを攪乱する策ではあるまいか」

「振りまわしておいたその隙に、本隊が上様に一服盛る、か」

建の言葉が現実になるような気がした。向こうからはこちらの動きが、よく見えているのではないだろうか。青丹一族の本拠地がどこなのかはわからないが、少なくとも京においては後れを取っているように思えた。

「わたしも手伝うた方がいいか」

富沢が遠慮がちに訊いた。遣い手ゆえ、本当ならば青丹一族の探索に加わってほしいというのが本音だった。しかし、と、勝の頼み事がよぎる。

龍馬のことも案じられた。

「申し訳ありませんが、富沢さんには見守り役を続けていただきたいと思います」

悩みつつの言葉になっていた。

「わかった。では」

富沢が答えて、ひと足先に離れて行った。

「御陵衛士の伊東様から連絡はなし。青丹一族の潜伏場所としては、御所が最適なように思えなくもないのだがな。手がかりはつかめぬか」

独り言のような呟きが出る。建が悔しそうに唇を噛みしめた。

「すぐそこにいるような感じはするのだがな。即かず離れずの距離を取りながら、われらを見張っている。いやな気配だけは、ずっとあるのだが」

向けた視線の先に、美鈴が立っていた。

「あ、いや、今の話は例の一族のことでござる。決して美鈴様が、いやな気配だと言うたわけでは」

「わかっていますよ。そんなふうに言い訳されると、逆に勘繰ってしまうじゃありませんか。もしや、わたしの悪口を言っていたんじゃないかって」

「違いまする」

畏まった建に、美鈴は笑顔を返した。

「生真面目な顔をして。伝蔵さんの件ですが、先斗町の芸妓の伊呂波さんが、おそら

く尋ね人ではないでしょうか。まあ、人捜しを頼まれたわけではありませんけどね。預けられた小箱を、伊呂波さんにお届けしてみましょうか」

「先斗町に芸妓の伊呂波さん。なにやら艶っぽい話ですな」

建は早くも相好を崩している。おれがあの箱を届けると言いかねない様子だった。

「伝蔵さんの件は、わたしと将平が引き受けました」

機先を制するように美鈴が言った。

「いちおう〈はなさかや〉の主殿の、意見を伺いたかったのです。伝蔵さんから預けられた小箱を、お届けするということで宜しいですか」

「主殿」

と友が肱で小突いた。からかい半分なのはわかっているので相手にしない。

「言うまでもないことだとは思うが、小箱を渡す前に、伏見の家の話を出してみた方がよかろうな。江戸から訪ねて来た男に心当たりはあるか。舞妓だったとき、相惚れになった男はいるか。かなり踏みこむ話になるが、確かめたうえであれば、小箱を渡してもよいのではないか」

将馬はあくまでも慎重だった。小箱になにが入っているかわからない以上、下手な相手には渡せない。伝蔵もそう考えたため、あの家に自分を訪ねて来た者と言ったの

ではないだろうか。

「わかりました。仰せに従います」

殊勝に答えて、美鈴は目をあげた。

「おまえさまは御役目にお戻りください。将平が菊の簪を仕上げたいと言うておりますので、わたしは今しばらくここにおります」

そう言われても伏見まで二人きりというわけにはいかなかった。

「あとで迎えに来るゆえ、それまで絶対に動いてはならぬ。ああ、それから人の出入りが妙に多い家や、不審な気配がある見世など、心当たりがないか念のために訊いてみてくれぬか」

「承知いたしました」

「頼む」

言い置いて、将馬は建とともに薬種問屋の見張り役に戻る。

晴れわたった青空に鳶だろうか。

（坂本様）

なぜか龍馬を思い出している。

気持ちよさそうに、鳥は大空を舞っていた。

三

翌日の夕刻。

将馬は、ひとりで醤油問屋〈近江屋〉の近くの料理屋にいた。この後、勝と富沢が来ることになっている。いやな胸騒ぎがおさまらない。同じ気持ちだったのだろう、連絡をくれた勝が指定した見世の二階で待っていた。

河原町通に面した〈近江屋〉の二代目・新助は、二十二歳で稼業を継ぎ、土佐藩の御用商人になっている。六年ほど前に女房のすみと所帯を持ち、奉公人を使いながら、二人で見世を切り盛りしていた。

この〈近江屋〉のわずか三間（五百四十センチ）ほど先に土佐藩邸がある。本当に目と鼻の距離だった。三条通と四条通に挟まれたこの道には、彦根藩の藩邸も立ち並んでいる。龍馬が屯所のように使っている〈酢屋〉は、彦根藩邸の先だった。どちらの見世も土佐藩邸に近い。なにかあればすぐに駆けこめると思っているのだろう。

龍馬の心細さを表すような潜伏先になっていた。

「暮れ果つる秋の形見にしばし見む紅葉ちらすな木枯らしの風、か」

謳うように呟いた。二階の窓から見えるのは、夕闇に染まった中に揺れる紅葉の葉だった。斜め向かいの土佐藩邸の庭に植えられた紅葉である。ほとんどが散ってしまい、残っているのは最後の一葉のみ。それが吹きすさぶ風を受けて、頼りなさげに揺れていた。

階段をあがって来る足音を聞き、将馬は窓を閉め、下座に腰をおろした。ほどなく勝が現れる。いつものように「いよっ」と片手をあげた後、向かいに座った。

「寒いなあ、京の冬は本当に寒い」

手焙りに冷えきった両手をかざして温め始める。あがって来る前に頼んだのか、すぐに膳が運ばれて来た。

「おれはぬるめの燗が好きなんだが、こう寒くっちゃ我慢できねえからよ。最初は熱燗を頼んどいたぜ。肴は適当に見繕ってくれと言っておいた」

「お気遣い、いたみいります」

将馬は銚子を取って、勝の杯に注いだ。恩師が注ぐ仕草を見せたが、頭を振り、手酌で注いだ。

「屯所の花は、どうだい」

いつもの勝流の言葉が出る。花とは美鈴や比呂のことだろう。

「今朝、屯所に行ってみましたが、相変わらず茶の湯の稽古をしていました。あらたな話は出ていないようです」

「喋らねえよ、あの女は」

勝は膳の漬物をつまみ、食えと勧めた。将馬の毒味を待つこともなく、酒も平気で口にしている。龍馬も細かい事柄に頓着しないが、恩師もまた同じように見えた。

「おれは青丹一族の配下だと思っているがね。新選組を探る役目と、引っ掻きまわす役目を仰せつかったんだろうぜ。ところが敵地で意外にも、お姫さんに手厚いもてなしを受けた。身に沁みているのかもしれねえなぁ」

しみじみした口調になっていた。

「あれがお姫さんの偉いとこだ。どんな身分の相手であろうとも、自分なりの礼儀を尽くす。気づかねえのは、鬼の副長と犬ぐれえのもんさ」

ふんと鼻で笑った。副長の土方に対して、冷ややかな気持ちをいだいているに違いない。

近藤は意外に親しみやすいが、策士で色男の土方は男、特に勝のような男には、嫌われやすいのかもしれなかった。

「青丹一族はどこにいるのか。まことに土佐新田藩の御用商人や、扇屋〈三升屋〉の

見世が隠れ家なのか。いまだにつかめていません。もしや、まったく見当違いのことをしているのではないかと、流石に不安が湧いています」

つい弱音を吐いていた。龍馬もそうだが、勝も巨きく包みこんでくれるような感じがある。江戸護衛隊の頭取役は勝だが、青丹一族の探索に関して、現場の指揮を執るのは将馬だ。焦りと不安が湧いてくるのを止められない。

「年相応の言葉を聞いて、おれはほっとしたよ」

勝は笑って、言った。

「おまえさんに任せりゃ、なんでも解決できると上は簡単に考えてやがる。そうはいくかってんだ。なんつっても謀はなまものだからよ」

「確かに」

将馬は苦笑している。謀がなまもの云々は、かつて自分が告げた言葉だった。目を合わせて笑い合うだけで、不思議と気持ちが落ち着いてくる。

「目の付け所はいいと思うぜ」

さらに勝は続ける。

「あともう一か所、潜伏するとすりゃ御所だ。だだっ広えから隠れやすい。しかし、おれだったら市井に隠れ家を置くよ。街中の話を得るためにも、その方がいいじゃね

えか。なにかあったときに逃げこむ場所として、御所も確保してあるかもしれねえがな。いまや御所も安穏としていられるところじゃねえ。新選組であれば、ずかずかと入りこむぜ」

その言葉で不安はほとんど消えていた。まだ確信は持てない。が、〈三升屋〉か土佐新田藩の御用商人の見世が、青丹一族の隠れ家である可能性は高いと思った。

「引き続き張りこみます」

酒を注ぎ、訊いた。

「二条城の様子はいかがですか」

「奇妙な噂が広まってるよ」

勝は応えた。

「旗本に殺められた上様の懐刀・原市之進こそが、青丹一族の頭目だった、とな。まことしやかに囁かれてる」

酒を飲み、続ける。

「なにかと邪魔だった前薩摩藩主と、十四代将軍家茂公を闇に葬ったのは、原市之進に違いない。用無しになった青丹一族を始末しようとしたため、今度は上様と、上様の後押しをしていた孝明天皇がお命を狙われた、とね。やけに詳しいのが、おれは気

に入らねえのさ」

「……」

将馬は小さく身震いする。噂を広めたのは『慶花』ではないのか。陰の黒幕の役目を原市之進に押しつけ、素知らぬ顔を決めこむつもりではないのか。

「死人に口なしですか」

「そんなところだろうぜ。おれが思うにご老中の板倉周防守様は、おそらく真実を知らねえんだろう。『早う青丹一族を捕らえよ』と、連日連夜、矢のような催促だ。すべての悪行は原市之進の仕業って流れができたからかもしれねえな。前は我関せずを決めこんでいた他の老中たちも追随し始めた」

「やはり、以前は一族の探索を渋るご老中や幕臣がいたのですね」

確認するような問いになっていた。友木藩の薬草園を調べる際、出張って来るはずの大目付が、姿を見せなかった経緯がある。上役の根岸佐平次が代わりに出張ったあれが、あのときの幕臣の態度だったのではないか。

「仰せのとおりさ。巧みに流れを見る時勢派が、それっとばかりに口添えし始めた。原市之進が真の黒幕だと広めたとしてもだ、その話を疑うやつはいるからな。不審死が三人も続いた裏に暗殺話ありってのは、早く消したいんだろうぜ。やいのやいのと、

まあ、うるせえったらねえよ」

目をあげて、告げた。

「江戸からあらたに探索隊を派遣するとも聞いた。要は江戸護衛隊ならぬ、京都護衛隊の増員よ。人手が増えるのはいいが、そうなりゃ騒ぎも増える。さっさと片付けるがよしなんだがねえ」

ふう、と、吐息をついた。

「今のままいけば、上方で反幕府派と一戦ってことになるだろうな。上様はここで幕府の力を見せつけておかなければならぬと息巻いておられる。側近もまた『そうだ、そうだ』と煽るばかりよ。京の民が巻き添えになることなんか、だれも考えちゃいねえ」

ふたたび目をあげる。

「おれたちが、考えるしかねえだろうな」

民を京から遁がす策をよ。

言葉にされなかった部分も、将馬には理解できた。勝と龍馬、そして、中岡たちには私がない。

想うのは民のことだけだった。

四

「反幕府派が、派手な紅葉賀（もみじのが）を繰り広げる前に、なんとかして京の民を遁がさなきゃならねえ。まあ、才谷様と同じく京の民も、素直に遁げるとは思えねえがよ」

勝の皮肉めいた口調と苦笑いに、将馬は問いを返した。

「才谷様は、短筒を携えておられるのですか」

「わからねえ。風邪をひいたってのは、文に書かれていた。薬を届けてやったがね。今は〈近江屋〉の土蔵にいるようだが、寒くてたまらねえんだろ。母屋に移ろうかと思っている、なんてことまで書かれていたよ」

「土蔵にいる方が良いように思えます。〈近江屋〉の家の図絵を、奉行所は手に入れているかもしれません。御用改めが執り行われた場合、土蔵にいればそれがわかるのではないでしょうか。主たちが母屋で時を稼いでくれている間に裏から逃げる。まあ、裏木戸も張りこまれていたら、御用となってしまうでしょうが」

将馬の答えが終わらないうちに、廊下で声がひびいた。

「失礼します」

「おう、入りな」
答えの後、富沢が入って来る。富沢が将馬の妹と祝言をあげたとき、勝も招んでいたが、座敷で相対したのは初めてかもしれない。目を合わせないようにして、将馬の斜め後ろに座した。
「ご苦労さん、外は寒かっただろ。そんなとこにいねえで、そら、こっちに来な。顔を合わせるのは、おまえさんの祝言のとき以来じゃねえか」
気さくな勝の言葉を受け、将馬は自分の席を富沢に勧めた。
「富沢さん、こちらへどうぞ」
「いや、わたしは」
と恐縮していたが、
「おれが嫌いなのかい」
勝に言われて、富沢は吃驚したように顔をあげる。
「とんでもない」
「そりゃよかった。嫌われ役は慣れてるが、たまにはおれと酒を酌み交わしたいってやつと飲みてえからな。ささ、そこに座れ。将馬が座布団をあったためておいたからよ。多少はあったけえぞ」

ふたたび勧められて、富沢は席を移った。生真面目な気質ゆえ、なかなか寛ぐことまではできまい。それでも勝に酒を注いでもらい、嬉しそうに杯を空けた。

「才谷梅太郎の様子はどうだい」

勝が変名を口にする。

「今日は何度かお姿を拝見いたしました。〈近江屋〉に潜んでいるのではないかと思います。それから見廻組の配下が、いつものように参りました」

答えた富沢を、将馬は継いだ。

「先生。なぜ、才谷様は土佐藩邸に入らないのですか」

消えない疑問をぶつける。龍馬の動きを聞くにつけ、胸に湧く疑問だった。新田藩で起きた毒殺騒ぎを懸念するがゆえだろうか。

「あいつは、土佐藩邸に入ることを望んだようだが拒まれたとか。脱藩の罪を赦されたのが、今年の四月だからな。流石にまだ藩邸に出入りするのは早すぎると判断されたのかもしれねえや」

「連絡はついているのですか？」

と富沢は〈近江屋〉の方角を顎で指した。

「ついてるさ。今も将馬と話していたんだが、何度か文のやりとりをしてる。早く京

から遁げるよう再三再四、勧めたんだがね。『危ないのは勝先生の方ぜよ』という返事を寄越したよ。〈近江屋〉は土佐藩邸の近くだからかもしれねえな。危険は察しているだろうが、なんとかなると思っているんだろうぜ」

「先程も言いましたが、時々出て来ます」

富沢は言った。

「どうやら隣家の〈大和屋〉が、土佐藩の大目付との連絡場所になっているようです。よく隣家に足を運んでいます」

「大目付の某だったか忘れたが、取り持ち役を担ってくれているとか。才谷梅太郎に力添えしてくれる上級藩士なんだろう。今のうちに遁げるのが得策よ。それで、将馬」

勝はいったん言葉を切って、声をひそめた。

「当人にその気はないようだが、段取りを頭に入れておきたい。おまえさん、どうやって遁がすつもりなんだい」

にやにやしている。遁がす策を聞くのが楽しみなようだった。

「〈近江屋〉は醤油問屋、大きな醤油樽があるではありませんか」

将馬も小声で応じた。

「なるほど」
勝はぽんと膝を打つ。
「醤油樽に隠れてもらい、運び出すって策か。ということはだ。此度は腕のいいからくり師の出番はないかもしれねえな」
「はい。その醤油樽をいったん〈酢屋〉に運び入れます。〈酢屋〉は材木業の傍ら運送業も営んでおりますので、船を持っております。醤油樽を船に積みこみ、外海に出れば」
「無事、荷物は目的地へ」
今度は富沢がぽんと膝を叩いた。
「名案だ」
少し酒がまわってきたのか、仲間うちの言動になっている。
「問題は荷物が、その気にならぬことです。今なら間に合うかもしれませんが……なにを考えておられるのやら。死地を潜り抜けて来た自信が、余裕のある行動を取らせるのかもしれませんね。才谷様は運が強いですから」
「とはいえ、此度は傍目から見ても危険だとわかる。見廻組の配下や諜吏に出くわす度、わたしは首筋の毛が逆立つ思いだ。才谷様には、わたしの役目を務めてもらうの

が得策やもしれぬな。才谷様の見張りを才谷様が務めれば、遁走屋の申し出をすぐさま受けるやもしれぬ」

富沢の冗談に、苦笑いを返した。

「そうなれば、あとは早い。このあたりの見世は、才谷様のお味方ですので。要はご本人次第です」

「なにもかもうまくいきすぎて、逆に鈍くなっているのかもしれねえな。だれがなにを言っても、才谷梅太郎は聞くまいさ。行きたいときに行きたいところへ行く。それが、おれとあいつの生き方だからよ」

ぽつりと言い、勝は宙を見やった。

「胸騒ぎがおさまらねえや」

「わたしには、才谷様が、わざと目立つような動きをしているように思えてなりません。なぜ、と今も思います。無防備に身を曝しているのか、と」

「大政奉還が成されたからな。大きな仕事をやり終えた満足感があるんだろう。大政奉還の立役者だ。まさか、おれを殺すまいと、たかをくくっているのかもしれねえ」

不意に勝は立ちあがる。

「ちょいと用足しだ。ついでに酒を頼んでこよう。腹は減ってねえかい。なんなら茶

漬けでも用意させるぜ」
「わたしはまだ酒を楽しみたいと思います」
将馬はちらりと富沢を見る。
「右に同じです」
「わかった」
勝は障子を閉めて、階下に降りて行った。当然のことながら〈はなさかや〉のことが気になる。
「話は変わるが、小箱の件はどうなった？　祇園の簪職人は、紅葉の簪を頼んだ女子を思い出したのか」
富沢が口火を切る。昨日、富沢は美鈴が来る前に立ち去っていた。先斗町の置屋に籍を置く芸妓・伊呂波の名がわかったことは、まだ伝えていなかった。
それを簡潔に説明した後、
「今日、同役のだれかが先斗町に行っていると思います。置屋がどれぐらいあるのかわかりませんが、伝蔵さんの想いが届くのを祈るばかりです」
将馬は答えた。
「今の説明で合点がいった。ここへ来る前に新選組の屯所へ顔を出してみたのだが、

美鈴様のもとには、すでに知らせが届いていたらしゅうてな。伊呂波の件については、いまだ連絡がついていない由。伊呂波は昨日、母親と一緒に湯治に出かけてしもうたとか」

「擦れ違いですか」

「うむ。とりあえずは伝蔵さんに知らせると言うておられた」

「伏見の家の紅葉が散らない限り、伝蔵さんは京にいると思いますが……もしかすると、毎日、見に来ているのかもしれませんね」

「将平のことだが、美鈴様によると、祇園の簪職人のもとにまだ通うているとか」

富沢の言葉に頷き返した。

「簪をいくつか仕上げたいようです。ご存じのとおり、弟は一度凝り出すとやめられないたちですから」

「その将平からも知らせがあったらしい。祇園に浪士や商人の出入りが多い小さな古寺があるそうだ。将平が近隣の者にそれとなく聞いたところ、去年、住職が死んでしまい、今は主がいないそうな。それなのに」

「人の出入りが多い」

将馬は早口で継いだ。それだと思い、胸がどきどきしてきた。

「もしかすると、一族の隠れ家か、あるいは抜け道が続いている先か。将平のお手柄かもしれませんね。さっそく調べてみます」
「それから」
と富沢は、なにか言いかけて黙りこむ。話すのを躊躇っているのが見て取れた。
「他にもなにか？」
「いや、たいしたことでは……江戸の佳也から伏見の家に文が届いてな。美鈴様から渡されたのだ」
うつむいてまた口ごもる。
「佳也がどうかしたのですか」
「その……子ができたらしいと」
うつむいたまま、消え入りそうな声で言った。
「え？」
将馬は訊き返している。
「今なんと？　わたしは、もしや、伯父になるのですか？」
「さよう」
そのときだけ富沢は顔をあげた。照れくささと誇らしさが、ないまぜになったよう

な、いい表情をしていた。

「それは目出度い。祝い酒だ。今宵は飲みましょう」

将馬も珍しく気分が昂揚するのを覚えた。どんなときであろうとも、新しい命は生まれる。大戦の気配があるからこそ、喜びもまた大きくなる。

「はじめは、やはり、男がいいですね」

将馬の言葉に、富沢は小さく頭を振る。

「母子ともに元気であれば、どちらでもよい」

「すでに立派な父親の顔をしてますよ、富沢さん」

自然に笑みがこぼれている。

血腥い風がいっときおさまって、清風が吹いたように感じた。

五

新しく生まれる命もあれば、喪われる命もある。

慶応三年（一八六七）十一月十五日。

その日は、朝から霙まじりの冷たい雨が降っていた。道はぬかるみ、傘を持つ手も

凍えそうになるほどだった。将馬は昼から夜にかけて、祇園の薬種問屋を見張り、九つ（午前零時）の鐘が鳴り終わる頃、盟友や同役たちとともに、不動堂村の屯所に戻って来た。

「局長も副長もおいでにならぬと言うたではないか。帰れ」

門前で小さな騒ぎが起きていた。

「裏切り者めが、離反者は中へは入れられぬ」

「きさま、土佐の浪士どもと会うているようではないか」

続いた声に、

「わしは御陵衛士の伊東甲子太郎ぞ」

怒鳴りつけるような大声がひびいた。

「御所よりお許しを得て、御役目を務めておる。新選組から離反したのは、前天皇（さきのみかど）の御霊をお慰めしたいがゆえの仕儀。裏切り者呼ばわれされる憶えはない」

伊東の他に供らしき二人の下士が見えた。門前に掲げられた提灯（ちょうちん）の明かりが、うすぼんやりと幾つかの人影を浮かびあがらせている。朝から降り続いていた冷たい雨は、いっときやんでいた。が、立っているだけで歯の根が合わなくなりそうなほど寒い。

「先に中へ戻ってくれ」
将馬は建たちに言い置いて、人影に歩み寄る。
「伊東さん」
声で察したのだろう、
「お」
伊東の強張っていた顔に、やわらかな笑みが滲んだ。
「佐倉さん。ちょうどよかった」
仕草で離れた場所を示した。潜り戸から中に入って行く建たちと別れて、将馬は伊東のもとに駆け寄る。あまり期待はしていなかったが、もしや禁裏に潜入した青丹一族のことがわかったのだろうか。
「御所でなにかあったのですか」
将馬は、囁き声で訊いた。伊東の供をして来た二人は、少し離れた場所に立っている。新選組を警戒しているのか、門の方を睨みつけていた。
「いや、青丹一族のことではない、才谷梅太郎殿のことよ」
伊東は言った。彼の者の口から龍馬の変名が出たのを意外に思うのと同時に、強い警戒心が湧いた。将馬が土佐藩士と知己であるのを知っているのだろうか。答えに窮

して怪訝な眼差しを返した。

「案ずるな」

伊東は軽く将馬の肩を叩いた。

「おぬしが、才谷殿と海軍操練所で一緒に学んだ話は存じておる。剣呑な噂を耳にしたのじゃ。ゆえに気をつけるよう才谷殿にも警告したのだが」

門の方を振り返ってから、いっそう声をひそめて、告げる。

「暗殺の噂が出ておるのじゃ。命じられたのは新選組やもしれぬと思うてな。確かめに来た次第よ。案の定と言うべきか。局長も副長も留守だと言うではないか。これはもう間違いないと思うた次第よ」

聞いた瞬間、どきんっと心ノ臓が脈打った。数日前、勝に逢ったときにも同じ話が出た。遁げるように勧めたが、龍馬は応じていない。今日はまだ富沢から連絡は来ていないが、おそらく今も龍馬は〈近江屋〉にいるはずだ。

「今宵、なのですか」

恐怖に襲われて訊いた。これは伊東が仕掛けた罠かもしれない。将馬と龍馬の繋がりを知りたいがゆえの行動かもしれない。我が身に危険が及ぶかもしれないと思いながらも、訊かずにいられなかった。

「日時まではわからぬ。ただ近々なのではあるまいか。才谷殿を狙うているのは新選組だけではないからな。見廻組も頻々と姿を見せておるようじゃ。新選組は褒賞金目当てだろうが、見廻組は違う。幕府に仇なすお尋ね者を捕らえるべく、相当しつこく嗅ぎまわっているとか。才谷殿の居所は、ほぼ摑んでいる由」

一度言葉を切って、続ける。

「見廻組も馬鹿ではない。居所を摑んだとは、敢えて言わぬがな。わしも才谷殿の居所を知っておるぐらいじゃ。役人どもにも洩れるであろうさ」

「伊東さんは……わざわざその話をするために？」

将馬は疑惑まじりの問いを返した。伊東の真意を、はかりかねていた。なぜ、自分のところへ来たのだろうか。その目的はなんなのか。

「まあ、それだけではないのだが」

おい、と、伊東は供のひとりに呼びかける。下士が差し出した風呂敷包みを、いったん地面に置いた。屈みこんで風呂敷を解く。

「嵯峨菊ですか」

とたんに将馬は破顔していた。屈みこんで嵯峨菊が植えられた植木鉢を見やる。暗くて色まではわからないが、姿からして御所紅と呼ばれる種ではないかと思った。花

弁が細く華奢な印象を受ける菊だ。

「貴公は花好きと言うていたゆえ、見るだけではのうて欲しいのではないかと思うてな。頼みこんで、ひと鉢、貰い受けた次第よ」

屈みこんだ姿勢のまま、伊東は将馬と目を合わせている。話の流れからして見返りを求めているのは間違いない。

「引き替えに、なにをお望みですか」

率直に訊いた。

「おぬしは、勝先生と子弟関係にあるとか」

貴公がおぬしに変わっている。

「は、い」

仕方なく応えた。

「わしを勝先生に紹介してくれぬか。かねてより、お目にかかりたいと思うていたのじゃ。おぬしに迷惑はかけぬ。勝先生にとっても悪い話ではないと、わしは考えておる。朝廷に親しい御陵衛士と知己になっておくのも、よいのではあるまいか」

一理あるかもしれない。青丹一族が潜入しているかどうか、勝が動けば伊東も本腰を入れざるをえなくなるだろう。

「わかりました」
将馬は立ちあがって告げた。
「応と仰られるかはわかりませんが、先生にお話しだけはしてみます」
「かたじけない」
立ちあがった伊東に、
「ただし」
覆い被せるように言った。
「この嵯峨菊は、お返しいたします。賄賂や袖の下の類は受け取らぬよう、常日頃から先生に厳命されておりますので」
偽りだったが、かまわず申し渡した。勝はあたりまえのように賄賂や袖の下を受け取る。それを活動資金や困窮している者に用立てたりしていた。
「堅いことを言うでない。お近づきの印よ。第一これは袖の下などではないぞ。これから盟友になるであろうわれらの、門出を祝う花じゃ」
「なれど」
「将馬」
建が潜り戸から顔を覗かせた。

「来てくれ」
　短く告げるや、すぐに顔を引っこめる。
「取次の件に関しましては、承知いたしました。さらに才谷様の件も、わざわざお知らせいただきまして恐悦至極に存じます。それでは失礼いたします」
　将馬は丁重に言い、潜り戸から中へ入った。
「牢屋だ、将馬」
　建は早くも走り出している。闇の中、石燈籠に灯された明かりが、広い庭を陽炎のように照らしていた。望月のはずだが月は出ていない。吹きすさぶ風はまるで氷の刃のよう。耳が千切れそうだった。
「将馬が来た」
「道をあけてくれ」
　牢屋の前で待っていた仲間が、新選組の下士に脇へ退くよう仕草で示した。急いで地下の牢屋に足を向ける。
「すまぬ。わしが目を離した隙に」
　見張り役の仲間たちが、牢屋の中にいた。にわか茶室と化した牢屋の畳に、比呂が仰向けに倒れている。その側に青ざめた顔の美鈴が座していた。比呂の口から滴り落

ちた血が、ただならぬ異変を教えている。
将馬は牢屋の中に入って、比呂の傍らに膝を突いた。
「毒を服んだのか」
自問のような言葉が出る。
「はい。わたしが用足しに出たわずかな間でした。茶入れの抹茶に、毒が仕込まれていたのだと思います」
美鈴の説明を、格子越しに山同心のひとりが受けた。
「とたんに苦しみ始めた次第。慌てて中に入ったが……間に合わなんだわ」
「だめか？」
建が牢屋の格子戸のところに立ち、確認のような問いを投げた。将馬は小さく頭を振る。
「すでに事切れている」
「われらと同い年だというに」
友は言葉に詰まっていた。おそらく新選組の攪乱とともに、幹部や隊士を毒殺しろという密命を受けていたのではないだろうか。
覚悟の自死か、目的を果たさないことに焦れた仲間による毒殺か。あるいは……詮

議できないことに怒りを持つ新選組のだれかが、毒入りの茶にすり替えておいたのか。
真相はわからない。
「息を引き取る間際に『ありがとう』と言いました」
美鈴の頬を涙が伝い落ちた。弟がしつらえた床の間には、紅葉がさりげなく活けられている。
「最期の紅葉賀となったか」
「なんだ？」
急に建が振り向いた。
「どけ、どいてくれ」
憶えのある声は、富沢のものだった。仲間や隊士を掻き分けるようにして、こちらに来る。行灯（あんどん）の明かりのせいだろうか。富沢の顔もまた美鈴同様、真っ青に見えた。
「〈近江屋〉で騒ぎが」
あとは言葉が続かない。
「……」
将馬は頭が真っ白になる。
まさか、まさか、まさか!?

太陽のように明るい龍馬の笑顔が、脳裏に広がっていた。

六

翌十六日の未明。

騒ぎが起きた〈近江屋〉の前は、明け方近くであるにもかかわらず、土佐藩士によって固められていた。将馬は、富沢の知らせを受けたその足で駆けつけている。

「なにかの間違いだ、そんなわけがない、才谷様に限って死ぬわけがない、そうだ、死ぬわけがない」

着くまでの間、同じ言葉を呪文のように繰り返していた。〈近江屋〉の物々しい様子を見ても、現実のこととしてとらえられなかった。

悪夢の中にいるような気がした。

ふわふわと足もとが頼りない。大勢の藩士や野次馬が、白い息を吐いている。相変わらず寒いのだろうが、それさえ感じられなくなっていた。

(紅葉が)

一葉残っていた紅葉が散ったのだけは、やけにはっきりと見えた。

「中の様子を訊いてみる」
そう言った将馬の腕を、
「よせ」
建が素早く摑んだ。
「才谷様との繋がりを知られるのはまずい。新選組や見廻組に詮議されかねぬ。じきに勝先生が、おいでになるのではあるまいか。とにかく今は、迂闊に動かぬがよしよ」
「さよう」
富沢が頷いた。ここに来るまでの間、建が隣を走っていたのは知っていたが、富沢までいたのは見えていなかった。知らせを聞いた瞬間に、正常な思考を失ってしまったのかもしれない。
「だれが？」
将馬は富沢に迫った。
「だれなのですか？」
認めたくはない。が、万が一、龍馬が殺されたのだとしたら、下手人はだれなのか。気持ちをそこに持って行くことにより、必死に己を保とうとしていた。怒りや怨みを

掻き立てれば、平常心を取り戻せるのではないか。

無意識のうちにそんなことを、考えたのかもしれなかった。

「落ち着け」

ふたたび建が腕を握りしめた。

「そろそろ蕎麦屋が開く頃じゃ。少し早いが、なにか腹に入れよう。死にそうなほどに寒いからな。朝酒もいいかもしれぬ」

「かようなときに酒など」

訴えは無視された。建と富沢に引っ張られるようにして、近くの蕎麦屋に入る。騒ぎを知って早く開けたのかもしれない。夜明け前なのに、けっこう客が入っていた。

三人は片隅に陣取る。

「酒を頼む。熱燗でな」

建は言い、女将らしき中年女を見あげた。

「〈近江屋〉で捕り物があったらしいな。だれか捕らえられたのか」

さりげなく訊いた。

「へえ。ようわかりませんけど、えらいお侍さんが死んだとか。なんの騒ぎだろう思って戸を開けたとたん、何人かのお侍さんが入って来ましてな。お酒を用意してくれ

と言われましてん。それで仕方なく開けたんですわ」
「死んだ？」
将馬の頭には、その不吉な言葉だけが残った。
「だれが死んだのだ、殺めた下手人は……」
「将馬」
友に揺さぶられて口をつぐむ。女将は怪訝な目を投げながら台所に戻った。将馬はかっかとたぎるような思いを胸にかかえている。
（仇を討つ）
龍馬の死が事実であり、だれかに討たれたのであれば、その仇を取ろう。拳を握ったり開いたりして、懸命に激情を抑えていた。
「そろそろ屯所に帰ろうとしたときだ」
ぽつりと富沢が言った。
「何人かの侍が来た。知ってのとおり朝から霙まじりの雨だったではないか。月が出ていれば顔を見分けられたやもしれぬが、真っ暗でな。顔まではわからなんだ、が」
「が？」
将馬は鋭く訊き返した。

「だれであるか、わかったんですか」
「定かではない。なれど『頼もう』と言うた声に憶えがあった。さらに同じ男が『坂本先生が御在宿ならば、お目にかかりたい』とも言うた」
「だれです」
小声で訊いた。声をひそめるのだけは忘れなかった。
「おそらく……見廻組の者ではないかと。わたしは昨日、見廻組のひとりに思いきって声をかけたのだ。江戸護衛隊の者だと名乗ったうえで、青丹一族の話を出してな。手がかりはないかと探りを入れた次第よ」
「見廻組」
そう呟く自分の声が、やけに遠く感じられた。そう、見廻組は、頻々と〈近江屋〉の周辺を嗅ぎまわっていた。渡辺篤の諜吏に、将馬はあとを尾行けられたこともある。新選組も市中見廻りに出ていたようだが、龍馬暗殺を実行したのは、見廻組ではないだろうか。
将馬の尋常ならざる様子を案じたのか、
「もしかすると、勝先生が来ておられるやもしれぬ」
富沢が立ちあがる。

「わたしは〈近江屋〉の前にいるゆえ」
「わたしも」
立ちあがりかけた将馬を、建が押しとどめた。
「おまえはここにいろ。そのギラギラした殺気を、土佐藩士や浪士に気づかれたらなんとする。喧嘩を売られかねぬわ」
行ってくれと富沢に手で合図する。座り直したものの、将馬は落ち着かない。運ばれて来た酒に目もくれなかった。
「やはり、わたしも」
「酒じゃ」
建は湯飲みに酒を注ぎ、将馬の手にそれを握らせる。
「一気に飲め」
言われるまま飲んだ。建が注ぐ、将馬は飲む。
何度か繰り返したとき、
〝血で血を洗う戦は、しないがよしよ。同じ日本人同士で戦うのは無意味じゃきに。ここからが勝負じゃ〟
龍馬の〈声〉を聴いた、ように思えて立ちあがった。

「……」

振り返ってみたが、蕎麦屋のざわめきが聞こえるばかり。建に肩を叩かれて、また座り直した。

〝なにもできないっちゅうことはじゃ、なんでもできるっちゅうことよ。はじめはだれも同じじゃきに〟

また聴こえたが、今度は立ちあがらない。心の耳を澄ましていた。

〝船の操縦と一緒ぜよ。だれかに教えてもらわんことには、やりたくてもできんじゃろうが。おまんは今、学ぶときじゃ。操縦できるようになるまでは、あしにまかせちょきや〟

はい、おまかせいたします。

将馬は心の中で応える。注がれるまま酒を飲み続けていた。

〝寂しいかもしれんが、あしはいつでもおまんの裡にいる。そして、おまんはあしの裡におる。感じようと思えば、そら、そこにも〟

花木を指さす龍馬が視えた。

〝あの木にも、あの花にも、井戸の水にもあしはおる。身体は死んでも魂は死なんぜよ。おまんの裡で生き続けるぜよ〟

はい。

龍馬と話したときのように頷き返した。無意識のうちに着物の襟元にふれている。龍馬から貰った写真を懐紙に包み、自分で襟の内側に縫いつけていた。

〝天下万民のためぞ。一藩一個人の面子がなんなら。つまらん意地を張り合うたりするきに殺し合いにならあ。こまい話にこだわって日本人同士争うのは愚かなことじゃ。上様のご英断を活かさにゃならんきに〟

日本人同士争うのは愚かなこと。

その部分だけが繰り返し、ひびいた。仇討ちなんぞ、してはいかん。そう言われたように思えた。

〝おまんは、ちくと変わった人間のことを理解しつつ、普通でいられる。己を見失わんがよ。それがおまんの凄いところじゃ〟

買いかぶりすぎです。

将馬は小さく頭を振る。このまま幻の龍馬と話し続けたい。天下万民を助けることなど、自分にはできない。船の操縦をするのは無理だ。

絶望の淵に沈みかけたそのとき、

「おまえさま」

美鈴の声がひびいた。〈近江屋〉の様子を見に来たのかもしれない。富沢が隣に立っていた。

美しい眸を見た刹那、すっと頭が冷めた。

「大丈夫か？」

普通に訊いていた。本当に龍馬が殺められたのだとしたら、美鈴はどれほど悲しむだろう。守らなければと思った。

そうだ、美鈴を守れるのは自分しかいない。

「はい」

と美鈴は隣に座る。

重ねられた手から、将馬はそっと手を引いた。

（坂本様を遁がせなかった）

激しい自責の念が湧いていた。

己が許せなかった。

なんとかできたのではないか。もっと強く言っていれば、龍馬も遁げることを承諾したのではないだろうか。いったん遁げる策を提言すれば、受け入れたのではないだろうか。自分が駆けつけていれば助けられたのではないか。

後悔の念が、あとから、あとから、湧いてくる。隣に座った美鈴の体温を感じることにさえ、罪悪感を覚えた。

（なぜ、わたしではなく、坂本様だったのか）

紅葉賀は……静かに終わりを告げた。

第七章　龍馬の遺言

一

将馬が〈近江屋〉に入るのを許されたのは、騒ぎから五日後の夜だった。主夫婦と奉公人には、一刻（二時間）ほど座を外すよう知らせておいたので、見世の中はひっそりと静まり返っていた。

襲撃を受けたのは、坂本龍馬と中岡慎太郎の二人である。

龍馬の従者だった角力取り上がりの藤吉も巻き添えになっていた。龍馬はほぼ即死状態、中岡は十七日に絶命、藤吉もまた十七日に息を引き取っていた。

将馬は土佐藩邸に移された亡骸に、別れを告げることだけはできた。その後、執り行われた葬儀には陰ながら手を合わせ、野辺送りを済ませている。

（応対に出て来た藤吉のあとを追い、刺客たちはひそかに二階へあがった）

将馬は、騒ぎの起きた〈近江屋〉の玄関先から、梯子が掛けられた二階を見あげる。

欄干から滴り落ちた鮮血が、下の座敷の畳に残っていた。

「龍馬と中岡は二階にいた」

後ろにいた勝が言った。どうしても中の様子が見たいと師に頼み、段取りを調えてもらっていた。見世の入り口には、建や富沢を含めた五人の仲間が控えている。襲撃されたときの様子が知りたかったため、敢えて夜に訪れていた。

「主の新助は、一階の奥座敷で妻子と就寝中だったとか。二階のただならぬ気配を察したらしくてな。妻子を裏の物置に隠して、裏手から外に出た。あとは裏寺町に抜け、蛸薬師の小径から土佐藩邸にご注進よ」

勝は新助夫婦と当夜居合わせた峰吉の調書を手にしている。

峰吉は近くの書店〈菊屋〉の者だが、中岡に使いを頼まれて〈近江屋〉を訪れていた。さらに軍鶏を買って来いと龍馬に言われて買いに行き、危うく難を免れていた。

彼の者たちの調書を手に入れるのに手間取ってしまい、来るのが今夜になったという経緯がある。

「二階に行くぜ」

梯子をあがり始めた勝に、将馬も続いた。あがったところは、少し天井が高い座敷になっている。片側に八畳間がひと部屋、片側に二部屋という造りだった。ひと部屋の方に従者の藤吉がおり、龍馬は続き部屋の奥座敷で、中岡と話をしていた。

「暗えな。なにも見えねえや」

「明かりを点けます」

将馬は素早く行灯を点けた。真っ暗だった座敷に、眩ゆいほどの明かりが広がる。闇に慣れた目にとって明かりは、なによりの助けになるが……壁や畳、天井に四散した血を見て、二人はしばし立ちつくしていた。

「どこもかしこも血まみれじゃねえか」

勝が、吐息まじりに呟いた。特に龍馬と中岡がいた奥の八畳間がひどい。小さな床の間に掛けられた寒椿と白梅図の掛け軸にも、血が飛び散っている。

「その掛け軸は、龍馬の知り合いの文人志士が、騒ぎの起きた十五日に持って来たらしい。中岡と文人志士を含めた三人で観賞したらしいぜ。寒椿と白梅が凄惨な騒ぎの目撃者ってわけだ」

勝は行灯の近くに膝を突き、調書を広げていた。

「中岡は窓から屋根に這い出たようだな。助けを求めるためだろう。ところが、だれ

も気づかない。そうこうしているうちに気を失った」

「坂本様は、欄干の近くに斃れていた」

将馬は小声で継いだ。調書にはざっと目を通している。龍馬は刺客が立ち去った後、二階の欄干にもたれかかるようにして、階下の新助に助けを求めたに違いない。そのとき欄干から滴り落ちた血が、階下の畳に残った。

「わたしの胸には二つの『なぜ？』があります」

考えながら将馬は言った。

「なぜ、坂本様は目立つような動きをしていたのか。なぜ、坂本様と中岡様は、ほとんど反撃できなかったのか」

龍馬は江戸の千葉道場で北辰一刀流を学び、短筒を常に携えていた。剣の修行をし、北辰一刀流の槍の免許を受けていた。むろん剣もかなり遣えただろう。中岡は免許こそ受けていないものの、龍馬同様、何度も修羅場をくぐりぬけて来たことから、むしろ実戦に強かったのではないだろうか。

不意を衝かれたとはいえ、らしからぬ戦いぶりが引っかかっていた。

「後者はおれもちょいと気になっているのさ」

勝が同意した。寒かったのか、八畳間の襖を閉める。座敷は当初、龍馬と中岡が話

をしていたときの状態になっていた。

臆するふうもなく座した勝に倣い、将馬も腰をおろした。

「知ってのとおり、龍馬は〈寺田屋〉の騒ぎの折、両手の親指に怪我をした。その療治を兼ねて、妻女と一緒に薩摩へ旅に出ている。指は動かしにくかったかもしれねえが、中岡もいたからな」

勝は言葉を切って、将馬を見た。

「一服盛られていた、なんてことは考えられねえかい」

自問のような問いを投げた。互いの頭にあるのは、そう、忌まわしい毒薬使いの一族、青丹一族だ。

「ありうることだと思います」

将馬は小さく頷き返した。

「なれど致死量を井戸水に混ぜれば、新助夫婦も死んでいたでしょう。井戸水ではないかもしれません。土佐新田藩の例もありますので、酒屋を調べてみた方がいいかもしれませんね。坂本様が生き返るわけではありませんが、青丹一族を追う手がかりになるかもしれませぬゆえ」

「上田糸江はいまだ現れずか」

と勝は腕組みする。

「土佐新田藩の御用商人が四軒、さらに扇屋の〈三升屋〉、それに加えて怪しい寺ときた。六か所に江戸護衛隊を配しているが、人手が足りねえからよ。いっせいに御用改めをするのはむずかしいな」

糸江が青丹一族の頭目であるかどうかはわからない。が、中途半端な御用改めを行えば、また逃げられてしまうのは間違いなかった。絞りこまないことには、少ない人員を活かせない。

「せめて二か所に絞りこめれば、新選組に合力を頼めるのですが」

慥かな話ではない状態で依頼するのは憚られた。力添えを約束してくれた沖田は、この寒さがこたえているに違いない。また臥せっていた。確実な話になったときに頼むのが得策ではないだろうか。

（わたしも塩梅がいいとは言えぬな）

将馬は胸がむかむかしてくるのを感じていた。惨劇の場にいるからだろうか。携えていた竹筒の水を飲んだ。

「毒味役を務められるほどの舌を持っているってのによ。用意がいいじゃねえか」

勝が唇をゆがめる。

「はい。出先では、なるべく水や茶を飲まないようにしています。ふだんは大丈夫なのですが、酒を飲んだ後は舌が鈍りますので」
「違えねえや。おれにもくれねえかい」
差し出された手に竹筒を渡した。
「そうそう、毒味の話で思い出したがよ。実は板倉様から、おまえさんを上様の毒味役に召しかかえたいという要請を受けているのさ。おれは冗談じゃねえと思い、返事を引き延ばしている。毒味役なんぞ、お迎えの近い小普請組の年寄りにでも務めさせりゃいい話だ。おれの大事な教え子に、つまらねえ役目をさせるなと思っているんだが、おまえさんはどうしたいね？」
「お断りいたしたく思います」
きっぱり答えた。
「そうだろう、命がいくつあっても足りねえや。よし、おれにまかせときな。うまくやっとくからよ」
「はい」
答えた瞬間、胸の奥から熱いものがこみあげてくる。こぼれ落ちそうになった涙を、またたきして懸命に止めた。

表情を見て気づいたのだろう、
「龍馬のことを思い出しちまうなあ」
勝がしみじみ呟いた。
「はい。坂本様も先生と似たようなことを言いました」
涙をこらえながら告げる。
〝船の操縦と一緒ぜよ。だれかに教えてもらわんことには、やりたくてもできんじゃろうが。おまんは今、学ぶときじゃ。操縦できるようになるまでは、あしにまかせちよきや〟
二度と龍馬の声は聞けない。まかせちょきや、と言ったではないか。それなのに、と怨みがましい思いまで湧いてくる。
「仇を討とうなんて思うんじゃねえよ」
勝が静かに言った。思いもかけず、やさしい声だった。
「おれは見廻組が下手人だと思っているが、与頭たちは御役目をこなしただけだ。それに龍馬は京都奉行所の捕り手を二人、殺めている。お尋ね者だからな。いや、もちろんおれだって頭にくるが」
吐息をついて、続けた。

「仇を討ったところで死んだ者は戻っちゃこねえ。龍馬も喜ばねえだろう。同じ日本人同士が争うのを、あいつはなにより嫌っていたからな」

「わかっています。仇討ちはしません。何度も坂本様の〈声〉を聴いたように思ったのですが、それは土佐新田藩でお目にかかったときにした話なのです。そのときの話を思い出しているだけで、坂本様の〈声〉が聴こえているわけじゃない」

とりとめのない話をしていると思った。もっと大切なお役目の話をしなければならないのに、自分はなにを話しているのだろう。自覚しているのに止められなかった。

「坂本様はいつでもわたしの裡（なか）にいると言っていました。ですが、あらたな〈声〉はひびかない、ひびかないんです。先生はどうですか。坂本様の〈声〉が聴こえますか」

「ああ、聴こえるよ」

勝は少し遠い目になる。

「心の耳を澄ませると、あいつが応える。『天下万民のために働け。泣いている暇はないぜよ』ってな。今も叫んでいるよ」

と視線を将馬に戻した。

「これはな、金と権力を欲する魑魅魍魎（ちみもうりょう）対天下万民の戦だ。わかりやすく言うと、

民が自由と平等を手に入れるための戦いよ。薩長土肥なんぞ、関係ねえのさ。おれたちの敵は、二条城と禁裏に巣くっている鬼だ」

真剣な目を真っ直ぐ見つめ返した。

「はい」

「おれは龍馬や中岡、そして、高杉晋作たちの遺志を継ぐ。あいつらがし残した仕事を引き継ぐ覚悟よ。すべての民を戦から遁がす策、まずは京の民を戦から遁がす策を考えなけりゃならねえ」

勝が言っているのは、戦をしないで済む策という意味だろう。巻きこまれて犠牲になるのは、罪のない女子供たちだ。

「上様のお考えは？」

血に染まった座敷で二人は話を続けている。命を落とした龍馬と中岡の気配を、少しでも長く感じていたいと、勝も思っているのではないだろうか。座敷は冷えきっていたが、心だけは燃えるように熱かった。

「前に言ったとおりよ」

勝はうんざりした様子で頭を振る。

「上様は反幕府派と一戦交えるお覚悟だ。何度もお諫めしたが、聞く耳もたずよ。臆

病者と罵られようが、おれは戦だけは避けたいと思っている。智恵を貸してくれねえか、将馬。上様の気持ちを変えるには、どうすりゃいい」

むずかしい問いだったが、ひらめくものがあった。

「わたしはいつも花に助けられます」

「花？」

訊き返した勝は、すぐに意味ありげな笑みを滲ませた。

「女か」

二

「はい」

将馬は答えて、続ける。

「儚く散った花の命を活かすことができれば、上様も京から撤退せざるをえなくなるやもしれませぬ」

独り言のような呟きになっていた。聞き取れなかったのだろう、いや、聞き取れたとしても、意味を理解できたかどうか。

「なに？」

ふたたび勝は訊き返した。

「ご説明する前に確認させてください。二条城の様子は以前伺ったとおりなのですか。青丹一族に命じて、前薩摩藩主と十四代将軍を毒殺したのは、原市之進様だという噂が広まっていると伺いました。その話をご老中や重臣のかたがたは信じておられるのですか」

逆に確認の問いを発した。龍馬が命を落とした場に相応しい話かもしれない。真実の黒幕を追い詰めて、無用な争いは避けるのが得策。京の民を遁がすよりも、真実の黒幕を動かした方が早いと思った。

それが結果的に、京の民を戦から遁がすことになるのではないか？

「さあて、信じているかどうかと問われりゃ、半信半疑ってとこだろう。原様を嫉んでいた者は『やはり、あいつは悪党だったのよ』と、悪い噂をさらに広めているだろうがな。毒薬使いの話や暗殺の噂なんか、どうでもいいと思っているのが大半だろうぜ。お歴々は自分の足下を固めるのに必死よ」

「詳しく調べている者はいない、ということですか」

「うむ」

「それならば、使える策かもしれません。坂本様が亡くなられたあの日、ほとんどの者が知らないところで、ひとりの女子が死にました」

花見帖を読んでいたに違いない。

「お比呂か」

勝はその名を言ったとたん、

「死人に口なしか!?」

珍しく大きな声をあげた。腰を浮かせ、将馬を見つめている。無言で頷き返した。勝は腰を浮かせたまま、しばし声を失っている。

「……」

師弟は互いの目の奥に、決意を読み取っていた。

「大博奕(おおばくち)だ」

勝は言い、乾いた唇を舌で湿らせている。渡したままの竹筒から、また水を飲んでいた。

「はい」

応えて、将馬は宣言する。

「その大博奕、わたしが打ちます」

「いや、まかせられねえな。おまえさんは、まだ嘘をつくのが苦手だ。魑魅魍魎が跋扈する二条城で、鬼どもと五分に戦えるのは、おれしかいねえよ」

にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「あしにまかせちょきや」

龍馬の口調を真似て、ふたたび笑った。つられたように将馬も笑い始める。鮮血の座敷には不似合いな笑い声がひびきわたった。

「こうしちゃいられねえや、大博奕の仕込みをしねえとな。別の噂話を広めなきゃならねえからよ。また大忙しだ」

勝は立ちあがったが、わずかによろめいた。

「おっと」

「先生」

将馬は立って支える。

「大丈夫だ。ちょいと毒気にあてられたかもしれねえや。龍馬と中岡の無念が、壁や畳に沁みついているからよ」

「富沢さんともうひとりを護衛に付けます。おひとりでは出歩かないでください。先生もお命を狙われていますから」

「おれは死なねえよ。龍馬が後ろに付いてるからな。おまえさんはどうするね。まだ帰らねえのかい」

「今少しここで坂本様と中岡様を、偲びたいと思います」

「わかった」

片手をあげた勝を一礼して見送る。あらかじめ富沢たちには護衛役を頼んでおいた。将馬は襖を閉め、特に大量の血が染みている場所に腰をおろした。

「あの日、坂本様は土蔵から母屋のここに移ったとたん襲撃された」

新助夫婦や峰吉の調書を思い出している。

風邪が治りきっていなかった龍馬は、真綿の胴着の上に、舶来絹の綿入れを着て、さらにその上に黒羽二重の羽織を重ねていた。動きにくかったかもしれないが、手足は温まっていただろう。酒を飲んでいたのかどうか、これははっきりしていない。

「坂本様が母屋に移ったのを、刺客はたまたま知ったのか。あるいはこの見世の状況を把握している者がいたのか。奉公人に幾ばくかの銭を渡せば、引き出せる話かもしれないが」

新助夫婦はむろんのこと、奉公人も龍馬派ではないだろうか。銭を渡したとしても、訊かれるまま答えるとは思えなかった。

「たまたまかもしれぬな。坂本様がどこにいるかわからないからこそ、刺客たちは応対に出た藤吉のあとを尾行けて、二階にあがった」

まずは従者の藤吉に斬撃を浴びせかけ、次に座敷の二人に襲いかかる。この時刻だ。行灯を点けていなければ、だれがだれやら顔がわかるまい。

「当然、明かりは点いていた」

なにげなく上を見る。天井に小さな穴が開いていた。将馬は立ちあがりかけた姿勢で、刀を抜こうとする。そのとき、刀のこじりが、ちょうど天井の穴にはまった。

「抜くのが間に合わなくて鞘で防いだか」

立ちあがろうとした瞬間、ふらりとよろめいた。軽い目眩を覚えて頭を振る。なんだろうと思った。

「そういえば、勝先生もよろめいたな」

なにかが引っかかっていた。が、なんなのかがわからない。すぐそこに答えがありそうなのに、手が届かないような、もどかしさを覚えていた。

「将馬。おれも二階に行ってよいか」

建の呼びかけに応える。

「かまわぬ。来い」

襖を開けて、梯子をあがって来る友を迎えた。建は二階の欄干付近や、畳に付いた血を痛ましげに見やっている。惨劇の座敷に足を踏み入れたときには絶句していた。

「……人を斬るというのは、恐ろしいことだな」

ごくりと生唾を呑みこんでいる。

「見ろ、将馬。おまえの好きな寒椿や白梅までもが、血に染まっておるではないか。掛け軸が泣いているようじゃ」

視線で小さな床の間の掛け軸を指した。

「おぬしの言うとおりよ。これだけの血が流れ出るとは」

将馬は後ろ手に襖を閉める。ふたたび十五日の夜と同じ状態にしていた。建は掛け軸や壁、天井、畳と、血飛沫を追うように首をめぐらせている。

「おれは女子というものにも恐ろしさを覚えた。美鈴様は案外、平気な顔をしていたではないか。かつて恋仲だったであろう男が惨殺されたというに、さして気にかける様子もない。冷たいものよ。それとも」

と友は、将馬に目を向けた。

「今はおまえ一筋ゆえ、昔の男などはどうでもいいので……」

「よせ」

聞くに堪えなくて止める。

「なにを、どう言ったらいいのか、わからぬのではないだろうか。まだ信じられぬという気持ちもあるだろう。これから、ひしひしと悲しみを感じるのやもしれぬ。この凄惨な場を見ても、信じられぬ男がここにいるからな」

言葉を切った後、

「まあ、信じたくないだけやもしれぬが」

ぽつりと言った。女々しい泣き言は耳に届かなかったのかもしれない。

「刺客は小太刀の遣い手だな」

建は冷静に意見を述べた。

「さして、広い座敷ではない。おまけに天井も低いとなれば、長い刀よりは小太刀の方がいい。相手をしろ、将馬。脇差で試してみようでは……」

立ちあがった友もまたよろめいた。

「危ない」

支えた将馬の目は、真っ直ぐ行灯に向いている。油が浸った灯心に火を点けるのは言うまでもない。

「油だ」

将馬は叫ぶように言った。
「油だ、建。油になにか、そう、毒を混ぜ入れたのではないか。だから、ふらりときた。だから、坂本様たちは思うように動けなかった。刀を取ろうとしたのに動きが鈍くなってしまった」
「待てまて、憶えているぞ。毎日のように見張り役を務めているからな。土佐新田藩の御用商人が営む油屋があったな。さよう。祇園は石段下の〈大槻屋(おおつきや)〉だ」
建は目を輝かせて、訊いた。
「では、〈大槻屋〉が青丹一族の隠れ家か？」
「おそらくそうではあるまいか」
「なれど、なにゆえ坂本様を狙うたのじゃ。連中にとって、なにか得るものがあるのか」
「青丹一族の噂を聞いた刺客に、頼まれたのやもしれぬ」
折しも二条城では、原市之進こそが青丹一族の黒幕だったという噂話が広まっていた。それを聞いた刺客が、依頼したのではないか。
「毒薬使いの一族は、相手がだれだろうと関係ない。小判さえ貰えれば、言われたとおりに動くのやもしれぬ。行灯の油とは考えたものよ」

将馬は行灯の油を確かめてみる。

「だいぶ減っているな。ゆえに、よけい毒の効き目が強くなったのやもしれぬ。新助夫婦も使っていただろうが、商人は無駄に明かりを使わぬからな。昼間、働いて、夜は早く寝る。そのお陰で気分が悪くなるのを免れたか」

「死ぬほどではないが、動きを鈍くさせるには充分だ」

建は勢いよく襖を開ける。

「二人の志士と従者が、無念の死を遂げた裏に青丹一族ありよ。卑怯な真似をするものじゃ。なれど毒殺しなかったのは、なぜであろうな」

肩越しに後ろを見た。

「あくまでもわたしの推測だが、刺客は士として、名を知られた志士を仕留めたかったのではあるまいか」

「おーい、将馬」

階下の玄関先から仲間の呼びかけがひびいた。

「おまえに文が届いたぞ」

「おれが取って来よう」

返事をする前に、建は階下に降りていた。将馬の立ち去りがたい気持ちを読んだの

かもしれない。すぐに戻って来る。

「使いは海援隊の者だとだけ名乗った由。自分になにかあったときには、おまえに届けろと言われていたとか。確かにおまえ宛てだが、差出人は記されておらぬぞ」

渡された文を急いで開いた。龍の絵とともに、たったひと言、記されていた。

〝勝先生を京から遁がせ〟

龍馬の署名と花押があった。

「……」

将馬は慄えた。

〝龍馬を京から遁がせ〟

かつて勝にも同じ頼み事をされていた。師弟は互いを案じながら、それぞれが果たすべき役割を務めていた。なにかあったときにはと、示し合わせていたのだろうか。あるいはたまたま同じ考えを持っていたのか。たまたま同じ文言を将馬に告げたのか。勝と会ったとき、二度も『坂本あらわる』の騒ぎになったのは、たまたまか。

「坂本様は」

将馬は、二つの「なぜ？」の答えを得たように思った。

「勝先生を守るために、わざと派手な動きをしていたのだ。あれは自分に目を引きつ

けるための苦肉の策だったに違いない。そして、毒を含んだ油を使うたがために、思うような反撃ができず討たれた」

きつく唇を噛みしめる。

志を継がなければならない。

龍馬や中岡の志を――。

遺言を手に、将馬は起ちあがる。

この日、京の〈近江屋〉で、ひとりの名も無き志士が誕生した。

三

「行灯の油、でございますか」

〈近江屋〉の主・新助は、将馬の問いかけに応えた。

「安くて質のよい油を売りに来た者がおりまして。はい、祇園の石段下の油屋〈大槻屋〉でございます。てまえどもはまだ残っていた前の油を使い、母屋の二階に移られた坂本様の行灯には、仕入れたばかりの油を入れました」

これで確証を得た。やはり、土佐新田藩の御用商人〈大槻屋〉こそが、青丹一族の

隠れ家。将馬は祇園の石段下の見世から、いったん見張り役を引きあげさせた。全員消えると却って怪しまれるかもしれないと思い、ひとりだけ残すという策を取った。

四日後の深更。

将馬は護衛隊と新選組の隊士を二班に分けている。ひとつの班は〈大槻屋〉、もうひとつの班は不審な出入りの多い近くの寺に張りつかせた。もしかしたら、〈大槻屋〉から寺への抜け道を掘っているかもしれない。

以前、取り逃がした失敗の経験が、万全の態勢を取らせたのだった。

「おれは寺の方に行く」

建の囁き声に、小声で応えた。

「頼む。おぬしなら上田糸江の顔を見誤るまい。できれば殺すな。なれど己が危ないときには斬り捨てろ」

「承知。薬種問屋に奉公している眇の女は、いかがするのじゃ」

「富沢さんに行ってもらった。顔がわかると言うたゆえ」

「よし。では」

会釈をした友の目が、闇の中で光っていた。隣に控えていた新選組の組長・沖田が、軽く将馬の腕を突いた。

「斬りこみ役は、新選組にまかせていただきたい」

表玄関からの御用改めを買って出る。病をおしての参戦だった。近藤局長は反対したが、沖田は頑として受け入れず、ここにいる。

「お願いします」

将馬は告げ、五人の仲間と〈大槻屋〉の裏木戸に足を向けた。あたりまえのことだが、慣れた相手との方が役目を遂行しやすい。そのため沖田の班は、新選組の隊士で編成されていた。

（上田糸江はいるだろうか）

近くの寺を見張っていたときに、糸江の姿を見た者はいなかった。いや、いたのかもしれないが、気づかなかっただけかもしれない。女子は髪型や化粧で変わる。いち早く逃げたときのことを考えて、抜け道が設けられているかもしれない寺の見張り役に建を配したのだった。

（そういえば、童女の姿を見た者もいないな）

将馬は裏木戸の前で、糸江の娘のことを考えている。四歳という年が、末の妹と同じとあって、ひときわ印象に残っていた。

童女だけは、なにがあっても助けたい。事前にそのことだけは、沖田たちにも頼ん

でおいた。

「御用改めである」

夜気と静寂を切り裂くように、沖田の大声がひびいた。新選組の御用改めは荒々しい。続いて見世の鎧戸を蹴破る音がした。あるいは丸太で突いているのか。夜盗などの襲撃にそなえて、京の見世も夜は必ず鎧戸をおろしている。

どんっ、ずしんっという派手な音が聞こえた。将馬は闇の中に目を懲らしている。流れる雲があえかな月を隠してしまい、周囲は墨を流したような暗闇に覆われていた。母屋の裏手に広がる庭に、まだ出て来る者はいない。御用改めに気づき、すぐさま逃げ出すかと思ったのだが……。

「中に入るぞ。抜け道に逃げこんだやもしれぬ」

将馬は告げ、裏木戸から庭に入った。生け垣沿いに大きめの物置と蔵が設けられている。

しかし、抜け道を造るとしたら母屋の中ではないだろうか。慎重に歩を進めていたとき、雨戸の開く音がした。

いくつかの人影が、忍びやかに庭へ降りる。

「御用改めである」

将馬の申し渡しと同時に、人影が襲いかかって来た。匕首か短刀かはわからない。将馬は左十字で受け流すや、刀の柄で男の胸を突いた。

「う」

短く呻いて男は地面に沈む。仲間が素早く縄を掛けた。その間に将馬は、別の二人と対峙している。庭にも捕り手がいると気づいたらしく、三人以外に飛び出して来る者はいなかった。

「刃向かうのは賊の証。斬り捨てるがよいか」

警告は無視された。二人の男はほとんど同時に突進して来る。将馬の隣に仲間のひとりが立ち、賊のひとりを引き受けてくれた。突き出された短刀を今度は右十字で受け流したが、相手はすかさず体勢を変える。

「はぁっ」

低く身構えて、将馬の腹をつらぬこうとした。が、いち早く飛びさがる。ほとんど同時に真っ向斬りを叩きつけていた。

「ぐあっ」

斃れた男の上に、いきなり雨戸が落ちて来る。母屋に入った新選組に斬られたのだろう、胸から夥しい血を流した男が、雨戸ごと庭に投げ出されていた。

「新選組の御用改めである。逃げる者は容赦なく斬り捨てるぞ」
沖田の声を頼りに、将馬は家の中に入る。同士討ちを防ぐためだろう、新選組の提灯が暗い廊下を灯し始めていた。座敷にも何人かが斃れている。沖田も将馬に気づき、血まみれの刀を片手に近づいて来た。
「女はいましたか」
天才剣士は落ち着きはらっている。
「いえ、出て来ません。どこかに抜け道に通じる入り口が……」
「組長」
ひとりの隊士が叫んだ。
「台所の板の間が、抜け道の入り口かもしれません。床板が外してあります」
「わたしが追いかけます。沖田さんには、ここの指揮をお願いします」
「承知した」
後ろから迫った敵を、沖田は振り向きざま、右袈裟斬りで簡単に斬り伏せる。将馬が動くまでもない。まるで後ろにも目があるようだった。
（まさに剣鬼か）
将馬は台所に走った。廊下を塞ぐように、前方にひとりの敵が現れる。商人に扮し

た一族たちの者は、寝るときはそういう姿なのか。みな黒っぽい作務衣を纏っていた。男は踏みこみながら、将馬に向かって短刀を突き出した。将馬は上から短刀を押さえつけて、受け止める。と男の左手にも短刀が現れた。

「二刀流か」

将馬は押さえつけていた短刀を叩き落とした。左手の短刀が首を狙って動く。すっと腰を沈めてかわすと、そのまま男の腹を刀でつらぬいた。

「ぐぅっ」

呻くのと、将馬が刀を引き抜くのが同時だった。血を吐き出した男を避け、すみやかに奥の台所へ進んだ。隊士のひとりが、手燭で抜け穴を照らし出している。

「何人かの男と、女がひとり、逃げました」

糸江だろうか。頷いて、将馬は梯子を伝い降りた。手燭を持った隊士も降りて来る。屈まなければ進めないが、崩れるのを防ぐためだろう。抜け道はがっちりと木枠で固められていた。

「わたしが尖兵役を務める」

将馬は抜け道を進み始めた。後ろには手燭の隊士が続いている。蠟燭がなければ進めなかったかもしれない。どこかに敵が潜んでいるかもしれないのだ。注意深く歩を

進めて行った。

「よせ、糸江。はやまるなっ」

前方で憶えのある声がひびいた。

「建だ」

将馬はいっそう足を速める。すぐに上へ出る梯子が見えた。出たとたん、仲間に斬りつけられてはたまらない。

「建、そこにいるか」

声をあげながら、将馬は梯子をのぼる。応えはなかったが、刃で斬りつけられることもなかった。寺の裏手らしい場所に出る。灯されていた提灯の明かりが、闇の中に蒼白の女を浮かびあがらせていた。

糸江はふぅっと息を吐き、倒れそうになる。

「毒を服んだ」

盟友が抱きかかえた。周囲には何人かの男が斃れている。糸江だけは生け捕りにしようとしたのかもしれない。顔や寝間着は、綺麗なままだった。逃げられないと悟り、毒をあおったのだろう。

「しっかりしろ、糸江」

建は、腕の中の女を揺さぶっている。敵味方ではあったが、通じ合うものがあったのではないだろうか。呼びかけに応えて、糸江は建の頬に白い手を這わせた。

「敵、だったけ、ど、いとしい男」

見つめていた目の焦点が合わなくなる。

「青丹一族の真実の頭目は」

唇が「よ・し・の・ぶ」と動いたように見えたが、声にはならなかった。とっさに将馬は、童女の姿を探している。糸江が青丹一族の今の頭目だったとしたら、あの童女は跡継ぎなのではないか。

「念のために周囲を今一度改めろ」

将馬は命じた。

「四歳ぐらいの童女が、どこかに隠れているやもしれぬ。傷つけてはならぬぞ。慎重に探せ。よいな」

その傍らで建は、暗い空を仰ぎ見ている。

涙をこらえているような横顔だった。

四

月が変わって十二月。

将馬は、勝と一緒に二条城に召し出された。書院で目通りすべく、二人は下座に控えている。取次役を務める板倉周防守勝静が、上座の傍らに座した。上座に御簾がさげられていないのは、勝や将馬の顔を見たいと慶喜が思ったからだろうか。

「上様のお成りぃ」

ほどなく上座に、慶喜が腰を落ち着けた。

「大儀である」

直接、二人に呼びかけた。

「勝から申し出があったゆえ、目通りを許した次第。して、今日はいかような話じゃ。直答を許すゆえ、忌憚なき意見を述べよ」

よけいな挨拶はしない。謁見が叶うまでの間、勝によって巧妙な仕込みが行われている。

二条城や禁裏に、あらたな噂話が広まっていた。

〝青丹一族を操っていた真実の黒幕は、徳川慶喜様だったらしい〟

あろうことか慶喜は、懐刀だった原市之進が旗本に殺されたのをこれ幸いと、すべての罪を市之進になすりつけた。しかし、まことの黒幕は慶喜公。青丹一族の配下だった女子が死ぬ間際、文にそう書き残していた。

いったん消えかけていた噂話は火を噴いた。

（まさか上様が……とうてい信じられぬ）

（なれど、考えられることじゃ）

（さよう。邪魔者を始末して、天下を我が手にとお考えあそばされたに相違ない）

二条城の噂は、上方に広まり、よけいな尾鰭を付けて、いまや江戸にまで届いているのではないだろうか。

慶喜が狙うのは、あらたな世の君主、徳川が主導権を握る政だ。将軍職を返上したとはいえ、それは形だけのこと。慶喜はいまだ政の中心にいる。雄藩や諸大名を追いやって、あらたな日本の大君となる。そのためには戦もやむをえまいと、考えているに違いなかった。

その野望に勝が「まった！」をかけた。

「日本が進む道は、三つ、あるのではないかと存じます」

勝は、穏やかに切り出した。

「ひとつは、今までどおり、徳川が政権を担っていく道。ひとつは、幕府を含む雄藩連合。さらにもうひとつは、幕府を含まない雄藩連合。つまり、倒幕ですな」

どこか皮肉っぽい響きが感じられた。将馬は勝の斜め後ろに控えているため、恩師の表情などは見えない。が、いつも以上に勝の身体が巨きく見えた。

「上様は、いかなるお考えをお持ちでござりますか。徳川家が単独で政権を担っていく道が、よかろうという仰せでござりまするか」

勝の率直な問いかけに、慶喜はしばし沈黙を返した。どんな思惑があるのかと、探っているように思えた。

「いかにも、徳川が主体となった政よ」

おもむろに口を開いた。

「雄藩の意見は聞くが、彼の者たちに政はまかせられぬ。権現様の頃より、我が徳川家は日本の君主である。連綿と続いて来たこの流れを、余の代で潰したとなれば、権現様に顔向けできぬからの」

権現様こと家康公を引き合いに出して、徳川家の権威をあらためて知らしめるとともに、なにかあったとしても、それは自分のせいではないと、逃げ道を残してあるよ

うにも思えた。いずれにしても元将軍の聡明さを、将馬は感じている。

（なれど、聡明な裏に、気の弱さがちらついているように思えなくもない）

思い出しているのは、勝から聞いた話だ。幼い頃、慶喜は眠ったときの姿勢を美しく保つため、枕の両側に剃刀を立てられて床に就いたという。しかし、眠った後に家臣がすぐさま剃刀を取り除くことを、幼いながらも鋭く読んでいた。

（どこかに甘えがあるのではないか）

いざとなれば、だれかが剃刀を取り除いてくれるかもしれない。だれかが肩代わりしてくれるかもしれない。原市之進の死を利用した冷酷さが、いかにも公卿の血を引く殿様らしいともいえた。

（だからこそ）

と将馬は思っている。

（追い詰めれば、おそらく上様は逃げる）

日本の民を戦から遁がすには、まず慶喜に京から逃げてもらうのが得策。それもできるだけ、だらしない逃げ方がいい。慌てふためいて逃げてくれれば、もはや幕府の重臣や幕府派の諸藩も、慶喜を守り立てようとは思わないだろう。

師と弟子の謀は、着々と進行していた。

「奇妙な噂が広まっております」
勝が第一弾を投じた。
「上様は、青丹一族なる毒薬使いの一味をご存じですか」
「聞いた憶えがある。殺された原の命を受け、島津斉彬公や家茂公を毒殺した由。さらに孝明天皇も、一味に毒を盛られたとか。笑止千万じゃ。原はかような真似をする男ではない。つまらぬ噂が広まったものよ」
淡々と答えた。流石にこの場で「原こそが黒幕」とは言えなかったに違いない。そこにもまた気の弱さが覗いたように思えた。ふてぶてしく「下手人は原」と言い切れれば、大物の資質ありとなったかもしれないものを……。
もっとも見方によってはという但し書き付きであるのは否めなかった。懐刀だった家臣に罪を押しつけるやり方は、褒められたものではないだろう。
「では、真実の黒幕は上様でございまするか？」
さらりと発せられた勝の問いかけに、
「口がすぎるぞ」
板倉から厳しい声がとんだ。
「かまわぬ。忌憚なき意見を聞きたいと言うたのは、余じゃ」

慶喜は鷹揚なところを見せる。あらたに広まった噂話に関しては、話が出ると予測していたに違いない。

「続けるがよい」

と促した。

「は」

勝は畏まって、続ける。

「美濃国友木藩の藩主には、お比呂と申す愛妾がおりました。さる京の見世に奉公しているのを見つけましたため、捕らえて詮議した次第。これが口の堅い女子でしてな。どれだけ責めても吐きませなんだ」

虚実ないまぜの話を告げた。拷問を匂わせているが、比呂は美鈴の差配によって丁重に扱われていた。

「どうせ命は助からぬと悲観したのか、あるいは仲間による口封じか。周防守様にお届けいたしました調書にも記しましたが、毒入りの茶を服んで果てました次第。実はこの女子が、真実の黒幕の名を記した書き付けを、遺していたのでございまする」

死人に口なし。慶喜が使った策を、将馬は勝に提言した。こういう場で堂々と言えるのは、勝なればこそだろう。

（わたしには、とうてい無理だ）

将馬は話の成り行きを見守っている。

「わしのもとには届いておらぬ」

板倉が声をあげた。

「まことであるならば、見せよ。むろん持って来たのであろうな。ゆえに上様への目通りを願い出たのであろう？」

「本日は持参いたしておりませぬ」

勝は軽くかわした。

「なに？」

「下手に持ち歩きますと、盗まれる懸念がありますからな。それがしが信頼する者に、預けました次第。ああ、ついでに申し添えますが、先日、自害した青丹一族の頭目と思しき女子、上田糸江もまた死ぬ間際に、黒幕の名を告げておりまする」

ふたたび死人に口なしを用いた。

「上様を陥れるための策じゃ。だれがその女子の言葉を聞いたのか。死人に口なしよ。だれも証はたてられぬ」

板倉が反論する。

「ごもっとも」
勝は余裕たっぷりに受けた。
「原市之進様も、さぞやご無念でござりましょうな。まさに死人に口なし。いつの間にか毒薬使いの黒幕に仕立てあげられるとは、死んでも死にきれないでしょう。どこかで笑っていますよ、真実の黒幕が」
堅苦しい場は苦手なのだろう、いつもの口調になっていた。
「原は青丹一族の黒幕などではない。わしはよう知って……」
必死に庇う板倉の言葉を、
「そうそう、御所周辺が剣呑な動きをし始めているようですな」
勝は違う話で遮った。
「天皇の御名で幕府の廃止、摂政関白の廃止を宣言し、天皇のもとに総裁、議定、参与の三職を置く動きがあるとか。討幕、討つ方の策でしょう」
「な、に？」
慶喜がわずかに腰を浮かせた。初めて耳にする話だったのではないだろうか。板倉にちらりと問いの眼差しを投げた。
「定かではありませぬが、かような話が流れているのは事実でござります」

渋々という感じで答える。まだ知らせる段階ではないと判断し、伏せていたのはあきらか。慶喜は頬を引き攣らせていた。

「……」

「討幕派に死人の書き付けが渡った日には、徳川家の権威は失墜しますな」

勝は脅しとも取れる発言を敢えて口にした。

「何度も言わせるでない。口がすぎるぞ」

二度目の叱責には、神妙に畏まる。

「は」

それでも顔をあげて言った。

「江戸にお戻りあそばされるのが、宜しかろうと存じます。さすれば、よからぬ噂は消えましょう。とりあえずは大坂城に行き、そこから船で江戸に向かわれてはいかがでござりまするか」

まずは京の民を戦から遁がす策を打ち出した。慶喜が大坂に行った後、江戸に帰らせて、民を戦から遁がす策を実行する。和戦両方の考えを持っているであろう元将軍は、決めあぐねているようだった。

「討幕、討幕と騒いでいるようだが、まともに戦えるのは薩摩のみ」

慶喜は言った。

「江戸から続々と兵が駆けつけている。今我が軍は」

問いかけるような眼差しに、勝は一礼する。

「およそ一万五千。対する薩摩は、およそ五千。徳川軍の三分の一程度でございます」

軍艦奉行らしく明確な数字が出た。慶喜が一戦交える覚悟を決めているかと言えば、これは微妙なところかもしれない。速攻で動くことが苦手な公卿型に見えた。

「さよう。一万五千じゃ」

数字だけ聞いて満足げな表情をしている。戦などするまでもなく、すでに勝ったも同然と思っているのだろうか。

「大坂からさらに江戸へ戻るとなれば、さまざまな準備がございます。それがしは、ひと足先に京を発ちたいと思うておりまするが、お許しいただけましょうか」

勝は早くも勝手に移動を決めていた。青丹一族の話が逸れたのと同時に、うるさい男がいなくなれば楽だと思ったのか、

「許可する」

慶喜はすぐさま応じた。

「道中、くれぐれも気をつけるがよい。巷では次々と暗殺騒ぎが起きているとか。幕府の軍艦奉行は勇名を馳せておるからな。狙われておるゆえ、慎重にな」

皮肉、いや脅しとも取れる言葉の裏に隠れているのは、危険な企みなのではないか。暗殺を命じるのは上座にいるお方なのではないだろうか。さらに青丹一族の残党が、捕縛を命じた勝を狙っているという話も得ていた。

「ははっ、ありがたきお言葉、恐悦至極に存じます」

殊勝に応じて密談は終わりを告げたが……。

慶応三年（一八六七）十二月九日。

岩倉具視が王政復古の大号令を発し、新政府の樹立を宣言した。

圧倒的勝利を確信していたであろう慶喜は、京から大坂に移って指揮を執っていた。

徳川方は薩摩を討つという名目を掲げていたが、度重なる薩摩軍の挑発に乗ってしまい、江戸では薩摩藩邸を焼き払う騒ぎが起きた。

それでも慶喜は大坂を動かない。

翌慶応四年（一八六八・明治元年）正月三日。

鳥羽伏見の戦いが勃発する。三日、四日、五日と負け戦が続いたことに気持ちが萎

えたのか。あるいは……勝との密かな会談の結果なのか。

慶喜は素早く江戸に戻るや、上野寛永寺に身を寄せ、謹慎の意を示した。

慶喜が大坂から遁走したことで、戦の嵐もすみやかに立ち去った。『慶花の夢』は、『槿花一朝の夢』――朝顔の花が咲いてまもなく萎むように、栄華の儚い喩えとされている――の結末を迎えたのである。

それが一連の騒ぎの答えではないのかと、将馬は思った。

五

残る仕事は勝を遁がす策だった。

将馬は、河原町通の醤油屋〈近江屋〉を出た。龍馬と中岡が死んだ見世から、夜陰にまぎれて醤油樽を運び出すところだった。自分と盟友の建を含めて総勢六名の出立である。醤油樽の担ぎ役も仲間が務めていた。

〝先生に、ひとつお尋ねしたいことがあります〟

勝との会話を思い出している。慶喜に目通りした後、将馬は恩師と話をする機会を得ていた。

〝ご遺言となった坂本様の文には、『勝先生を京から遁がせ』と記されておりました。万が一のときには、と、示し合わせておられたのですか〟

〝いや〟

勝は答えた。

〝龍馬とそんな話をしたことはねえよ。ただ、なんというのか、そう、魂の盟約とでも言うのか。生き残った者が志を繋いでいく、そんな雰囲気はあったかもしれねえな。天下万民の自由と平等を得るための戦をよ。だれかが続けていくってことだ〟

「それで」と面白そうに勝は訊いた。

〝狙われているおれを、どうやって京から遁がしてくれるんだい？〟

〝坂本様のご遺言が、良き通行手形になるのではないかと存じます。わたしの仲間にお供させますので、ご案じなさいませぬよう〟

通行手形の意味がわからなかったのだろう、勝はしきりに首を傾げていたが、急にひらめいたのか。

〝なるほど〟

膝を打って得心したのだった。

「さあ、よいか」

将馬は五人の仲間を見まわした。

「この醤油樽を〈酢屋〉まで運び、そこから船で大坂に向かう。初めて船に乗る者もいるだろうが、幸いにも本日はちょうど良い風が吹いている。さして苦労することなく着くだろう」

「行くぞ」

建がいつものように、先にたって走り出した。隣にひとりが付き、その後ろに醤油樽が続く。将馬と残るひとりは殿(しんがり)を務めた。〈酢屋〉までたいした距離ではない。右手に土佐藩邸を見ながら、河原町通を北へ進んだ。

案の定と言うべきか。

「何者じゃ」

建が立ち止まった。当然のことながら醤油樽と将馬たちも足を止める。三条通に出る手前の小径を、右に曲がろうとしたのだが、そこに賊が待ち構えていた。

総勢十人程度だろうか。手拭いで口もとを覆った賊が、無言で襲いかかって来る。事前に話していたとおり、将馬たちは大きな醤油樽を土佐藩邸の塀に寄せ、すみやかに半円の陣を組んだ。背中に醤油樽を庇い、刺客を迎え撃つ。

「きえぇっ」

ひとりが奇声をあげながら斬りかかって来た。醤油樽の中に勝が潜んでいると考えたに違いない。他の刺客もいっせいに刀を突き出した。将馬は手練(てだ)れを揃えている。弾(はじ)き返しざま、相手の腹を刀でつらぬいた。

「うぐぅ」

斃れたひとりを踏みつけて、他の刺客が斬りこんで来る。将馬は建と隣り合わせになって応じた。盟友が右十字で刺客のひとりを受け流した。将馬は横からすかさず斬りつける。脇腹を切られた男が、よろめくように後退(あとじさ)った。

ひとり、二人と地面に斃れていく。あっという間に刺客は四人になっていた。京における戦いが、いかに凄まじいかという証かもしれない。実戦を積んだ江戸護衛隊は、格段に人斬りの腕をあげていた。

が、一瞬、護衛隊の六人は醤油樽から離れた。

「仲間の仇！」

賊のひとりが、体当たりするように醤油樽を刺しつらぬいた。一撃目は真横から、二撃目は蓋(ふた)の上から刀を突きたてる。目にも留まらぬ速さだった。

「勝先生っ」

将馬は叫んだ。建が醤油樽を刺した賊に、右袈裟(みぎけさ)斬(ぎ)りを叩きつける。斃れた男をす

ぐにどかして、樽の蓋を開けた。頭や腹から血を流した勝が、樽の中に座している。仲間の手を借りて樽から出した。

「医者を呼べ。いや、まずは番屋にお連れする」

将馬は勝を地面に横たえる。勝の顔は血まみれで、着物も鮮血に染まっていた。それを見届けた賊は、斃れた仲間を残して、薄明の中に消えた。

「番屋に運ぶぞ」

建の声で、将馬は仲間と勝の身体を抱えあげた。二人は醤油樽も近くの番屋に運び入れる。中に入った将馬は、注意深く周囲の様子を見た後、

「よし。見張り役を残してはいかなかったようだ」

安堵の吐息をついた。あらかじめ奉行所に話をして、この番屋の番人は、今宵だけ置かぬよう頼んである。土間の筵に横たわった勝を、仲間ともども見おろした。

「気味が悪いほどそっくりだな」

建は屈みこんで、血だらけの顔にふれた。

「将平が造った生人形（いきにんぎょう）だと、わかっているのに信じられぬ。まあ、こうやっていれば表情が動かぬゆえ、やはり人形かと思うが」

そう、斬られたのは、勝義邦を模した生人形だった。しかも時間が足りなかったた

め、ちゃんと造られているのは頭部のみ。首から下は木の寸胴といった代物だ。頭部と胴体に鶏の血を仕込み、賊を欺くために鮮血を流させたのである。

「今頃、本物の勝先生は大坂に着いた頃やもしれぬ」

将馬はようやく肩の力をぬいた。勝と薩摩藩の西郷隆盛が知り合いというのを利用して、大胆な策に出ていた。龍馬の遺言を通行手形と言った意味はここにある。慶喜に目通りした後、勝はその足で薩摩藩邸に向かい、居合わせた西郷の了承を得たのだった。

「なれど気がつけば、また襲うであろう」

建の言葉を、将馬は受ける。

「その前に遁がす」

「気づけばまたまた襲うぞ」

「またまたその前に遁がす策よ」

将馬は力強く応じた。

「われらは遁走屋でもあるからな。人斬りの腕前だけではのうて、人を遁がす腕もあげねばならぬ。よいか、建。特におぬしは……」

「ああ、ああ、今日ぐらい説教はよせ」

盟友は呆れ顔で遮った。
「さて、おれは島原に行くが」
仲間を見やると、次々に声があがった。
「わしも行く」
「悩ましい京言葉がたまらぬわ」
「はんなりして、よろしゅおすえ、か」
最後の言葉でどっと沸いた。好きで人を殺めたわけではない。やむをえず刀を使った後には、やはり美やかな女子と肌を重ね合わせたい。いっとき現世を忘れたいと思うのが、あたりまえではないだろうか。
「あとはわたしが引き受けた」
将馬は、亡骸や勝の生人形の後始末を買って出る。
「さよう。待つ女子がいる将馬は、誘わぬがよしじゃ。さあ、行こう。明日からまた忙しくなるからな」
建が仲間を引き連れて、番屋を出て行った。
（坂本様）
将馬は着物の襟元にふれる。襟に縫いこんだ龍馬の写真に心の中で呼びかけていた。

写真だけでも遁がしたかった。ゆえに〈近江屋〉を旅立ちの場に選んだ。

〝あとは頼んだぜよ、将馬〟

龍馬の〈声〉が聴こえたように思えた。

六

花はいつでも待っている。

伏見の借家では、小箱を預けた伝蔵と、先斗町の置屋に籍を置く芸妓・伊呂波――千登勢が、ようやく再会を果たしていた。何度も江戸に戻ると言った伝蔵を、美鈴がもう少し待ってくれと説得し、今日に至っている。

「〈はなさかや〉さんには、本当にお世話になりました」

玄関先で伝蔵が、繰り返し礼を告げた。家の門前には二人の山同心が立ち、訪れる者に目を光らせている。

「なんと御礼を言えばいいのか。まさか出逢えるとは思っていませんでした。簪職人の家にまで調べに行ってくれたとか。お陰さまで一緒に江戸へ行けます」

「でも、なぜ、わたしが挿していた簪のことをご存じだったんですか。伝蔵さん、あ、

当時は四郎さんだったんですが、別れるときに戴いた簪は返したんですよ。それが小箱の中に入っていたんですが」

千登勢が不思議そうに訊いた。持っていた小箱には、庭の伊呂波紅葉を象った『まねきの紅葉』の簪が入っていた。千登勢の年は三十七、八。舞妓のときに出逢ったとすれば、二十年ほど前のことになる。そのとき千登勢は『まねきの紅葉』の簪を、贔屓客のひとりだった伝蔵から貰ったらしい。

「その小箱の形からして、もしや、簪かしらと思いまして」

美鈴は千登勢の手にある小箱を指した。まさか将馬が千登勢の幻を視たとは言えず、作り笑いでごまかしている。

「千登勢さんは、江戸弁がお上手ですね。京生まれではないんですか」

巧みに話を変えた。

「昔、伝蔵さんに手ほどきしてもらいました。もしかしたら逢えるかも、そんなふうに思って、時々稽古をしていたんですよ」

「本当に昔は、四郎さんという名前だったんですね」

隣にいた将平が不意に呟いた。

「兄上が〈声〉を聴き、幻を視た……」

美鈴は慌てて口を押さえつける。

「ほほほ、時々、おかしなことを口走るんです。お気になさいませんよう。道中、くれぐれもお気をつけて」

深々と一礼して、二人を見送った。将平と一緒に家の中へ戻る。

「今、お茶をお持ちします」

義弟は台所に足を向けた。

「お願いします」

美鈴は、陽射しが降り注ぐ八畳間の縁側に座る。小春日和だった。特にこの家の縁側はたっぷりの陽が注いで暖かい。

「兄上たちは大丈夫でしょうか」

将平が茶を運んで来た。

「案ずることはありません。みな強いですから。そろそろ戻って来る頃ではないでしょうか。葉は散ってしまいましたが、この家には『まねきの紅葉』がありますもの」

「坂本様のことで、兄上はかなり気落ちしているように見えました」

将平の言葉に、

「そう、ですね」

美鈴は複雑な思いをいだいた。十一月十五日、惨劇が起きたとき、蕎麦屋にいた将馬のもとに行った。〈近江屋〉の前にいた富沢が案内してくれたのである。

〝大丈夫か？〟

開口一番、将馬は訊いた。そう訊いた将馬自身が、顔面蒼白だった。それなのに自分のことよりも、美鈴を案じてくれた。

（胸がいっぱいになりました）

思い出す度、涙があふれる。あのとき、頭の中は将馬への想いでいっぱいになった。むろん龍馬のことも案じられたが、それ以上に将馬のことが心配だった。

「勇気を出して、そっと手を重ねたのに」

不満が口をついて出る。

「え？」

隣に腰かけた将平が、顔を覗きこんだ。

「手を握り返さなかったのですよ、貴方の兄上は。まあ、ああいうときですから、仕方ないですけれど」

「わたしは前から気になっていたのですが」

将平は呟いた。また眠くなっているのかもしれない。少しぼんやりした表情と声を

していた。

「なんですか」

「小千葉と呼ばれる千葉道場へ、義姉上がおいでになったことです。なにをしにいらしたのかと思いまして」

義姉上と呼ばれる度、くすぐったいような気持ちになる。将馬もまた似たような思いを覚えるのではないだろうか。嬉しそうな顔をするのが見たくて、美鈴はわざと「おまえさま」や「うちの夫」を連発していたのだった。

「気持ちに踏ん切りをつけたかったのです」

美鈴は答えた。

「江戸における坂本様の妻は、わたしなのか、千葉佐那様なのか。お目にかかれば、はっきりすると思いました」

そう、残酷なほどにはっきりした。佐那に会った瞬間、かなわないと美鈴は思った。佐那は龍馬を忘れておらず、自分は妻なのだと言い切った。

〝わたくしの夫は、龍馬様ひとり。江戸においでになられたときには、いつでも笑顔でお迎えしようと決めております〟

運悪く龍馬が死んだとしても、自分は生涯、他の男とは所帯を持つまいと決めてい

る。

佐那の覚悟を聞き、美鈴は己の甘さを実感したのだった。

「それで？」

将平が促した。心の中で考えた返事は、むろん届いていない。

「それだけです」

立ちあがって、嵯峨菊のそばに行った。

「伊東某が置いて行った鉢植えを、勝手に持って来てしまいました。兄上は怒るのではないでしょうか」

将平が不安そうな声を投げる。

「花を貰うぐらい、よいではありませんか。賄賂や袖の下に、この花は含まれませんよ。堅く考えすぎるのが、いいのやら悪いのやら。もう少し柔軟に……」

「兄上」

はずんだ将平の声が、ひびきわたった。はっとして美鈴は振り返る。犬走りを通って来たのだろう、将馬が庭先に現れていた。

（驚かせようと思ったのですね）

美鈴は喜びを押し隠して、深々と辞儀をする。

「お帰りなさいませ」
将平を肩越しに振り返った。
「すぐに足湯の用意を」
「はい」
弟は、満面の笑みを浮かべている。ああいうふうに素直になれたら、と、美鈴は思った。四歳も年上の出戻り女としては、なかなか若い娘のようにはふるまえない。
「嵯峨菊か」
将馬はすぐさま鉢植えに気づいた。
「わたしが持って参りました。花に罪はございませぬゆえ」
「さよう。花に罪はない」
縁側に座ることもなく、嵯峨菊のそばに屈みこむ。美鈴もそばに屈みこんだ。
「首尾はいかがでございましたか」
「重畳よ」
「ようございました」
ご無事で、をつけたかったのに、なにを言っているのだろう。次の言葉が見つからずに、二人はしばし黙りこんでいる。

「そなたさえよければ」
不意に将馬が言った。
「わたしと真実の夫婦にならぬか」
「え」
一瞬我が耳を疑っていた。将馬はなんと言ったのだろう。もしや、自分と一緒になりたいと言ったのだろうか。
「あ、いや、すまぬ。つまらぬことを……」
「その言葉をどれほど待ち望んでいたか」
美鈴は思わず将馬の手を両手で握りしめていた。
「嬉しい。嬉しゅうございます、おまえさま」
あとはなにも言えなくなる。涙がぽろぽろとあふれ出した。握りしめた両手を、将馬は黙って握り返した。
二人を『まねきの紅葉』が見おろしている。
伏見の家の庭には、ひと足早く春が訪れていた。

あとがき

なぜ、坂本龍馬は暗殺前に、京で目立つような動きをしていたのか？
なぜ、坂本龍馬は襲撃されたとき、ほとんど反撃できなかったのか？
なぜ、徳川慶喜は圧倒的な軍事力を持っていたにもかかわらず、大坂から遁走したのか？

この三つの『なぜ？』が、この作品を書く原動力となりました。龍馬は何度も危ない目に遭いながら助かったため、驕りが生じていたのだろう。反撃できなかったのは、急襲を受けたためではないのか。慶喜が遁げたのは朝敵とされたことに耐えきれなかったからであろう、などなど、さまざまな意見が出ています。

資料を調べていくうちに、こういう解釈も許されるのではないかと思い、大胆な仮説をたてた次第です。

いや、面白かったですね。

特に勝海舟や坂本龍馬、中岡慎太郎、新選組といった実在の人物が登場する度、胸が躍りましたもの。錚々たるメンバーを相手にしながら、花咲爺こと佐倉将馬は意外にも健闘してくれました。実はどうなることかと、内心ひやひやしていたのですけれど……。

龍馬暗殺に関しては、これまた諸説紛々ですが、私は見廻組説をとりました。天井の低い座敷で刃を交える場合、やはり小太刀の方が有利だと思います。見廻組には小太刀の遣い手もおりました。龍馬は寺田屋騒ぎの折、京都奉行所の役人をやむなくではありましょうが、殺めています。見廻組としては、のさばらせておくわけにはいきません。動機は充分です。

寺田屋騒ぎは有名であるため、敢えて中に戦う場面は入れませんでした。すべてが終わった〈近江屋〉で将馬が推理する場面、このあたりが特に見せ場です。坂本龍馬が死ぬとわかっている話を、いかに面白く仕立てあげられるか。

二巻目では苦労しましたが、三巻目は細かい部分にも気を配りつつ、ラストまで持っていけたと思います。読者の方々には、是非、一巻から三巻までを一気読みしていただきたい。血腥い騒ぎに覆われた幕末の江戸と京が舞台ではあるものの、その中に

あって私を捨て、天下万民のため、懸命に生きる若者たちの姿が浮かびあがると思います。

幕末の志士の苦労を思えば、なんでもできるのではないでしょうか。少なくとも、現代で暗殺騒ぎなどは、そうそうありませんから。

非常に面白い仕事をさせていただきました。

坂本龍馬様や勝海舟様、中岡慎太郎様をはじめとする志士の方々、新選組の方々に心からの感謝を。そして、この本を買ってくださった読者の方々にも御礼申しあげます。

ありがとうございました。

二〇一四年二月

六道慧

六道慧〈時代・歴史〉作品リスト（2014年3月現在）

作品名	レーベル名	刊行月
●「妖（あやか）し小町」シリーズ		
おぼろ隠密記―妖し小町	光文社文庫	2000・8
大奥騒乱ノ巻―おぼろ隠密記（妖し小町　二）	光文社文庫	2001・1
振袖御霊ノ巻―おぼろ隠密記（妖し小町　三）	光文社文庫	2001・6
夢歌舞伎ノ巻―おぼろ隠密記（妖し小町　四）	光文社文庫	2001・10
歌比丘尼ノ巻―おぼろ隠密記（妖し小町　五）	光文社文庫	2002・4
●「くノ一元禄帖」シリーズ		
くノ一元禄帖	徳間文庫	2002・9
大江戸繚乱―くノ一元禄帖	徳間文庫	2003・2
はごろも天女―くノ一元禄帖	徳間文庫	2003・7
妃女曼陀羅―くノ一元禄帖	徳間文庫	2003・12

●「十手小町事件帳」シリーズ

十手小町事件帳	光文社文庫	2003・5
まろばし牡丹―十手小町事件帳	光文社文庫	2003・10
ひよりみ法師―十手小町事件帳	光文社文庫	2004・2
いざよい変化―十手小町事件帳	光文社文庫	2004・8

●「浦之助手留帳」シリーズ

花も花なれ―浦之助手留帳	双葉文庫	2004・6
霧しぐれ―浦之助手留帳	双葉文庫	2004・12
夢のあかり―浦之助手留帳	双葉文庫	2005・6
小夜嵐―浦之助手留帳	双葉文庫	2005・12

●「御算用日記」シリーズ

青嵐吹く―御算用日記	光文社文庫	2005・3
天地に愧じず―御算用日記	光文社文庫	2005・9
まことの花―御算用日記	光文社文庫	2006・4
流星のごとく―御算用日記	光文社文庫	2006・9
春風を斬る―御算用日記	光文社文庫	2007・4
月を流さず―御算用日記	光文社文庫	2007・10

一鳳を得る―御算用日記　光文社文庫　2008・5
径に由らず―御算用日記　光文社文庫　2008・12
星星の火―御算用日記　光文社文庫　2009・5
護国の剣―御算用日記　光文社文庫　2009・9
鵞馬十駕―御算用日記　光文社文庫　2010・4
甚を去る―御算用日記　光文社文庫　2010・10
石に匪ず―御算用日記　光文社文庫　2011・5

●「いろは双六屋」シリーズ

明烏―いろは双六屋　徳間文庫　2006・8
千両花―いろは双六屋　徳間文庫　2006・12
桜の仇討―いろは双六屋　徳間文庫　2007・6
恋時雨―いろは双六屋　徳間文庫　2008・1

●「深川日向ごよみ」シリーズ

凍て蝶―深川日向ごよみ　双葉文庫　2007・2
催花雨―深川日向ごよみ　双葉文庫　2007・8
忍び音―深川日向ごよみ　双葉文庫　2008・3

●「御家人風来抄」シリーズ

天は長く―御家人風来抄　幻冬舎文庫　2008・8
日月の花―御家人風来抄　幻冬舎文庫　2008・10
風雲あり―御家人風来抄　幻冬舎文庫　2009・6
五月闇―御家人風来抄　幻冬舎文庫　2009・12
花狩人―御家人風来抄　幻冬舎時代小説文庫　2010・6
恋文―御家人風来抄　幻冬舎時代小説文庫　2010・12

●「公儀鬼役御膳帳」シリーズ

公儀鬼役御膳帳　徳間文庫　2009・9
連理の枝―公儀鬼役御膳帳　徳間文庫　2010・4
春疾風―公儀鬼役御膳帳　徳間文庫　2011・3
ゆずり葉―公儀鬼役御膳帳　徳間文庫　2011・10
外待雨―公儀鬼役御膳帳　徳間文庫　2012・6

●「奥方様は仕事人」シリーズ

奥方様は仕事人　光文社文庫　2011・8
寒鴉―奥方様は仕事人　光文社文庫　2011・12
そげもの芸者―奥方様は仕事人　光文社文庫　2012・7

ちりぬる命―奥方様は仕事人	光文社文庫	2013・3
●「御算用始末日記」シリーズ		
天下を善くす―御算用始末日記	光文社文庫	2012・3
一琴一鶴―御算用始末日記	光文社文庫	2012・11
則ち人を捨てず―御算用始末日記	光文社文庫	2013・7
●「山同心花見帖」シリーズ		
山同心花見帖	徳間文庫	2013・1
慶花の夢―山同心花見帖	徳間文庫	2014・2
まねきの紅葉―山同心花見帖	徳間文庫	2014・3
●「代言人真田慎之介」シリーズ		
代言人真田慎之介	幻冬舎文庫	2013・6
五厘殺人事件―代言人真田慎之介2	幻冬舎文庫	2013・10

この作品は徳間文庫のために書下されました。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上一切認められておりません。

徳間文庫



山同心花見帖

まねきの紅葉（もみじ）

© Kei Rikudô 2014

著者　六道慧（りくどうけい）

発行者　平野健一

発行所　東京都港区芝大門二―二―一〒105―8055　株式会社徳間書店

電話　編集〇三（五四〇三）四三四九
販売〇四八（四五一）五九六〇

振替　〇〇一四〇―〇―四四三九二

印刷　株式会社廣済堂

製本　ナショナル製本協同組合

2014年3月15日　初刷

ISBN978-4-19-893813-0

（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

徳間文庫の好評既刊



辻堂 魁

仕舞屋侍

書下し

かつて御小人目付として剣と隠密探索の達人だった九十九九十郎。だがある事情で職を辞し、今は「仕舞屋」と称してもみ消し屋を営んでいる。そんな九十郎の家を、ある朝七と名乗る童女が賄いの職を求めて訪れた。父母を失ったという七は断っても出て行かず、父仕込みの料理で九十郎を唸らせる。「侍」のもとで働きたいという七の真の目的とは？九十郎の情と剣が、事件と心の綾を解く！

徳間文庫の好評既刊



片倉出雲
居残り兵庫事件帖
甘露梅の契り
書下し

吉原の元締の妓楼に「吉原の難事、大小問わず引受申し仕り候」と看板を掲げる一人の居残りが居た。男の名は楯兵庫。大名でさえ帯刀を許されない吉原で、唯一二尺四寸の太刀を差す凄腕の居残りが引き受けた依頼は、遊女たちの間で流行り始めた危険な毒煙草の出所を探ること。すでに客にも被害が出始め、一刻の猶予もない。探索を始めた兵庫を待ち受ける悪とは!? 「廓の探偵」見参！

徳間文庫の好評既刊



六道 慧

公儀鬼役御膳帳

書下し

木藤家の御役目は御前奉行。その主な役割は将軍が食する前に味見をして、毒が盛られることを未然に防ぐ、毒味役である。しかし、当主・多聞の妾腹の子・隼之助は、父に命ぜられ、町人として市井で暮らしていた。憤りを抱えつつ、長屋での暮らしに、お節介な年寄りたちや友人たちのおかげで慣れてきた頃、父から塩問屋の山科屋に奉公しろと……。

徳間文庫の好評既刊



六道 慧

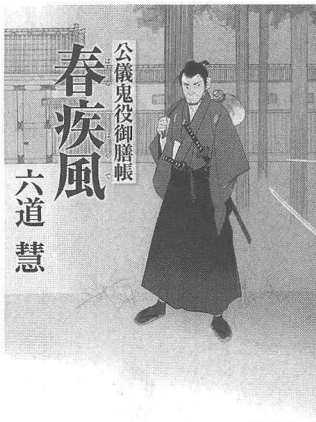
公儀鬼役御膳帳

連理の枝

書下し

隼之助は、御膳奉行を務める木藤家の次男だが、父の命で長屋暮らしをしている。ある日、近所の年寄りに頼まれ、借金を抱え、困窮する蕎麦屋の手伝いをすることになった。家賃の取り立てに来た大家を、父に同行した諸国で知った旨い蕎麦を再現し、唸らせ、期限を引き延ばすことに成功する。その頃、彼の友人・将右衛門は、辻斬りに遭遇し……。

徳間文庫の好評既刊



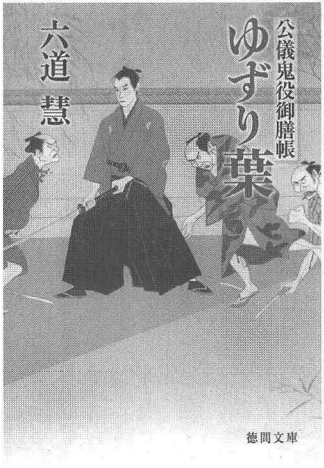
六道 慧
公儀鬼役御膳帳
春疾風（はるはやて）

書下し

将軍が食する前に味見をして毒が盛られることを防ぐ役目の御膳奉行。だが御膳奉行の頭である木藤家の役割はそれだけではなかった。父・多聞の命を受け、〝鬼役〟を継いだ隼之助は、町人として暮らしながら幕府に敵対する一派を探索する。隼之助の優れた〝舌〟は、潜入先の酒問屋〈笠松屋〉が扱う博多の白酒に罠の匂いを感じとった。隼之助とともに、友が、御庭番が江戸を走る！

徳間文庫の好評既刊

六道 慧
公儀鬼役御膳帳
ゆずり葉



書下し

父・多聞の跡を継ぎ、御膳奉行の頭として〝鬼役〟となった木藤隼之助。愛しい波留との婚約も認められ、人生の喜びを味わったのも束の間、次々と新たな試練が襲いかかる。潜入先の造醤油屋〈加納屋〉で、隼之助の鋭い味覚が捉えた「刹那の恐怖」は、悲運の予兆だったのか。将軍家に謀反を企てる薩摩藩の刺客の剣が、そして新たな謀略の刃が、隼之助の愛する者に襲いかかる……！

徳間文庫の好評既刊



六道 慧
公儀鬼役御膳帳
外待雨（まちあめ）

父・多聞の死、許嫁（いいなずけ）である水嶋波留の失踪――深い苦しみに耐えながら、隼之助は希望を失っていなかった。父の薫陶、波留の優しさを支えに鬼役としての責務を果たそうとする。新たな潜入先は、茶問屋〈山菱屋〉。この店の主が点てた茶からは、妻への深い愛と哀しみの味がした。山菱屋は幕府に楯つく薩摩藩の手の者なのか、それとも？　隼之助の〈鬼の舌〉は、天下と愛しき者を守れるか？

徳間文庫の好評既刊



山同心花見帖

六道 慧

書下し

徳川幕府最後の年となる慶応三年二月。上野寛永寺で将軍警備の任についていた若き山同心、佐倉将馬と森山建に密命がくだった。江戸市井に住み、各藩の秘花「お留花」を守れという。花木を愛し「花咲爺」の異名を持つ将馬には願ってもないお役目。しかも、将馬が密かに恋する山同心目代の娘・美鈴が同居を申し出る。このお役目に隠された、真の目的とは……。待望の新シリーズ開幕！

徳間文庫の好評既刊

六道 慧

山同心花見帖

慶花の夢



書下し

薩長との戦が迫る幕末の江戸。「花守役」として各藩を探る任についた山同心の佐倉将馬は、仕舞た屋でよろず屋稼業に精を出していた。密かに心を寄せる目代の娘・美鈴と夫婦を演じるのが嬉しい。血腥い世だからこそ愛しい人と花々を守りたい。だが将軍暗殺を試みた毒薬遣いの一味が江戸に潜伏。将馬は探索先の旗本屋敷で思いがけない者の姿を目撃する。深紅の変化朝顔が語る真実とは？

9784198938130

ISBN978-4-19-893813-0
C0193 ¥660E (0)

1920193006605

定価：本体 660円＋税

将軍慶喜が大政奉還を奏上、戦の足音が迫る幕末。幕府山同心の佐倉将馬は、慶喜暗殺を試みる毒薬遣いの一味を追い、血風吹き荒れる京に入った。新選組とともに毒薬遣いの者を追いながら、将馬の心は激しく揺れる。かつて兄と慕った坂本龍馬の命が危うい。将馬は、龍馬を京から逃がそうとするが……。幕末スター総出演！　新たな日本と民のために戦う若者たちの姿を描く青嵐小説第三巻！

（時代小説・書下し）

徳間文庫